

KU-DP

金沢大学・
知識集約型社会を支える
人材育成事業 (KU-DP)
アニュアルレポート 2024

金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP） アニュアルレポート 2024

目 次

I. はじめに

1. 巻頭言 . . . 4

II. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）実績概要

1. 令和6年度の事業取組概要 . . . 6
2. 数値目標の達成状況 . . . 14
3. 文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）に関する意識調査結果（学生・教員対象）
. . . 15
4. 幹事校としてのリーダーシップ . . . 17
5. 文理融合・STEAM 教育を通じた人材育成エコシステムの構築 . . . 20

III. 融合学域に関する取組実績

1. 融合学域3学類の取組概要 . . . 23
2. 融合学域のカリキュラム概要 . . . 28
3. 融合学域における学修の進捗状況・達成状況（学修成果の把握・可視化） . . . 31
4. 融合学域先導学類1期生の進路状況 . . . 35
5. 融合学域先導学類における留学・国際インターンシッププログラム . . . 37
6. 融合学域における学生を中心とした各種活動 . . . 38

IV. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）に関する取組実績

1. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）のカリキュラム概要 . . . 41
2. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の学修目標 . . . 43
3. 「融合先導知概論」「融合先導知実践演習」の取組 . . . 44
4. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の修了状況 . . . 51
5. 「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」
令和6年度追跡調査結果 . . . 52
6. アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援の取組 . . . 56
7. KU-STEAM 学生スタッフの取組 . . . 59

V. 新しいリベラルアーツ教育・STEAM 教育に関する取組実績

1. 共通教育科目 GS 科目6群の取組 . . . 61
2. 学域 GS 科目の取組 . . . 62
3. デザイン思考テストの実施 . . . 63
4. 大学院 GS 科目の拡充 . . . 64

VI. 教学マネジメントセンターに関する取組実績

1. 教学マネジメントセンターの業務概要 . . . 67
2. FD・SD 活動の枠組と実績 . . . 69
3. 学士課程・大学院課程の質保証に関連する環境整備 . . . 71
4. 教学 IR 環境整備 . . . 77
5. 全学教育・国際共修機構の創設 . . . 78

VII. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）イベント報告

1. 令和 6 年度第 1 回採択校連絡会 . . . 80
2. 令和 6 年度第 2 回全学 FD 研修会「文理融合・STEAM 教育に関連した授業設計とは ～教養教育, 専門教育など多様な観点から考える～」【「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」幹事校企画】 . . . 81
3. 知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）採択校合同企画「未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン）～『知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）』が創造する大学教育の未来～」 . . . 84
4. 令和 6 年度第 1 回 FD・SD ラウンジ「国立大学における探究型入試の今後の方向性」 . . . 87
5. 令和 6 年度第 3 回全学 FD 研修会・KU-DP アドバイザリーボード「イシューベースラーニングのすすめ ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」 . . . 88
6. 令和 6 年度第 2 回採択校連絡会 . . . 91
7. 令和 6 年度第 2 回 FD・SD ラウンジ「DX や IR に関する取組紹介と今後の可能性～身近なソフトウェア活用から Microsoft365 や生成 AI の活用事例まで～」 . . . 92
8. 「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」共通テーマ 3 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024「文理横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える ～文理融合・STEAM 教育の時代における新しい学修支援～」 . . . 93
9. 高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2024 ～高校生の探究心に火を灯す～」 . . . 97
10. 令和 6 年度第 3 回採択校連絡会 . . . 101
11. 文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）総括シンポジウム「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ ～DP 事業が目指し、創り上げてきた成果～」 . . . 102

VIII. 活動日誌・編集後記

1. 活動日誌 . . . 109
2. 編集後記 . . . 111

I. はじめに

巻頭言



金沢大学長 和田 隆志

私たちは今、「社会の大きな転換点」に直面しています。AI や DX（デジタルトランスフォーメーション）の活用によって描き出す「未来社会への出発点」に立っています。

本学は、文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」の採択をうけ、令和2 年度から「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」に取り組んできました。このプログラムは、かつてない変化に直面する社会に対応するための教育改革です。深い専門性を基盤としながら、広範な教養と文理融合の知識をもって新たな世界の価値創造に挑む、領域横断型の STEAM 人材の育成を柱としています。

本プログラムではこれまで、金沢大学＜グローバル＞スタンダード（KUGS）を体現するリベラルアーツ教育を大幅に拡充してきました。本学は、文理医融合を意識した「未来知」により現代ならびに未来の課題克服、解決そして新たな価値を創造したいと考え、新学域「融合学域」を設置する等、大胆な教育改革も進めてまいりました。さらに、この融合学域を中心に展開する未来志向型教育をすべての学域に浸透するべく「先導 STEAM 人材育成プログラム」の拡充に注力しています。総合大学が誇る多分野の専門性に、広範な教養と文理融合の知識を組み合わせ、次なる時代を描き出す知性、すなわち「未来知」を体現する STEAM 人材を、全学体制で育んでいきます。

また、本学は DP 事業の幹事校に選定され、他の採択校との連携の下、各大学が集約し磨き上げた多彩な「知」を、全国の高等教育機関に波及させる取組を展開してきました。令和6 年度の事業終了後も、この「社会の大きな転換点」から、持続可能な希望ある未来社会を創成するべく、今後も引き続き着実に歩を進めてまいります。

関係の皆様におかれましては、本学の取組に今後ともご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Ⅱ．金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業 (KU-DP) 事業実績概要

1. 令和 6 年度の事業取組概要

1.1 進捗状況の概要

(1) 本事業計画の進捗状況や成果

本事業計画の主要項目は、「①融合学域の設置」「②先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の新設」「③学士課程のリベラルアーツ科目である共通教育科目 GS 科目と学域 GS 科目の拡充」「④全学的な教育改革の司令塔としての教学マネジメントセンターの設置」である。学長が機構長を務めるグローバル人材育成推進機構の下に、教育担当理事を委員長とする「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム運営委員会」、教学マネジメントセンター長を兼務する副学長を委員長とする「同プログラム企画実行委員会」を配置し、学長・理事のリーダーシップにより事業推進している。

令和 6 年度には、本事業取組の全体的な広がりを把握するため、本学学生・教員を対象とした「文理融合・分野横断教育 (STEAM 教育) に関するアンケート」を令和 4 年度に続き実施したほか、本事業で開発した教育プログラムの有効性や学修成果を把握するため、融合学域先導学類生 (1 年次～3 年次) を対象としたアセスメントテスト、共通教育科目 GS 科目 6 群の一つである「デザイン思考入門」受講者を対象としたデザイン思考テスト、先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) コア科目に当たる「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」受講者を対象とした追跡調査を継続実施し、現状把握と効果検証を行うことで、事業取組の改善充実及び補助期間終了後の自走化計画に活かした。

また、高大接続を目的とした「探究・STEAM フェスタ」、実践インターンシップ成果合同発表会を兼ねたアドバイザリーボードの継続実施を通して、大学教育に留まらず、学校教育から社会への接続を意識した人材育成エコシステムの構築と定着を進めた。

さらに、幹事校として、令和 4 年度から続ける採択校同士による共通テーマチームの各種取組をリードしつつ、本事業最終年度に当たり、成果発信シリーズと称し、8 月・12 月・3 月の 3 回にわたり成果発信を行い、本学の取組に留まらず本事業全体の最終成果発信を行い、新しい大学教育につなぐメッセージを社会に届けた。

文理融合・STEAM 教育による人材育成エコシステムの構築を目指した取組が評価され、令和 7 年 3 月には、一般社団法人学びのイノベーション・プラットフォーム (PLIJ) 主催、内閣府・文部科学省・経済産業省等の後援による第 1 回「PLIJ STEAM・探究グランプリ」を受賞した。



図表 II-1 「PLIJ STEAM・探究
グランプリ」受賞記念の盾

(2) 目標の達成状況

本事業計画の主要項目が掲げる目標の達成状況を列举すると以下のとおりである。

「①融合学域の設置」では、令和 6 年度開設 4 年目の先導学類では 54 名の学生を新たに受け入れ、アントレプレナーシップやデザイン思考を軸とした講義・演習のほか、4 年次学生対象の融合研究等の確立科目を新たに開講し、イノベーションの創成をリードする社会変革人材の育成を目指している。そのほか、第 2 の学類「観光デザイン学類」では 55 名、第 3 の学類「スマート創成科学類」では 56 名の学生を受け入れた。融合学域先導学類では、初めての卒業者を輩出し、その進路状況について、幅広い業種への企業就職とともに、大学

院進学決定者が3割以上存在することが特徴として挙げられる。

「②先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の新設」では、令和 5 年度委員現地視察報告書による指導助言を参考に、先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) のカリキュラム構成の改善充実を図るとともに、初めての修了者を輩出し、令和 7 年 1 月現在で 402 名の修了者を数える。アカデミック・アドバイザー教員による履修指導や学生スタッフによるピア・サポートを通じたラーニング・コミュニティの充実を図った。全新入学者約 1,800 名対象の履修ガイダンスや全学域学生対象のランチョンセミナーによる説明会を開催した。

「③学士課程のリベラルアーツ科目である共通教育科目 GS 科目と学域 GS 科目の拡充」では、令和 3 年度より、AI・データサイエンス教育、デザイン思考といった 21 世紀型スキルを修得する新しいリベラルアーツ教育を全学展開しており、令和 6 年度には、7,165 名(延べ)の学生が共通教育科目 GS 科目 6 群を受講した。

「④全学的な教育改革の司令塔としての教学マネジメントセンターの設置」では、教学マネジメントを統括する立場から FD・SD 及び教学 IR の刷新を進め、令和 6 年度には FD 研修会を計 20 回開催し、1,348 名の参加者を集めたほか、大学院課程<グローバル>スタンダードの見直しなど、学士課程・大学院課程を通じた教学マネジメントの強化を図った。

(3) 今後の展開等

本学の取組は、令和 7 年 2 月に公表された中央教育審議会『我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）』に明記された「育成すべき人材像」や「未来社会を担う人材に必要な資質・能力」の変容に伴う大学教育のカリキュラムやコンテンツを含めた高等教育システムの再構築に資する「文理融合・STEAM 教育モデル」を提供するものであり、その使命は大きく、教育成果・学修成果を引き続き分かりやすく社会に発信していくことに努めていきたい。併せて、幹事校として、本事業共通の成果を全国の大学等が利活用できるプラットフォームを構築してきた基盤を活かしながら、採択校同士のネットワークを柔軟に維持していきたい。

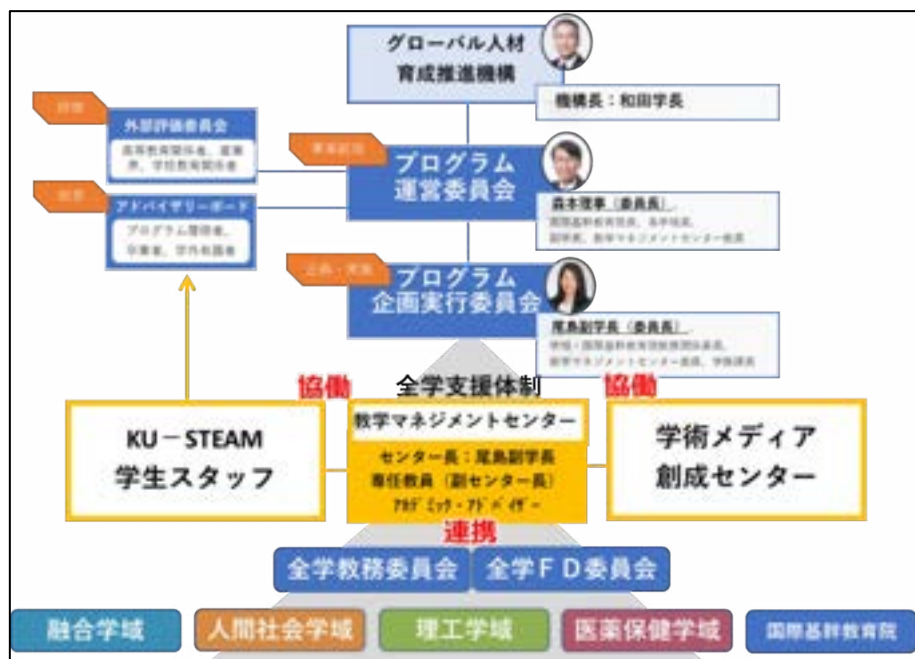
1.2 事業計画の実施体制

(1) 学内の実施体制

本事業は、学長を機構長とする「グローバル人材育成推進機構」の下で展開する。「グローバル人材育成推進機構」は、本学の憲章に掲げるグローバル人材の育成を学士課程から博士課程まで、全学を挙げて実現するため、その方針を策定し、学域間、研究科間の横断的な教育プログラムを企画・運営する組織である。本事業の実施にあたり、令和2年度に「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム運営委員会」（プログラム運営委員会）を設置する諸規程の整備を行った。教育担当理事を委員長とし、学域長、国際基幹教育院長等が参画することで、全学的な見地に立った事業運営を行う体制とした。運営委員会の下には、本事業の企画(Plan, Action)の実務を担う「プログラム企画実行委員会」、評価(Check)を担う「外部評価委員会」及び本事業取組に関する助言や支援を行うステークホルダーからなる「アドバイザーボード」を置いた。

事業の実施(Do)は、全学の教務委員会・FD委員会の所轄下で、本事業で設置した「教学マネジメントセンター」が中心となり、教育DXを掌る学術メディア創成センターと協働しながら、各学域等部局と連携する体制とし、客観的な視点によるPDCA サイクルの確立とプログラムの質保証を図った。プログラム企画実行委員会は、教学マネジメントセンター長を務める副学長（教育改革・企画評価担当）を委員長として、各学域の教務・FD委員などから構成する。本学の教学マネジメントを一元管理する「教学マネジメントセンター」に関しては、本事業の要として位置づけるものであり、戦略的な人員配置の見直しを学内で行い、国際基幹教育院高等教育開発・支援部門における経験を有する教員を教学マネジメントセンターに配置するとともに、他大学での教学マネジメントに関し経験豊富な教員を新たに配置したほか、アカデミック・アドバイジング担当の特任教員を採用した。また、共通教育科目GS科目6群の新設科目を担当する教員の配置も優先的に実施している。更に、幹事校業務遂行のため、非常勤事務職員1名を雇用し、大学間調整・情報発信を進めた。

令和6年度において、プログラム運営委員会を1回、プログラム企画実行委員会を2回、教学マネジメントセンター運営会議を11回開催したほか、KU-STEAM 学生スタッフ64名を得て、教職学協働による事業推進に取り組んでいる。また、本事業に関する外部評価委員及びアドバイザーボードメンバーを委嘱し、事業2年目以降の取組内容の外部評価及び指導助言を受けながら、改善充実を図るPDCA サイクルを構築している。事業取組の進捗管理と好循環サイクルを創出しながら、本事業取組全体及び教育プログラムの質保証を進めている。外部評価委員は、高等教育関係者3名、学校教育関係者1名、企業関係者1名の5名で構成している。アドバイザーボードは、プログラム・授業科目開発パートナー・サポーター、本学卒業者などの多様なステークホルダーからなる本事業の応援団という位置付けで、現在114の個人または組織が参画し、事業開始初期に比べ2倍以上に増えた。



図表 II-2 「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」実施体制

(2) FD・SD 実施体制

本学では、教育担当理事が所掌する本学の基幹会議である教育企画会議の下に、学長補佐、各学域、各研究科を担当する教員、国際基幹教育院教員、教学マネジメントセンター教員から成る「全学 FD 委員会」を組織し、「金沢大学における FD 活動指針」のもと、FD だけではなく、SD も含めた基本的事項を定め、全教職員に共通認識を図っている。毎年度の具体的な企画立案については、教学マネジメントセンターが主導しながら、FD・SD、教学 IR の改善充実を図りつつ、全学的な FD・SD 活動とともに、各部局において独自に実施する FD（部局 FD）の支援に取り組んでいる。特に、令和 3 年度以降、教育成果と学修成果の把握と可視化を強化するため、学生授業評価アンケート、卒業・修了者アンケートの見直し及び卒業・修了後アンケートの新規実施などを通して教学 IR 環境基盤を整備し、大学全体・学位プログラム・授業科目レベルの教学マネジメント強化を目的とした FD・SD を展開している。さらに、文理融合教育を通して個別最適化した学修支援をきめ細かく行う観点から、附属図書館、高大接続コア・センター、キャリア支援課などの関連部署と連携しながら、アカデミック・アドバイジングやピア・サポート等をテーマとした FD・SD 活動の充実を進めている。

(3) 学内への周知徹底

令和 2 年度に構築した金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）専用 Web サイトに加え、令和 3 年度からの事業取組の本格実施に伴い、学内向け広報を強化し、目的に応じた広報資料の計画的刊行を進め、本学公式 Web サイトや SNS を活用した周知徹底を図っている。新たに開発した広報資料は、各種取組のダイジェストを広報する『教学マネジメントセンターニュースレター』、令和 3 年度に先行実施した先導 STEAM 人材育成プログラムの教材コンテンツを集めた『先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）実践報告書 2021（教材コンテンツ集）』、学生向け『先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）紹介パンフレット』、各年度の事業報告書を兼ねた『KU-DP アニュアルレポート』であり、定期的に刊行している。令和 5 年度には、『先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）履修ガイドブック』を新たに刊行し、当該プログラムの履修内容や履修手続きの浸透に確実な成果を上げた。

また、KU-STEAM 学生スタッフが中心となり、事業取組紹介等の動画作成・配信も進めている。さらに、先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）のロゴマークについて、KU-STEAM 学生スタッフの意見等を取り入れながら、右図のとおり作成・公表し、学生・教職員の認知度向上に努めている。

多様な広報媒体を利活用しながら、全学域の入学者を対象としたガイダンス及び初年次科目『大学・社会生活論』における先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の紹介に



図表Ⅱ-3 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）ロゴマーク

加えて、本事業取組紹介及び KU-STEAM 受講者獲得を目的としたランチョンセミナー（昼休み時間のミニセミナー）を創設し、連続的に企画開催している。ランチョンセミナーでは、教学マネジメントセンター教員、KU-STEAM 学生スタッフ、関係する学内部署の教職員が登壇することで、学生・教職員が気軽に集い、ネットワーキングできる場づくりを行っている。同セミナーでは毎回、参加者アンケートを行って参加者の満足度やニーズを把握し、学内広報や各種企画の改善充実に役立てている。

令和 6 年度には、4 月 24 日（水）～5 月 31 日（金）の期間において、附属図書館ギャラリー α スペースにて、STEAM 教育に関する企画展示を初めて行った。具体的には、「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）」の開講科目の一つである「泉鏡花と金沢アート」令和 5 年度受講者のグループ提案について、STEAM 教育における「A（Art）」を活かした授業成果物の展示のほか、先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）のカリキュラム内容や「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」に関する授業成果物を展示した。

（4）評価体制の整備

本事業では、年度ごとの事業取組の自己評価を適切に実施できる体制を整備している。内部評価として、教学マネジメントセンターが毎年度作成する自己点検・評価報告書『KU-DP アニュアルレポート』に基づき、プログラム運営委員会及びプログラム企画実行委員会が点検・評価を行っている。

また、外部評価として、事業内容に精通した高等教育専門家 3 名（カリキュラム・マネジメントや FD の専門家 1 名、理工系教育や教育 DX の専門家 1 名、教学 IR やアセスメントの専門家 1 名）、高等学校関係者 1 名、企業関係者 1 名の計 5 名を外部評価委員に委嘱し、令和 3 年度から毎年度末に外部評価委員会を開催している。外部評価委員会については、事前に提示した評価の観点に基づき「KU-DP アニュアルレポート（自己点検・評価報告書）に記された当該年度の事業取組」に関する事前コメントの準備を依頼し、外部評価委員会当日に講評を受ける形式で行っている。なお、当該外部評価では、事業進捗状況だけでなく、補助金の執行状況も評価することとしている。当該講評は関係者に公表され、翌年度の事業計画に反映する仕組みを確立している。

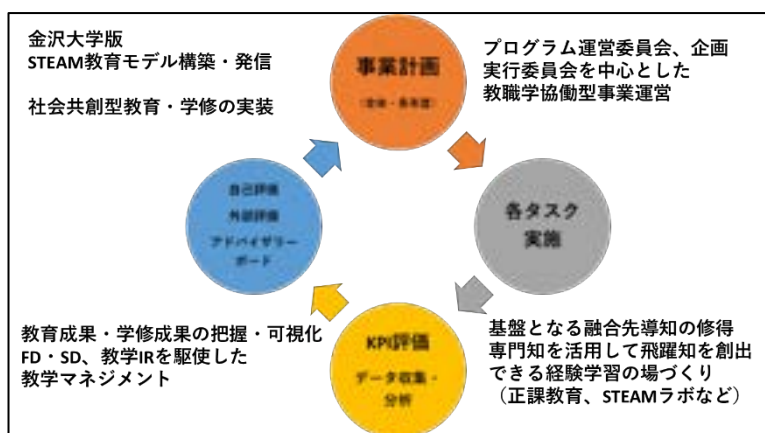
さらに、本事業プログラムオフィサー（PO）による指導助言を改善充実に活かしているほか、ステークホルダーや学生の意見を取り入れる仕組みを導入し、事業実施の PDCA サイクルが実質化するように努めている。具体的には、アドバイザリーボードメンバーによる各種助言のほか、毎年度末に開催する事業成果発信シンポジウムを活用し、教育改革や授業改善に関する意見聴取や新規提案を受ける場としている。これらの機会を通して、専門家による外部評価とは違う観点からの評価を得られるとともに、事業取組の客観性を担保することができ、適切な自己評価に資している。

本事業では、検証可能かつ明確な目標を指標設定して、各種取組を推進している。毎年度作成する自己点検・評価報告書『KU-DP アニュアルレポート』では、当該指標に基づく定量的または定性的なエビデンスを明示しながら、当該取組を分析・検証している。また、プログラム企画実行委員会及び教学マネジメントセンターでは、学生授業評価アンケートやルーブリックを活用した学修成果の可視化を中心に、各年度の経年変化や多角的な分析を

通して、改善・充実に取り組んでいる。さらには、他の DP 事業採択校の取組、関連する国内外の文理融合教育等に関する情報収集に努め、本学の DP 事業の進捗状況や独自性について比較検証しながら、さらなる事業推進を図っている。

特に、令和3年度からは、内部評価と外部評価を連携させながら、評価体制を強化・充実した。外部評価で受けた講評やコメントを重視し、翌年度の事業計画に最大限活用する PDCA サイクルを構築（図表Ⅱ-4 参照）している。

具体的には、外部評価を受けた翌年度最初のプログラム運営委員会及びプログラム企画実行委員会において、外部評価委員からの講評やコメントに関する対応策を作成し、具体的な活動計画を立案するようにした。このことにより、事業取組の改善・充実に積極的に取り組むことができるようになり、次回



図表Ⅱ-4 事業取組の好循環サイクル（質保証）の概要

の外部評価委員会における事業報告項目が明確化されることとなった。外部評価を活かした PDCA サイクルを軸とすることで、事業取組の改善点が明確化し、かつ、改善方策の方向性が具体化され、事業全体の進捗状況が一層可視化された。なお、毎年度の外部評価では、評価の観点を事前に提示し、当該観点に沿ったエビデンスを準備し、各種検証を行うこととしている。

【評価体制（外部評価）及び令和5年度取組概要】

金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）では、適切な進捗管理と改善のため、外部評価委員として、事業内容に精通した高等教育専門家のほか、学校教育関係者、企業関係者に委嘱している。外部評価は、毎年度作成するアニュアルレポート（自己点検・評価報告書）をもとに、外部評価委員が事業の進捗状況や補助金の執行状況进行评估する。令和5年度の外部評価については、以下に掲げる対象項目及び観点に沿って行った。

《外部評価の対象項目》

【外部評価の対象項目】

(1) 事業全体に関する取組

- ① 事業実施体制
- ② 事業取組の進捗状況、学外に向けた成果発信・波及効果
- ③ 事業期間終了後の当該取組の継続性・持続性
- ④ 幹事校としての取組状況

(2) 教育プログラム開発と学修成果の取組（融合学域、先導 STEAM 人材育成プログラム、共通教育 GS 科目・学域 GS 科目など）

- ① 融合学域の取組状況

- ② 先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の取組状況
 - ③ 共通教育 GS 科目・学域 GS 科目によるリベラルアーツ教育・STEAM 教育の取組状況
 - ④ 上記の教育プログラム開発を通じた学修成果の状況
- (3) 教学マネジメント体制とその取組
- ① 教学マネジメントセンターの取組状況
 - ② 教学マネジメント関連の FD・SD, 教学 IR の取組状況
 - ③ アカデミック・アドバイジング等の学修支援体制の整備

1.3 本事業プログラムを通じた全学的なマネジメント改革への対応状況

(1) 全学的教学マネジメント体制の構築

令和 2 年度の本事業採択を契機に、全学的な教学マネジメント改革を推進するため、国際基幹教育院に設置されていた FD 支援組織である高等教育開発・支援部門を発展的に解消し、教育担当理事直下に教学マネジメントセンターを新たに設置することで、全学的視点に立った FD・SD 活動の充実に加え、教育成果・学修成果の把握・可視化を徹底するために、教学 IR 機能を強化した。令和 3 年度には、教育担当理事の指示のもと、学生授業評価アンケート及び卒業・修了者アンケートの大幅な見直しに加え、卒業・修了後アンケートを新たに実施することで、入口から出口にかけてのエンロールメント・マネジメントを意識した教育・学修データ活用による教学マネジメントのための環境を整えた。令和 4～6 年度にかけて、学士課程教育・大学院教育を対象に、三つの方針に基づく学位プログラムレベルの教学マネジメントの強化に加え、学類長等との対話型 FDを進めた。

教学マネジメントセンターは、文理融合・STEAM 教育の全学展開の司令塔として、学長・理事のリーダーシップのもと、本事業に関する運営委員会及び企画実行委員会での企画立案及び執行管理を掌っている。文理融合・STEAM 教育におけるカリキュラム・マネジメントでは、学校教育や地域・企業等のステークホルダーと協働した高大連携やインターンシップ等の取組を通して、相互評価しながら人材育成の質向上を図っている。

また、学修者本位の教育の実現に向け、本事業取組をエンジンとして、教員・職員・学生が協働した「教職学協働」の仕組みを取り入れた全学的な教学マネジメント体制を構築している。具体的には、KU-STEAM 学生スタッフが本事業に参画し、先導 STEAM 人材育成プログラムにおける授業サポーターとしてピア・サポート活動に関わることを通して、履修者が「自ら学び、自ら育む」自律的学修者として成長する支援を行っている。教員によるアカデミック・アドバイジングと学生同士によるピア・サポートを融合した学修支援モデルを確立し、学修者本位の教育の実現を推進している。併せて、ICT 技術の活用により「個別最適化した学修」の実現に向け、ポストコロナ時代の新たな教育手法の実現・開発を目指し、デジタルコンテンツ・VR 教材の活用等、教育 DX の推進に取り組んでいる。

(2) 学長のリーダーシップによる迅速かつ強力なガバナンス改革

本学では、世界の潮流を見据え、国の動向と連動しながら、学長の強いリーダーシップによるガバナンス強化と戦略的な大学マネジメントを基盤に、「地域と社会に開かれた教育重

視の研究大学」を基本理念とし、機能強化に向けた大学改革を推進してきた。令和4年度には、和田現学長による「金沢大学未来ビジョン『志』」が明示され、文理融合型教育の拡充による「金沢大学ブランド人材」の育成に一層積極的に取り組んでいる。学長が機構長を務める「グローバル人材育成推進機構」の下で事業全体を運営する学内体制により、学長主導で迅速かつ強力に大学全体の教学改革を断行している。令和6年9月には、「金沢大学未来ビジョン『志』 Version UP2024」が新たに公表された。

本事業では、社会の変化に対応し、学問領域の壁を越えた幅広い知識と深い専門性を併せ持つ社会変革先導人材を育成するため、文理融合型の学位プログラムである「融合学域先導学類」を令和3年度に設置したことを皮切りに、令和4年度に第2の学類「観光デザイン学類」、令和5年度に第3の学類「スマート創成科学類」を設置し、学生受入れが進んでいる。本事業で計画した「①融合学域の設置」「②先導 STEAM 人材育成プログラムの開講」「③共通教育科目 GS 科目 6 群の開講、学域 GS 科目の拡充」の整備が既に完了し、学士課程における文理融合教育が加速した。この動きを大学院教育に波及させるべく、令和4年度から研究科横断型の大学院 GS 基盤科目（修士・博士前期課程）・大学院 GS 発展科目（博士・博士後期課程）を開講し、高等学校・学士課程・大学院課程にわたり、文理融合・STEAM 教育を展開する高大院接続型教育の推進を進めている。

以上のとおり、本事業で新設した「教学マネジメントセンター」を司令塔として、学士課程教育のみならず、大学院教育を含めた全学的な教学マネジメント改革に邁進している。



図表 II-5 金沢大学未来ビジョン『志』 Version UP2024 の概要

2. 数値目標の達成状況

令和 6 年度は、融合学域創設 4 年目であり、先導学類が初めて卒業者を輩出する年度であるとともに、文理融合型教育の全学展開を目指す先導 STEAM 人材育成プログラムでも初めての修了者を輩出するなど、本事業を通して取り組んできた教育成果・学修成果が目に見えて表れた年度であった。また、本事業運営の司令塔である教学マネジメントセンターは、学士課程に留まらず、高等学校教育や大学院教育との接続に力点を置いた教学マネジメントの強化を推進した。

融合学域先導学類の学生募集では、入試広報を強化し、新たに配置した広報専門スタッフを中心に、融合学域 NEWS の発行、高校訪問、母校訪問、入試説明会等の多様な募集活動を積極的に展開した。令和 6 年度末には、先導学類が初めての卒業者を輩出し、その進路状況について、幅広い業種への企業就職とともに、大学院進学決定者が 3 割以上存在することが特徴である。

令和 4 年度から新入学者全員へのガイダンスや各種説明を徹底してきたことから、令和 6 年度には「本事業参画学生数」が 7,027 名、「先導 STEAM 人材育成プログラム・プログラム説明会参加者数」は 2,231 名、「アカデミック・アドバイザー面談数」は 1,143 回となり、実績値が目標値を大きく上回る結果となった。特に、先導 STEAM 人材育成プログラムのうち、異分野・異学年が融合・協働する場である発展科目「融合先導知実践演習 A」「融合先導知実践演習 B」「融合先導知実践演習 C」は多くの学類・学年から履修希望があり、定員を上回る人気振りとなった。また、令和 3 年度から全学域学生対象に開講を展開している共通教育科目 GS 科目 6 群については、全学域学生 7,165 名（延べ）が履修した。これらの科目履修を通じた授業評価アンケートによる学修満足度は「95.3%」（Q1・Q2 による暫定値）である。

教学マネジメントセンターでは、前年度に続き、STEAM 教育や教学マネジメントなどをテーマとした全学 FD・SD 研修会を開催するほか、学生・教職員参加型の KU-STEAM ランチョンセミナーを企画し、FD 研修会は計 20 回開催、1,348 名の参加者数を得た。

全学的な STEAM 教育推進に資するブレンド型授業デジタルコンテンツ・教材作成の取組では、KU-STEAM 学生スタッフによる正課教育・正課外活動に関するデジタルコンテンツ作成が進むとともに、従来からの融合学域をはじめ、学術メディア創成センターや VBL（ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー）等との連携を通じた授業デジタルコンテンツ・教材作成を含め、順調に増加している。また、「先導 STEAM 人材育成プログラム」受講経験者を KU-STEAM 学生スタッフに登録する仕組みを構築することで、ラーニングアドバイザー経験者数が順調に伸びた。

以上のように、令和 6 年度までの目標に対する達成状況は順調であり、補助期間終了後の自走化に向けて、これまで構築した環境を基盤とした持続的取組に努める。

図表Ⅱ-6 数値目標の達成状況（令和7年3月現在）

	R2 年度		R3 年度		R4 年度		R5 年度		R6 年度	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
本事業参画学生数	－	－	50 名	1,864 名	130 名	3,673 名	210 名	5,356 名	290 名	7,027 名
先導 STEAM 人材育成プログラム・プログラム説明会参加者数	－	－	60 名	232 名	60 名	2,139 名	90 名	2,103 名	90 名	2,231 名
学修満足度アンケートにおける満足率	－	－	70%	84.5%	80%	90.6%	90%	95.3%	95%	95.3%
アカデミック・アドバイザー面談数	－	－	50 回	55 回	130 回	666 回	210 回	791 回	290 回	1,143 回
FD 研修会参加者数（本事業実施分）	－	－	100 名	1,149 名	100 名	1,229 名	150 名	1,258 名	150 名	1,348 名
GS 科目第 6 群履修者数	－	－	3,600 名	3,917 名	3,600 名	5,405 名	4,000 名	6,310 名	4,000 名	7,165 名
ブレンド型授業デジタルコンテンツ・教材作成数	5 件	10 件	20 件	28 件	40 件	76 件	60 件	130 件	80 件	177 件
プログラム受講者でラーニングアドバイザー経験者数	－	－	－	－	20 名	24 名	40 名	47 名	60 名	70 名

3. 文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）に関する意識調査結果（学生・教員対象）

令和4年度に、文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）に関する学生・教員向けアンケートを実施したが、その後の学内における認知度・理解度や教育効果を把握するため、DP 事業最終年度にあたり、学生・教員向けアンケートを改めて実施することとした。令和6年度調査結果については、令和4年度調査結果と比較しながら、DP 事業で進めてきた文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）の効果検証に活用することとした。

令和6年度調査実施状況は以下のとおりである。

【回答対象者】

すべての学域学生（正規学生）
すべての専任教員（特任教員を含む）

【回答者数】

学生版アンケート・・・352 名（4.4%）（前回（令和4年度）：473 名（6.1%））
教員版アンケート・・・235 名（18.0%）（前回（令和4年度）：177 名（14.2%））

【実施期間】

令和6年11月28日（木）～令和7年1月27日（月）

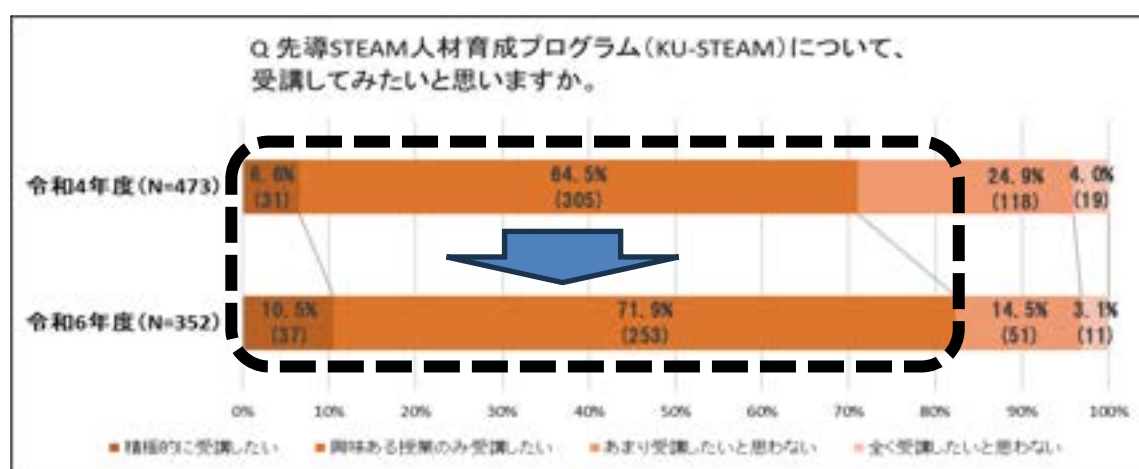
【実施方法】

Microsoft Forms を通したアンケート実施（無記名）

令和4年度調査と令和6年度調査を比較すると、本事業取組を通して、文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）への理解や具体的な関わりの広がりが全般的に見られる。特に、学生の関心度合が確実に向上していることが分かる。以下に、学生と教員の意識変容の度合を表す経年比較を示しておく。

①学生の意識変容

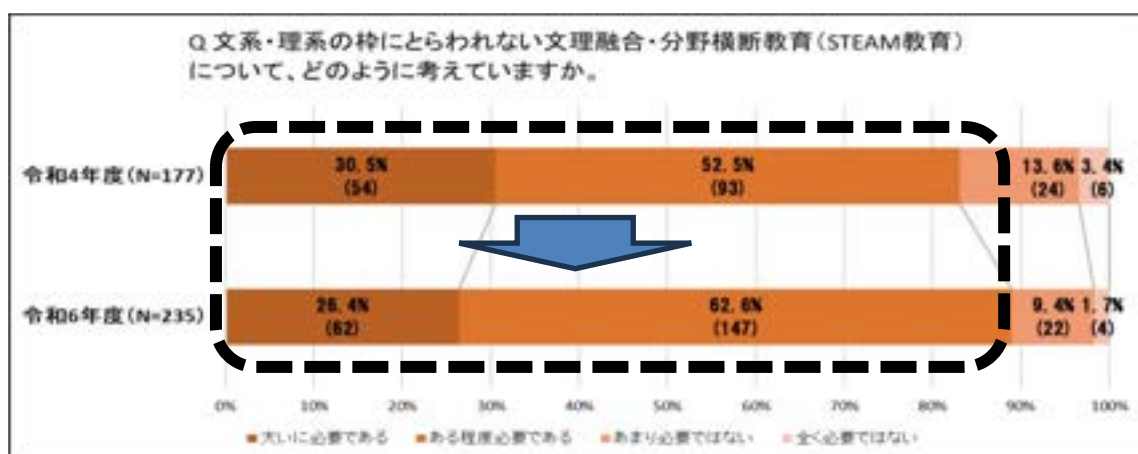
学士課程の全学生を対象とした設問 11「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) について、受講してみたいと思いますか」では、令和4年度から令和6年度にかけて、「積極的に受講」「興味ある授業のみ受講」の割合が「71.1%」から「82.4%」に増加し、先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の受講意欲が大きく伸びている。学生の同プログラムに関する認知度の向上とともに、STEAM 教育への関心度合の向上が見られる。



図表 II-7 文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）に関する意識調査結果（学生対象）（抜粋）

②教員の意識変容

本学専任教員を対象とした設問 6「文系・理系に枠にとらわれない文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）について、どのように考えていますか」では、令和4年度から令和6年度にかけて、「大いに必要」「ある程度必要」の割合が「83.0%」から「89.0%」に増加し、学びに貢献する教員側の意識が確実に向上している。



図表 II-8 文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）に関する意識調査結果（教員対象）（抜粋）

4. 幹事校としてのリーダーシップ

(1) 採択校 9 大学の事業取組の意義と価値

- DP 事業を通して採択校に課せられたテーマは、文理融合、メジャー・マイナー、学年暦、単位制、学修支援（教員・学生・学修補助者の関係性）、イシューベース（課題設定）、高大院接続・大学選抜の新しい姿など、多様である。各採択校の取組には、それぞれに大きな特色があり、個性があることが、DP 事業全体の特徴である。

知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）[R2～R6]	
メニューⅠ 文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム（広さと深さを両立する新しいタイプの教育プログラム）	
大学名	事業計画名
新潟大学	全分野横断型新生プログラム
金沢大学（★幹事校）	融合した専門知と教養な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム
信州大学	全学横断特別教育プログラム「ライフクリエイター人材育成コース」
大正大学	新時代の地域のあり方を模索する地域戦略人材育成事業
東京都市大学	ゲームチェンジ時代の製造業を切り拓く「ひらめき・こと・もの・ひと」づくりプログラム
メニューⅡ 出る杭を引く教育プログラム	
大学名	事業計画名
麻布大学	動物共生科学ジェネラリスト育成プログラム
メニューⅢ インテンシブ教育プログラム	
大学名	事業計画名
千葉大学	インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開
早稲田大学	ソーシャルイノベーション・アクセラレートプログラム
名古屋商科大学	ケースメソッドを補完するフィールドメソッドを活用した学外連携型の教育システムとアントレプレナーの養成

図表Ⅱ-9 採択校 9 大学の取組一覧

- 採択校 9 大学が育んできた特色と個性ある取組は、次代を見据えた教育システム構築へのチャレンジと捉えることができる。令和 7 年 2 月に公表された中央教育審議会『我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）』に明記された「育成すべき人材像」や「未来社会を担う人材に必要な資質・能力」の変容に伴う 大学教育のカリキュラムやコンテンツを含めた高等教育システムの再構築に資するモデルケースを提供するものである。

- 大学教育のカリキュラムやコンテンツを含めた高等教育システムの再構築には、大学と社会との関係性の変化も必要不可欠となっており、DP 事業では、採択校が一丸となり、社会に向けた成果発信をしっかりと行い、学生の学修成果や成長実感を社会に伝えるとともに、企業や地域を巻き込んだ成果発信に努めてきた。

- DP 事業では、採択校それぞれの取組に、大きなテーマやミッションが課されていることから、自大学の取組成果を蓄積・発展させるだけでなく、採択校同士がチームとなり、横断的なテーマについて情報交換・成果発信を行う横串機能として、「共通テーマ」を 4 つ設定して、「共通テーマ」ごとでの取組を自主的に行ってきた。このような「チーム DP」の連携ネットワークの形成は、採択校間における DP 事業に対する一体感や共通理解を向上することに大きく貢献してきた。

- 上記の意義や価値を踏まえつつ、DP 事業 5 年間の取組・成果を今後に繋げるため、DP 事業最終年度の成果発信では、「大学教育の未来を描く」「新しい時代の大学教育につなぐ」を最大のテーマに掲げ、取り組んできた。

(2) 5 年間の事業取組の成果発信のカタチ

DP 事業の特徴として、各採択校の取組それぞれに大きな特色があるため、その個性ある成果を効果的に発信できるよう、令和 6 年度の年間を通じた成果発信シリーズとし、イベント①②で成果・課題や方向性を共有しつつ、年度末開催のイベント③で成果発信の総決算を行う展開とした。

①令和 6 年度上半期に「未来思考型イベント（アイデアソン）」実施

※8 月 28 日（水）@東京都市大学世田谷キャンパス

- ➡教職員、学生に加え、企業関係者、学校関係者、行政関係者を巻き込んだイベント企画。
 - ➡DP 事業で開発したコンテンツや成果を持続的・継続的に活かしていくのか、新しい大学教育の未来を描く。DP 事業による社会的インパクトの見える化を目指す。
- テーマは、「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」が創造する大学教育の未来

②令和 6 年度第 3 四半期に「DP 事業共通テーマ成果発信セミナー（教学マネジメントセミナー2024）」実施 ※12 月 9 日（月）@大正大学巣鴨キャンパス

- ➡共通テーマ 3「多様な学びを支援する方法及びシステムの在り方」に関連した企画。共通テーマ 3 については、学修支援に関するガイドラインを策定・公表しており、当該実績を活かしたセミナー企画。
- ➡学協会（日本アカデミック・アドバイジング協会、日本ピア・サポート学会）との連携企画。

③令和 6 年度末に「総括シンポジウム（DP 事業最終成果発信シンポジウム）」実施

※3 月 6 日（木）@早稲田大学早稲田キャンパス

- ➡各採択事業取組に関わる「教職員、学生、卒業者、企業関係者」が一緒になって、学生の成長実感や社会への効果を中心に成果発信する構成。
- テーマは、「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ
～DP 事業が目指し、創り上げてきた成果～」

(3) DP 事業採択校による共通テーマチームの形成

「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」では、「メニューⅠ：文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム」「メニューⅡ：出る杭を引き出す教育プログラム」「メニューⅢ：インテンシブ教育プログラム」の 3 つのメニューが設定されている。

いずれのメニューにおいても、DP 事業において各採択校が推進する取り組みを通じた教育・学修の成果及び教育・教学マネジメント改革を、深い専門性と幅広い教養をもって社会において新たな価値を創出する人材を育成するために、1 大学のみにとどまらず我が国の高等教育機関に波及させることが命題となっている。

令和 3 年度から、採択校連絡会を通じて、採択校の連携を図ってきたが、上記の命題を採択校が連携を強めて実現すべく、令和 4 年度から「共通テーマ」の取組を始動させた。

共通テーマは、次の 4 つ設定しており、採択 9 大学が各メニューを超えて相互連携することにより、知識集約型社会を支える人材育成事業を通じた各大学の取組の効果を高め、汎用性ある成果を蓄積・発信することを目指している。

各採択校が希望する共通テーマを選択し（複数参加も可能）、各採択校の事業内容や参加希望数を踏まえ、4 つの共通テーマの参加校を確定、各共通テーマにチーム代表校を配置している。

各共通テーマにおいては、チーム代表校が主となり、対面／オンラインでの参加校の議論の場を設けている。以下のとおり、令和 4 年度より、共通テーマごとに、複数回の会議を開催し、全国に向けた成果発信の方向性を協議しつつ、令和 5 年度に入り、具体的な成果物の公表に取り組んだ。令和 6 年度には、さらに具体的な取組成果に関する情報発信に努めた。

● 共通テーマ 1（価値創出）【Ecosystem】

「知識集約型社会を支える人材育成の価値創出及び持続性のあり方を情報交換・検討」

- ・ 構成メンバー：金沢大学（チーム代表）、信州大学、東京都市大学、麻布大学、千葉大学
- ・ 具体的な取組状況：

- ▶ 令和 4 年度以降、計 3 回会議開催。
- ▶ 共通テーマ 1「DP 事業メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲに共通する人材育成のコアコンセプト概要資料」を公開（令和 6 年 3 月 27 日）

● 共通テーマ 2（課題設定）【Setup】

「文理融合教育における課題テーマやイシュー設定のあり方を情報交換・検討」

- ・ 構成メンバー：千葉大学（チーム代表）、名古屋商科大学、新潟大学、金沢大学
- ・ 具体的な取組状況：

- ▶ 令和 4 年度以降、計 5 回会議開催。
- ▶ 構成メンバー校を訪問し合い、学生を交えながら、各採択校の取組について意見交換。
- ▶ 共通テーマ 2 参加校合同主催「文理融合教育における課題設定のあり方」最終報告会を開催（令和 6 年 12 月 5 日）

● 共通テーマ 3（学修支援）【Process】

「多様な学びを支援する方法及びシステムのあり方を情報交換・検討（アカデミック・アドバイジング、ピア・サポート、チューターなど）」

- ・ 構成メンバー：新潟大学（チーム代表）、大正大学、早稲田大学、金沢大学
- ・ 具体的な取組状況：

- ▶ 令和 4 年度以降、計 6 回会議開催。
- ▶ 「多様な学びのための学修支援実務者ガイドライン」公開（令和 6 年 2 月 26 日）
- ▶ 共通テーマ 3 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024『分野横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える～文理融合・STEAM 教育の時代における新しい学修支援～』を開催（令和 6 年 12 月 9 日）

●共通テーマ 4（学修成果）【Outcomes】

「多様な学びの成果の測定及び社会通用性のあり方を情報交換・検討」

・構成メンバー：早稲田大学（チーム代表）、東京都市大学、麻布大学、金沢大学

・具体的な取組状況：

▶令和 4 年度以降、計 4 回会議開催。

▶共通テーマ 4 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2023 「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」を開催（令和 5 年 11 月 28 日（火））

5. 文理融合・STEAM 教育を通じた人材育成エコシステムの構築

本学では、平成 20 年度の学域・学類制の導入に始まり、平成 28 年度の国際基幹教育院の設置、平成 30 年度の国際基幹教育院総合教育部の設置を通じたレイトスペシャライゼーションの導入、さらには、令和 3 年度入学者選抜から全学類での後期日程廃止といった、一貫した教育改革を通して、学修者本位の教育の理念のもと、伝統的なディシプリンを超えた柔軟性ある教育プログラム提供と、学生が自主的に進路選択できる機会提供を図ってきた。本学がリードしてきた教育改革の積み重ねの集大成が、令和 2 年度に採択された文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」で推進する第 4 の学域である「融合学域」の設置と全学域学生を対象とした「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）」の開設を通じた、文理融合・分野横断による STEAM 教育の推進によるイノベーション人材育成である。

本活動では以下に掲げる 3 つの先駆的モデルがエッジとなり、その取組を学内外に波及させている。

(1) 探究・STEAM 教育を軸とした「高大院接続型カリキュラムモデル」

融合先導知概論や融合先導知実践演習を軸としたプロジェクト型学修の推進を通して、高等学校の必修科目「総合的な探究の時間（探究学修）」から大学・大学院での「STEAM 教育」に繋がる高等学校・大学・大学院接続型教育の実現を推進している。具体的には、先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の発展科目「融合先導知実践演習 A（ちょっとマイプロジェクト）」では、高等学校での探究学修コンテンツを活用した授業設計を行っているほか、高校生と大学生・大学院学生が学び合う「探究・STEAM フェスタ」を企画している。既に、高大接続コア・センター主催のラウンドテーブルを通じて、参加した高校生に本事業の PR を行うなど、高大連携の取組を進めている。

一方、地域や企業等が抱える社会課題について社会人と一緒に考え、提案するワークショップ型授業、地域や企業等の現場で社会人と一緒に実践、行動する課題解決型インターンシップ（PBI）を通じた大学・社会接続型教育の実現を推進している。具体的には、融合学域や先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）では、地域や企業等の関係者が学生と一緒に議論し提案アイデアをまとめ、当該地域や企業等の諸活動に反映させる実践型授業を提供するほか、実践インターンシップでは文理融合・分野横断のテーマについて社会人と協働しながらカタチにする「0 から 1 を創り上げる」挑戦・実践力育成のインターンシップを提供する。

これらを一貫したカリキュラムで構成した先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）は、高大院接続型カリキュラムモデルとなっている。

(2) 文理融合・STEAM 教育の学修成果を可視化する「KU-STEAM アセスメントモデル」

文理融合・STEAM 教育を通した学びは多様であり、その学修成果を把握・可視化するため、先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) では、階層別にアセスメント科目を設定したカリキュラムを構築している。当該アセスメント科目では、プログラムループリックを活用した 5 つの力の達成度評価を行うとともに、LMS 等を通して、教員対学生、授業サポーター対学生、学生対学生による多面的な学修プロセス評価を行う。さらには、カリキュラム全体を通した履修の進捗状況や達成度については、学務情報システムを活用した KU-STEAM アワードシステムを導入している。これらを通して、全学的に、文理融合・STEAM 教育の学修成果を可視化する環境

「KU-STEAM アセスメントモデル」が整っており、大学における STEAM 教育に関する学修成果の把握と可視化のモデルとなっている。

(3) アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した「個別最適化学修支援モデル」

文理融合・STEAM 教育を通した学びのプロセスや成果について、個別最適化した学修支援が求められる。従来型のような教員による個別面談や特定のテーマに対するピア・サポート等では不十分であり、教員によるアカデミック・アドバイジングとともに、学生同士が支え合い、学び合うピア・サポートのコンセプトを融合させ、教職学協働によるラーニング・コミュニティを創設することが大事である。本活動では、アカデミック・アドバイザー教員を中心に、KU-STEAM 学生スタッフが連携する形で、ランチョンセミナーや STEAM ラボの場づくりを通して、新しい学修支援スタイルを実現しており、これからの時代のモデルとなる。

以上の 3 つのモデルの創出と波及効果の最大のねらいは、人材育成の川上である「学校教育」から川下である「就業」へと繋がる知識集約型社会を支える人材育成のための協働型エコシステムの構築に尽力し、生涯学び続けられる Well-Being な社会のために貢献できる人材を創出することにある。



図表 II-10 高大院接続を通した STEAM 教育による深く広い学びの概念図

Ⅲ. 融合学域に関する取組実績

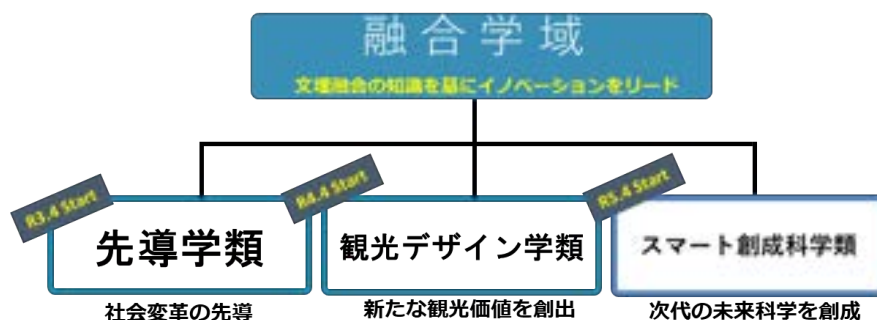
1. 融合学域 3 学類の取組概要

1.1 融合学域 3 学類の学年進行と先導学類初の卒業生輩出

融合学域では、先導学類（令和 3 年度設置）、観光デザイン学類（令和 4 年度設置）、スマート創成科学類（令和 5 年度設置）を順次、設置申請し、認可・開設してきた。

観光デザイン学類では、文部科学省「令和 6 年度 魅力ある地方大学の実現に資する地方国立大学の定員増」事業に選定され、令和 6 年度から入学定員が 35 名増員し 55 名となったほか、スマート創成科学類では、文部科学省「大学・高専機能強化支援事業（高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援）」の採択を受け、令和 6 年度から入学定員が 35 名増員し 55 名となった。

先導学類ではアントレプレナーシップやデザイン思考を軸とした講義・演習のほか、4 年次対象の融合研究等の確立科目を新たに開講し、イノベーションの創成をリードする社会変革人材の育成を目指している。令和 6 年度、先導学類は初めての卒業生を輩出し、その進路状況について、幅広い業種への企業就職とともに、大学院進学決定者が 3 割程度存在することが特徴として挙げられる。



図表Ⅲ-1 融合学域における 3 学類

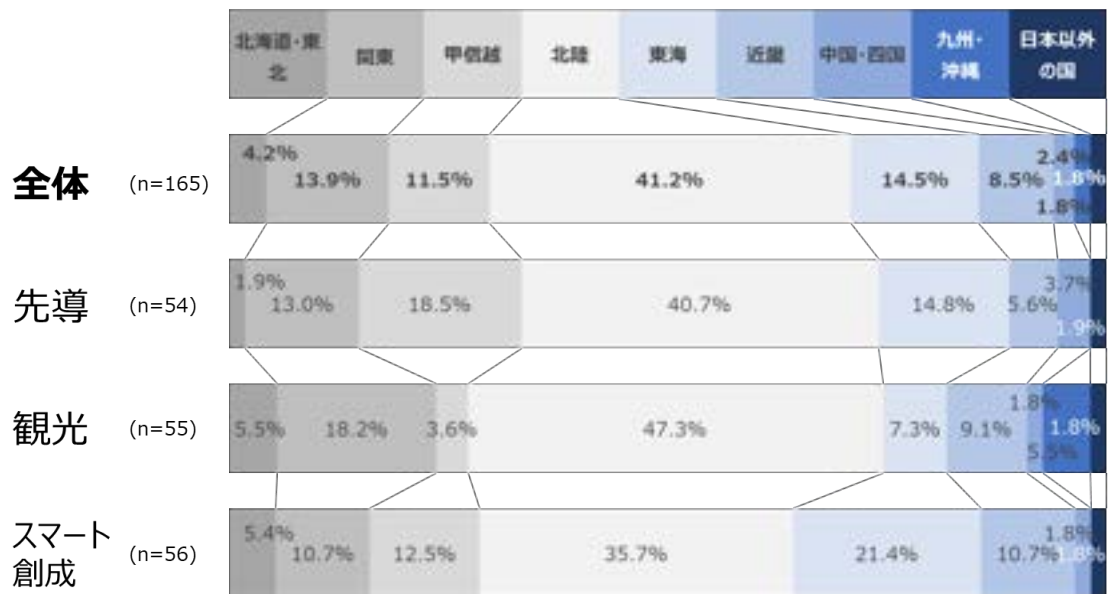
1.2 融合学域の入学者獲得状況

令和 7 年度入学者選抜のうち、一般選抜の志願状況は図表Ⅲ-2 のとおりであり、先導学類が 1.85 倍、観光デザイン学類が 1.68 倍、スマート創成科学類が 1.48 倍となっており、全体として前年度を下回る志願倍率となった。融合学域の入学志願状況については、隔年現象で増加と減少を繰り返しており、長期的視点に立った入学者獲得戦略が望まれる。

図表Ⅲ-2 令和 7 年度融合学域入学志願状況（一般選抜）

学 域	学 類 等		前 期 目 標		
			募集人員	志願者数	志願倍率
融合学域	先導学類	文系傾斜	20	33	1.65
		理系傾斜	20	41	2.05
		小計	40	74	1.85
	観光デザイン学類	文系傾斜	23	39	1.70
		理系傾斜	14	23	1.64
		小計	37	62	1.68
	スマート創成科学類	文系傾斜	15	18	1.20
		理系傾斜	27	44	1.63
		小計	42	62	1.48
	計		119	198	1.66

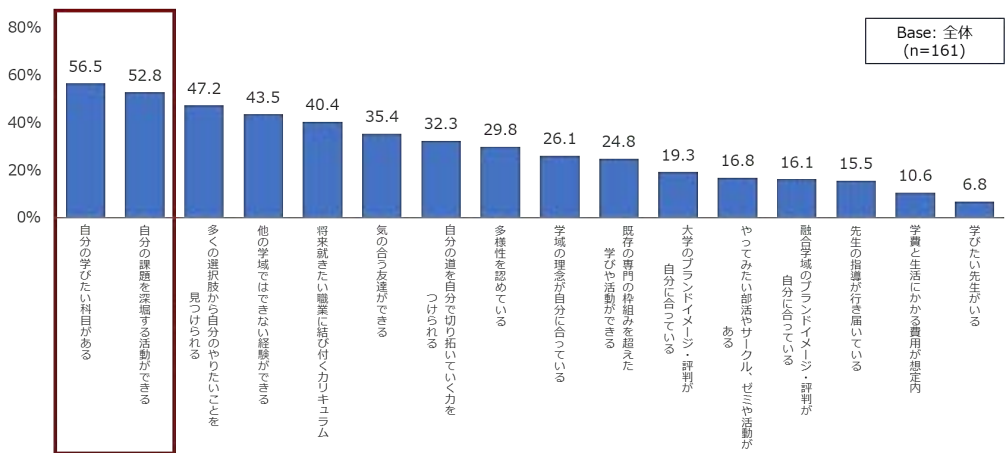
融合学域では、英語総合選抜型、社会人選抜や在外留学生選抜といった同学域独自の入学
者選抜をはじめとした多様な入試を実施している。令和 6 年度入学者は、先導学類 54 名、
観光デザイン学類 55 名、スマート創成科学類 56 名であり、このうち、北陸 3 県出身者は
68 名（41.2%）で、広く全国から学生が結集した。令和 6 年 4 月に実施した新入学者アン
ケートで、融合学域に期待していることとして、「自分の学びたい科目がある」「自分の課題
を深掘する活動ができる」が半数以上の期待として挙げた。



図表Ⅲ-3 令和 6 年度融合学域入学者の出身高校所在地域の割合

融合学域に期待していること（全体）

「自分の学びたい科目がある」「自分の課題を深掘する活動ができる」が半数以上の期待としてあがった。



図表Ⅲ-4 令和 6 年度融合学域新入学者アンケート（抜粋）

図表Ⅲ-5 令和6年度融合学域先導学類入学者選抜試験実施状況

区 分			募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	競争倍率	辞退者	追加合格者	入学者
一般選抜	前期日程	文系傾斜	20	62	3.1	55	27	2.0			27
		理系傾斜	20	45	2.3	42	20	2.1			20
	一般 計		40	107	2.7	97	47	2.1	0	0	47
特別選抜	KUGS特別	総合型Ⅱ	6	5	0.8	5	5	1.0			5
		英語総合Ⅱ	若干名	0							0
	超然特別	A-lympiadⅠ	若干名	0							0
		超然文学	若干名	0							0
	在外留学生推薦		3	0							0
	社会人		若干名	1	—	1	1	1.0			1
	帰国生徒		若干名	0							0
	国際バカロレア		若干名	0							0
	私費外国人留学生		若干名	0							0
	特別 計		—	6	—	6	6	1.0	0	0	6
	合 計		49	113	—	103	53	1.9	0	0	53

上表のほか、令和6年10月期入学在外留学生推薦入試を実施、合格者1名。

図表Ⅲ-6 令和6年度融合学域観光デザイン学類入学者選抜試験実施状況

区 分			募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	競争倍率	辞退者	追加合格者	入学者
一般選抜	前期日程	文系傾斜	26	62	2.4	56	30	1.9	1		29
		理系傾斜	14	23	1.6	21	14	1.5			14
	一般 計		40	85	2.1	77	44	1.8	1	0	43
特別選抜	KUGS特別	総合型Ⅱ [一般枠]	4	4	1.0	4	4	1.0			4
		総合型Ⅱ [特別枠] (地域枠)	6	7	1.2	7	7	1.0			7
		英語総合Ⅱ	若干名	0							0
	超然特別	A-lympiadⅠ	若干名	0							0
		超然文学	若干名	0							0
	在外留学生推薦		若干名	0							0
	社会人		若干名	1	—	1	0	—			0
	帰国生徒		若干名	0							0
	国際バカロレア		若干名	0							0
	私費外国人留学生		若干名	0							0
	特別 計		—	12	—	12	11	1.1	0	0	11
	合 計		50	97	—	89	55	1.6	1	0	54

上表のほか、令和6年10月期入学在外留学生推薦入試を実施、合格者1名。

図表Ⅲ-7 令和6年度融合学域スマート創成科学類入学者選抜試験実施状況

区 分			募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	競争倍率	辞退者	追加合格者	入学者
一般選抜	前期日程	文系傾斜	15	48	3.2	46	18	2.6			18
		理系傾斜	27	58	2.1	56	32	1.8			32
	一般 計		42	106	2.5	102	50	2.0	0	0	50
特別選抜	KUGS特別	総合型Ⅱ	3	1	0.3	1	1	1.0			1
		英語総合Ⅱ	若干名	0							0
		デジタル人材Ⅱ	6	6	1.0	6	2	3.0			2
	超然特別	A-lympiadⅠ	若干名	0							0
		超然文学	若干名	0							0
	在外留学生推薦		若干名	1	—	1	1	1.0			1
	社会人		若干名	1	—	1	1	1.0			1
	帰国生徒		若干名	0							0
	国際バカロレア		若干名	1	—	1	1	1.0			1
	私費外国人留学生		若干名	0							0
	特別 計		—	10	—	10	6	1.7	0	0	6
	合 計		51	116	—	112	56	2.0	0	0	56

融合学域は従来の専門教育ではなく、自分がチャレンジしたい未来の課題解決の学びを自分自身で進めるという全く新しい教育方針を提供する学域であるため、その斬新なコンセプトを高校生や教員、保護者が認知し理解するためには長期的な広報活動が必要となる。令和6年度は、令和5年度10月に着任した広報担当の専門職員を中心に、認知向上のための施策やツール作成を実施した。

大学本部の活動スケジュールに沿い、学域のターゲットとなる高校へのアプローチと周知活動の展開を実施

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
大学本部活動スケジュール	合格発表	入学式	春季学園・キャンパスビジット	編入学入試	夢ナビライブ夏講座 高校説明会	夏季フェスティバル キャンパスビジット		防犯週間入試説明会 夢ナビライブ秋講座	特別活動 調査交付	特別活動 入試	共通テスト 前期日程 試験開始	前期日程 一般選抜
受験生志望 タイミング	志望校選定				希望校選定	志望校決定				志望校確定		
高校向け 出張講演			・ 望本		・ 望本 ・ 望本 ・ 望本 ・ 望本		・ 二本 ・ 金沢西 ・ 石川西	・ 安城東	・ 岡崎西 ・ 望本 ・ 石川西 ・ 札幌西	・ 岡崎	・ 武生東	
在学生 母校訪問					・ 城北埼玉 ・ 西尾 ・ 山口 ・ 堀川東 ・ 豊橋成東 ・ 小松	・ 広島大門 ・ 尾道 ・ 魚津 ・ 文化学園 ・ 岐阜 ・ 小松	・ 新川 ・ 水見					
オリジナル イベント・ 説明会	ミライシゴ つ未来生 と新入生 生400人に パンフ配布		3年生編入 学向けキャン パスビジット (400校に 郵送交付)			総合PRイベ ント・バー ディ	星城高校向 け入試説明 会 河合塾仙台 校金沢先生 講演	防犯・避難 種々キャン パスビジット	アットレブ レナーコン テスト実施		入試直前 オンライン 説明会 石川高専向 け3年次編 入学説明会	4年生卒業 記念バー ディ
その他 広報活動	金沢県立高 校探究クラ スキックオ フサポート	新入生実態 調査 在学生実態 調査 (2・3 年生)		在学生実態 調査 (4年 生) 二本高校 GSサポート①	二本高校 GSキャン プサポート 新パンフ レット作成	学域パンフ レット改訂 総合型入試 のPR	二本高校 GSサポー ト② 新パンフ レット2年 版配布	高校訪問 研究会設立 準備開始	高校訪問 二本高校 STEAM 発表会	高校訪問 二本高校 STEAM 発表会 ライディン グ講座	公募イン タビュー 実施	実践パンフ 改訂 ＜報告作業＞ 学域向けパンフ改訂 新パンフ作成

図表Ⅲ-8 令和6年度融合学域広報活動一覧

主な活動：

■ ミライシコウ金沢での PR

高校生の探究発表会が金沢大学で毎年 3 月に実施される。探究学習に注力する約 400 名の全国とシンガポールから高校生と教員が集うイベントで、融合学域での学びを在学者がポスター発表し、パンフレットを配布した。探究学習と親和性の高い点から高校生に融合学域への学びのつながりをアピールした。

■ 石川県立二水高等学校グローバルソリューション（GS）クラスのサポート

2 年人文科学コース 40 名の探究学習のサポートを教員のべ 9 名と在学者のべ 15 名で 1 年を通じて実施した。課題の設定から研究への落とし込みに対して助言し、夏休みの探究キャンプでは 2 泊 3 日のプログラムの設計やサポートも担当した。融合学域での教育を高校教員も含めて体験する機会を設けた。

■ 融合学域イベント「Here, You Go / Here, We Go」を 8 月 10 日に開催

第 0 回同窓会を大目的とし、外部向け PR と融合学域内交流から融合学域への認知や理解に対するダイナミズムを発生するイベントを開催した。金沢の街なかで週末に開催することで、市民が直接気軽に融合学域を知る機会となることを目指した。企画から当日の運営まで 23 名の融合学域在学者がボランティアで携わり、合計 179 名が来場するイベントとなった。このイベントで配布した融合学域リーフレット（パンフレット簡易版）も学生中心に作成し、在学者の融合学域への理解と愛着を高めることができた。

融合学域イベント「Here, You Go / Here, We Go」を8月10日に開催



図表Ⅲ-9 融合学域イベント「Here, You Go / Here, We Go」フライヤー

■ 英語版学域パンフレットの作成

ソーシャルインパクトへの寄与を目的に、英語版の融合学域パンフレットを作成した。日本人のみならず、海外からの留学生を広く募集できるツールで、融合学域に国籍や価値観も多様な学生が入学することを期待している。

■ 学域ウェブサイトの改訂と公式インスタグラムの再活用

現在学域ウェブサイトの改訂しており、融合学域を志願する人が見やすくわかりやすいウェブサイトとなる予定である。高校生の大学情報はウェブサイトやSNSで収集しているため、公式インスタグラムを再活用し閲覧する高校生がウェブサイトで詳細情報を得られる流れを令和7年度に確立しようとしている。

■ 各種調査を実施・トラッキングすることで広報活動の効果測定を実施

新入学者、在学者には4月のタイミングで、全国の高校生には10月のタイミングで意識と実態、融合学域へのニーズ、認知度や認知経路を量的調査で把握し、活動の効果測定と施策修正などに活用している。今後も引き続き調査を継続し、その結果をトラッキングすることで効果検証をして施策に反映していく。

1.3 融合学域における学生の経済的支援の取組

多様な学生確保に向け、社会人及び外国人留学生を対象とした大学独自の奨学制度を導入している（図表Ⅲ-10参照）。対象となる学生には、入学料、授業料の全額免除に加え、卒業後に地域定着する留学生に対しては、奨学金（10万円/月）の給付や宿舍費の支援を実施する経済的支援策を構築し、学修に専念できる環境を整備している。令和4年度に4名、令和5年度に9名、令和6年度に10名の学生が融合学域独自奨学制度の支援を受けている。

図表Ⅲ-10 融合学域独自奨学制度一覧

入試成績優秀者修学支援制度
融合学域では、学修に専念できる環境を整えることを目的として、入学入学選抜試験（3年次編入学試験を含む。）において優秀な成績で合格した外国人留学生及び社会人を経済的に支援する。入試成績優秀者修学支援制度を設けている。
地域定着外国人留学生修学支援
優秀な成績で合格し、日本での就職を目指す外国人留学生には、入学時からビジネス活用や日本語能力獲得を支援しながら融合学域の教育課程を修得する「文選聯合の地方創生イノベーションを推進するブリッジングプログラム」を推進し、学費免除や給付型奨学制度、学生・留学生宿舍費助成等の支援を行います。
社会人修学支援
優秀な成績で合格した社会人には、入学料の全額及び授業料の全額を免除します。

2. 融合学域のカリキュラム概要

2.1 融合学域の学修目標設定

融合学域3学類では、「三つの方針」を通じた学修目標の具体化を図っており、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー、AP：Admission Policy）において求める人材像を明確化しているほか、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー、DP：Diploma Policy）において学士（学術）の学位を取得するための達成すべき学修成果を具体的に明示している。DPに定めた学修成果の達成のため、教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー、CP：

Curriculum Policy) を定め、かつ、カリキュラムを構成する各授業科目の学修目標と DP との関係性を明確化したカリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーを学生に明示している。

融合学域では、令和 5 年度より「学びの計画書」の充実を図り、DP 達成度可視化システムの運用を始めた（詳細は後述）。このことにより、学年・学期ごとにおける DP 達成度を参照しつつ、学生自らの学修状況の把握と振り返り、さらには、次期の学修計画に活用する自律学修支援の環境が整っている。

先導学類 入学者受入方針 ・様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先したい人 ・多様な制度・慣習等に知的関心を有し、より良い未来社会づくりに貢献したい人 ・最先端の学知を連携・融合し、社会変革に資する新たな先導に挑戦したい人 先導学類 学位授与方針 ・社会変革を先導するための多面的な最新の知見を学び、それを理解する力 ・未来課題を理解し、ヒト・モノ・コトに関する多様な情報を収集・分析する力 ・総合知を背景に課題解決や社会展開に向けて論理的に考える力 ・語学や異文化に関する知見を有し、自己の使命を果たすべく、国際社会で積極的に発信する力 ・事業創造等に高い意欲を持ち、主体的・積極的に挑戦していく姿勢や発想、行動する力
観光デザイン学類 入学者受入方針 ・様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先したい人 ・多様な制度・慣習等に知的関心を有し、より良い未来社会づくりに貢献したい人 ・最先端の学知を連携・融合し、観光に資する新たな価値創出に挑戦したい人 観光デザイン学類 学位授与方針 ・観光価値をデザインするための多面的な最新の知見を学び、それを理解する力 ・未来課題を理解し、ヒト・モノ・コトに関する多様な情報を収集・分析する力 ・総合知を背景に課題解決や社会展開に向けて論理的に考える力 ・語学や異文化に関する知見を有し、自己の使命を果たすべく、国際社会で積極的に発信する力 ・価値創出等に高い意欲を持ち、主体的・積極的に挑戦していく姿勢や発想、行動する力
スマート創成科学類 入学者受入方針 ・様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先したい人 ・多様な制度・慣習等に知的関心を有し、より良い未来社会づくりに貢献したい人 ・最先端の学知を連携・融合し、未来に資する新たな科学創成に挑戦したい人 スマート創成科学類 学位授与方針 ・未来の科学を創成するための多面的な最新の知見を学び、それを理解する力 ・未来課題を理解し、ヒト・モノ・コトに関する多様な情報を収集・分析する力 ・総合知を背景に課題解決や社会展開に向けて論理的に考える力 ・語学や異文化に関する知見を有し、自己の使命を果たすべく、国際社会で積極的に発信する力 ・スマート創成等に高い意欲を持ち、主体的・積極的に挑戦していく姿勢や発想、行動する力

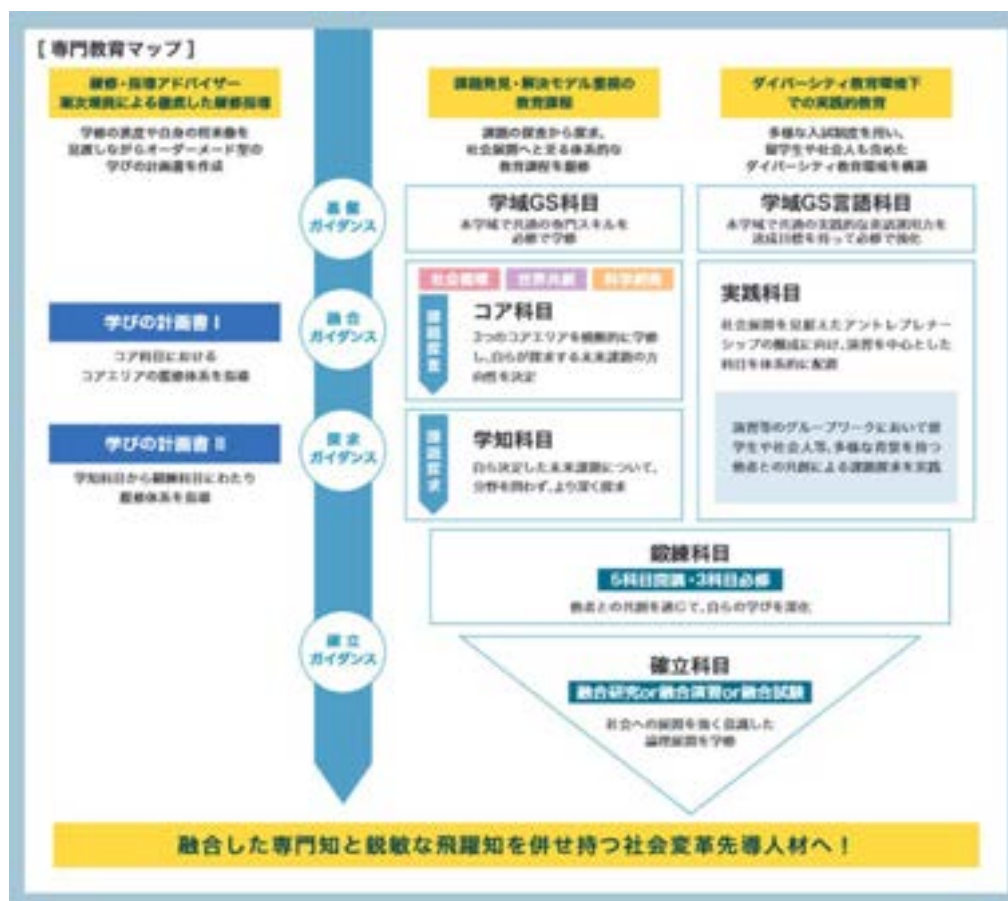
図表Ⅲ-11 融合学域 3 学類の入学者受入方針、学位授与方針

2.2 融合学域の教育課程等

融合学域では、3 学類ともに、教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、卒業時に学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる能力を修得できるよう、「基礎」「融合」「探求」「確立」という四つのステップに沿った教育課程を編成している。同学域では、担当教員間の FD 活動を通して、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、さらには、履修モデルを作成し、適宜、学生に明示している。また、各授業科目シラバスの記載、ディプロマ・ポリシーと各授業科目の学修目標の関係について、全学の新任教員説明会等の FD 研修で周知徹底するとともに、毎年度作成する FD 活動報告書を通して、大学全体と

各学域・学類で検証する仕組みを整えている。

学生は、下図の専門教育マップのとおり、履修・指導アドバイザーによる履修指導を受けながら、オーダーメイド型の「学びの計画書」を作成し、自らの学修を進める仕組みとなっている。



図表Ⅲ-12 融合学域先導学類における専門教育マップ

例えば、先導学類では、専門教育における各科目群の具体的な内容は以下のとおりである。

- アントレプレナーシップを醸成し、社会展開に向けた発想力と実践力を獲得するため、「実践科目」を設け、演習等を中心とした科目を配置。
- 社会変革に向けて必要となるイノベーションの根幹と、未来課題に係る多面的な最新知見を修得するため、「コア科目」を設け、さらに3つのコアエリアに区分し、科目を配置。
- 未来課題の解決に資する知見を獲得するため、「学知科目」を設け、多様な分野の科目を配置する。
- 国際社会における最新の知見や他者との共創による新たな知見の獲得に向け、「鍛練科目」を設け、海外留学や国際インターンシップ、グループワークを行う演習等を中心とした科目を配置。
- 修得した多分野にわたる知見を基に課題発見・解決や事業創造を含めた社会展開を主体的・計画的に行うため、「確立科目」を設け、課題発見・解決や事業創造を含めた社会展開を行うための手法や理論をまとめる科目を配置。

先導学類における具体的な授業実践の事例として、1年次第1クォーターに開講される実践科目「アントレプレナー基礎（必修）」は、地域でのフィールドワークを取り入れた課題発見・解決型授業が繰り広げられ、最終総括として、当該地域に対して提案プレゼンを行っている。今後の学びの出発点となるアントレプレナー・マインドセットの第一歩と位置付ける必修科目であり、アントレプレナー演習Ⅰ/Ⅱ、アントレプレナーインターンシップ、さらには、アントレプレナーコンテストなど、その後も体系的な科目編成としアントレプレナーシップの醸成を行うカリキュラム構成となっている。

鍛練科目に当たる「先導プロジェクト演習」について、令和7年2月に成果発表会を行い、個人またはグループによる学生発表と質疑応答が活発に行われた。

令和6年度から開講が始まった確立科目「融合研究・融合演習・融合試験」（卒業論文相当）について、令和7年2月に発表会を行った。これまでに学んだ知識を踏まえ、主任・副指導教員による複数の指導のもとで、各自が取り組む研究課題に沿って、研究等の企画・計画・実施・分析・とりまとめ・発表を行った。



図表Ⅲ-13 融合学域における「融合研究」「融合演習」「融合試験」発表会の風景

3. 融合学域における学修の進捗状況・達成状況（学修成果の把握・可視化）

融合学域では、先導学類1期生が4年次となり、初めての卒業者を輩出する年度となる中で、学修成果の把握・可視化について、「(1)「学びの計画書」による学修の進捗状況・達成状況の把握・可視化を通じた自律学修機能」「(2) DP（ディプロマ・ポリシー）達成状況や履修科目のバランス等を一覧にて可視化する環境整備」「(3) 外部アセスメントテストの導入により、思考力・態度・行動力を測定し、全国平均との比較」の3項目を中心に環境整備を進めた。

3.1 「学びの計画書」システム整備

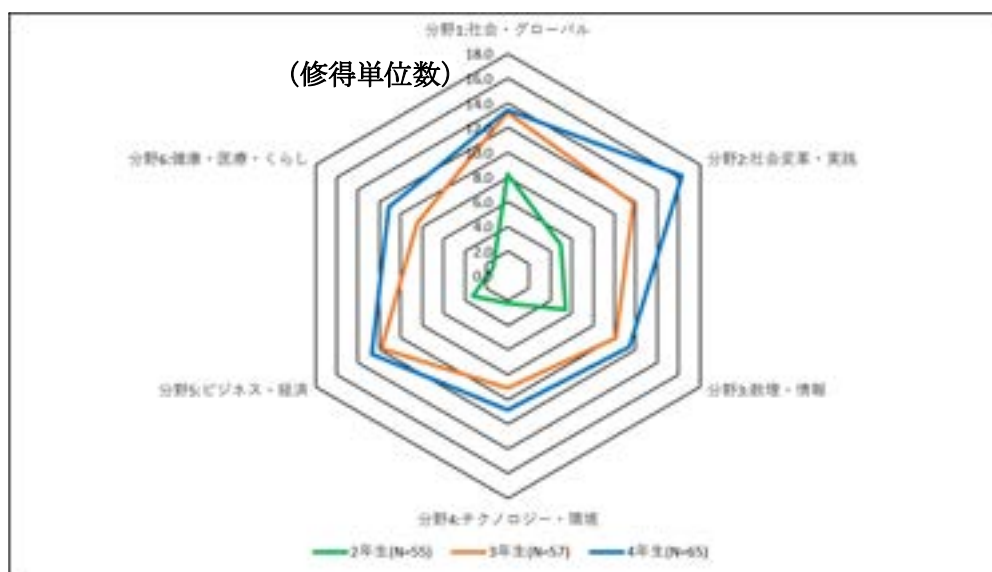
融合学域では、学修者自らが文理融合・分野横断の学びについて計画し、自己成長していくことを人材育成の柱としている。そのため、「学びの計画書」を通して、学生が自分自身で学びについて考える機会を設けている。具体的には、1年次の学年末に作成する「学びの計画書」ではコア科目におけるコアエリアの履修体系の説明を受け、2年次の学年末に作成する「学びの計画書」では学知科目から鍛練科目にわたり履修体系の説明を受けることとなっている。

「学びの計画書」の目的は、①目標設定と振り返りによる自発的学修モチベーションの向上、②将来像の明確化、③オーダーメイド型の教育、④学生と教員との連携・指導体制の構築、⑤インターンシップや留学も含めた履修計画の5つの事項である。

令和5年度には、融合学域に導入した「学びの計画書」について学修ポートフォリオとしてシステム運用できる環境整備を図り、DP（ディプロマ・ポリシー）達成度や履修分野バランスなどを可視化する環境整備を完了した。この環境整備により、学生が自らの学修状況を俯瞰しながら振り返りを行い、アドバイザー教員からの指導助言を受けながら、次期に向けた学修計画立案や目標設定に資するものとなっている。「学びの計画書」について、学生から好評を得ており、自らのキャリアデザインに役立てつつ、高年次に向けて取り組みたい未来課題を見据えるために効果的に運用されている。今後は、融合学域以外の他学域の学修支援の取組の参考としていくこととしている。



図表Ⅲ-14 システム整備した「学びの計画書」ダッシュボード画面



図表Ⅲ-15 先導学類生（2年次～4年次）の履修分野ごとの修得単位数平均の推移（「学びの計画書」蓄積データによる分析）

3.2 融合学域先導学類生を対象とした外部アセスメントテストの実施

令和5年度より、株式会社ベネッセi-キャリア開発の「GPS-Academic」を活用し、融合学域先導学類生（1年次～4年次）を対象に、問題解決に必要な思考力、姿勢・態度、経験に関するアセスメントテストを行っている。先導学類1期生の3年時と4年時での受検スコア（図表Ⅲ-16）を見ると、全受検者集計平均より概ね高いスコアとなっている。

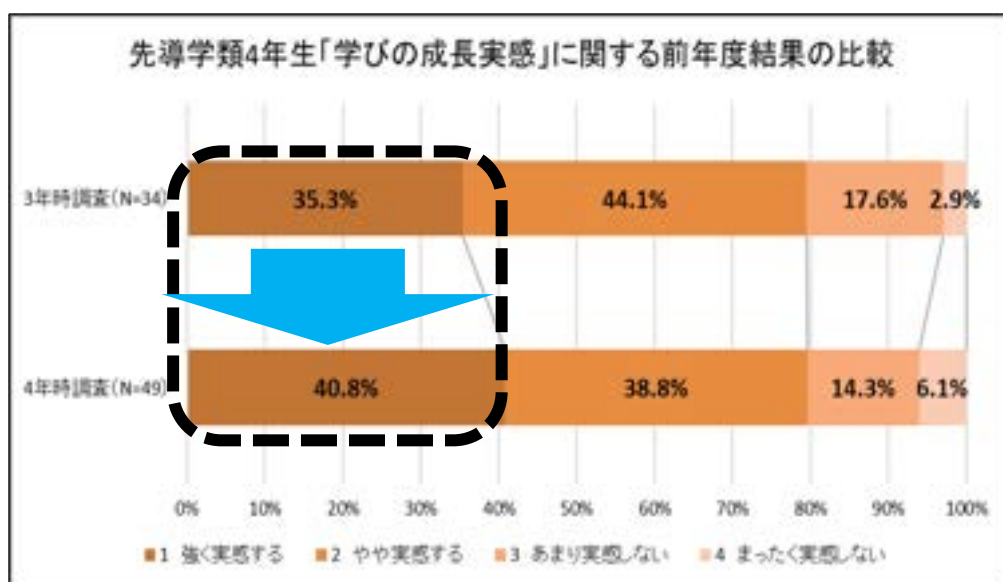
図表Ⅲ-16 外部アセスメントテスト結果の概要（抜粋）

			問題解決の質と深さを左右する思考力				問題解決に向かうための姿勢・態度			問題解決の力を磨くための経験		
			思考力 総合スコア	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	自己管理	対人関係	計画・実行
金沢大学	融合学域先導学類	2021入学3年時 (N=36)	54.0	53.3	54.8	54.6	51.8	52.3	49.9	56.7	65.0	56.8
GPS-A	全受検者計	2021入学3年	44.3	44.5	45.5	43.0	48.6	47.3	48.9	52.2	59.6	55.9

金沢大学	融合学域先導学類	2021入学4年時 (N=50)	53.7	53.3	51.0	52.9	51.6	52.8	49.4	58.3	65.7	57.3
GPS-A	全受検者計	2021入学4年	40.6	38.8	38.3	41.5	50.5	49.7	49.5	57.2	63.4	60.1

注：GPS-Academic（株式会社ベネッセi-キャリア提供）全受検者集計より引用。

また、アセスメントテストと同時に実施している在学者調査における「学びの成長実感」に関する設問の回答結果（図表Ⅲ-17）において、先導学類1期生の3年時と4年時での成長実感の推移をみると、専門教育が進むに従って、学生の学びの深まりが窺える結果となっている。



図表Ⅲ-17 在学者調査における「学びの成長実感」比較

3.3 融合学域先導学類生と学類長等との懇談会

「知識集約型社会を支える人材育成事業」委員現地視察及び PO 訪問において、カリキュラム全体に関する学生への情報提示や学生の要望を聞く仕組みづくりを指摘されたことを契機に、先導学類生との懇談会を設け、授業の受講環境、カリキュラムの理解や要望、留学やインターンシップに関する理解や要望、学びの計画書の利活用、進路支援等について意見交換を行い、現状や改善点などの把握と教職員・学生の相互理解を図ることとした。

令和 6 年 10 月 17 日（木）に、先導学類初の学生と学類長等との懇談会が開催され、先導学類生（2～4 年次）、融合学域及び教学マネジメントセンターの教員、計 16 名が参加した。最初に、参加学生から融合学域で印象に残った授業を挙げてもらい、授業での思い出だけでなく、授業の進め方に対する要望や履修システム上の課題など、活発な議論が交わされた。このほか、海外留学やインターンシップ、進路選択等について意見交換が進んだ。日頃聞けない学生の本音を聴く機会となり、学生、教員双方にとって、有意義な時間となった。今後も、このような機会を通して、カリキュラムの改善充実に役立てていくこととした。



図表Ⅲ-18 融合学域先導学類生との懇談会の様子

3.4 融合学域先導学類生の活躍

融合学域先導学類生の学内外での活躍の一部を紹介する。

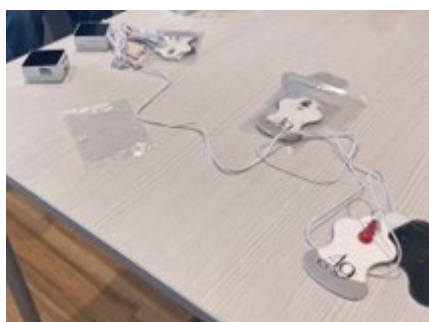
- ① 令和 6 年 11 月 12 日（火）・13 日（水）に開催された、北陸先端科学技術大学院大学が主催する学生のビジネスアイデアコンテスト「M-BIP (Matching HUB・Business idea & Plan Competition)」にて、融合学域がサポートしている“金沢大学起業部”の部員で融合学域の学生が、優秀賞を受賞した。

- ・発表内容：「誰でも農業」～農業のハードルを下げる、新しい働き方～
- ・代表者：釣谷 優太さん（融合学域先導学類 2 年）



図表Ⅲ-19 優秀賞受賞の様子

- ② 融合学域先導学類 4 年次の小田波優矢さんは、任意団体「ユースの保健室」代表として性と生殖に関する健康と権利や包括的性教育の啓発・イベントを企画し、金沢市の「協働のまちづくりチャレンジ事業」の学生部門に採択されたほか、金沢大学融合研究域の秋田純一教授の協力のもと、「生理痛疑似体験」機器の試作器を製作し、情報処理学会主催の「インタラクシオン 2025」にインタラクティブ発表（デモ発表）を行うなど、幅広く活動を展開した。



図表Ⅲ-20 生理痛疑似体験機器及び第 1 回試作体験会の様子

4. 融合学域先導学類 1 期生の進路状況

令和 6 年度において、融合学域先導学類 1 期生が卒業を迎える。その進路状況は、図表Ⅲ-21 のとおりであり、幅広い業種への企業就職とともに、大学院進学決定者が 3 割以上存在することが特徴である。他大学の類似学部で、既に卒業者を輩出している九州大学共創学部や千葉大学国際教養学部と比べても、大学院進学決定者の割合が大きい。

大学院進学決定者の大きな受け皿となっているのが、令和 7 年 4 月に創設される新学術創成研究科総合知創出科学専攻であり、その概要図は図表Ⅲ-22 のとおりである。同専攻については、修士課程に加えて、今後、博士後期課程が設置される予定である。



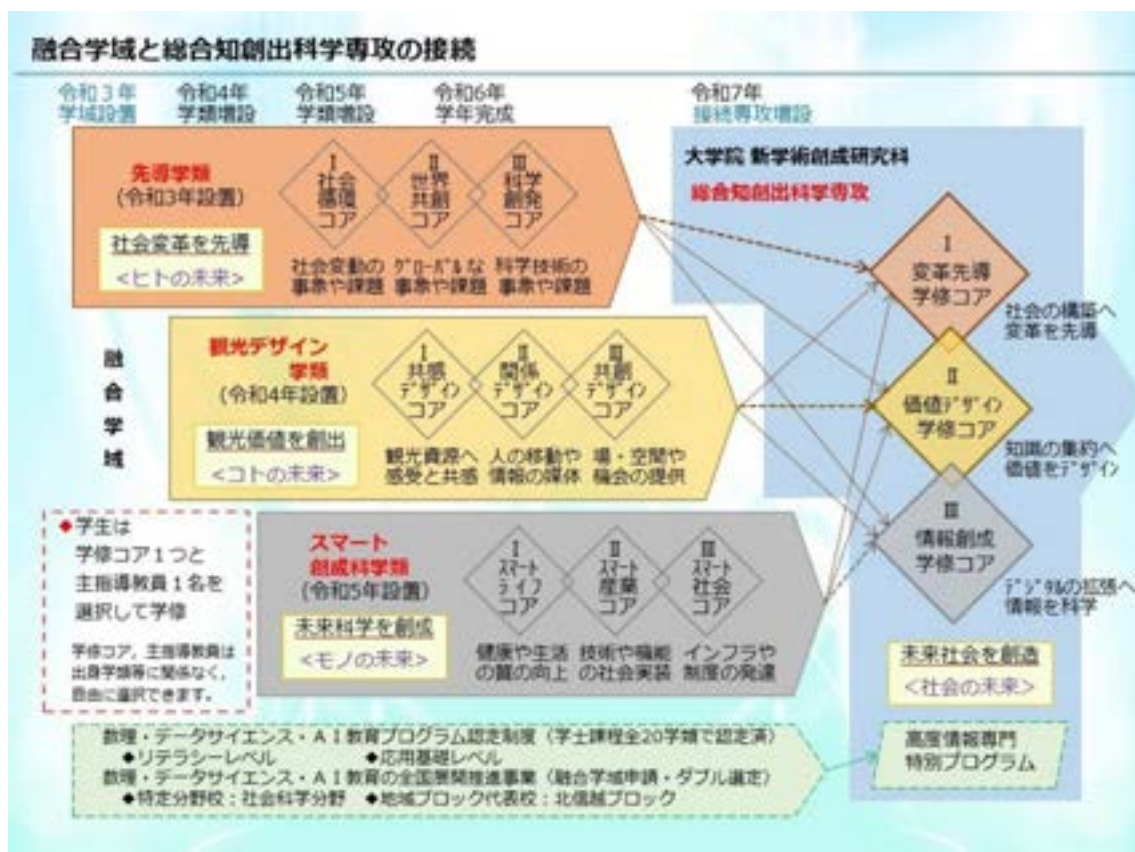
【就職決定企業等】

【業種】	【企業名等】
農業・林業	グリーン・コモンズ（株）
建設業	（株）大気社
製造業（食料品・飲料・たばこ・飼料）	伊那食品工業（株）
製造業（汎用・生産用・業務用機械器具製造）	セイコーエプソン（株）
製造業（電気・情報通信機械器具製造）	（株）日立製作所
製造業（その他）	システムサービス（株） ミズノ テクニクス（株）
電気・ガス・熱供給・水道業	北陸電力（株）
情報通信業	（株）NTTデータエンジニアリングシステムズ （株）PFU （株）WorkVision （株）エスユーエス （株）エムティーアイ （株）日本総合研究所 日本プロセス（株） 福井コンピュータホールディングス（株）
卸売業	アヴェネット・イーエム・ホールディングス・ジャパン（株）
小売業	山成商事（株） （株）良品計画
金融業	日本政策投資銀行北陸支店
保険業	三井住友海上火災保険（株）
不動産取引・賃貸・管理業	（株）オープンハウスグループ
生活関連サービス業・娯楽業	アイ・ケイ・ケイホールディングス（株）
学校教育	学校法人角川ドワンゴ学園

【進学大学（大学院）】

【大学】	【研究科】	人数
金沢大学	新学術創成研究科	11名
	人間社会環境研究科	1名
	医薬保健学総合研究科	2名
北陸先端科学技術大学院大学	先端科学技術研究科	1名
筑波大学	人間総合科学学術院	1名
滋賀大学	データサイエンス研究科	1名
金沢工業大学	心理科学研究科	1名

図表Ⅲ-21 融合学域先導学類1期生の進路状況（令和7年3月21日現在）



図表Ⅲ-22 新学術創成研究科総合知創出科学専攻の概要図

5. 融合学域における留学・国際インターンシッププログラム

融合学域では、学年進行に伴い、令和5年度において、1期生である先導学類3年次、令和6年度には、先導学類に加え、観光デザイン学類3年次も留学・国際インターンシップに参加している。海外派遣プログラムの開発において、融合学域担当教員が15プログラムを大学公式プログラムとして開設し、融合学域に限らず、全学域学生に公開したプログラムとなっている。渡航先は、アジア、北米、欧州、豪州の多岐にわたっている。

融合学域では新年度が始まる前に、海外留学WGの教員が融合学域の対象学生全員にガイダンスを実施している。令和6年度用には、2月14日と4月1日の2回ガイダンスを実施した。融合学域にとって、令和5年度から留学・国際インターンシッププログラムの運用を開始し、実績を積み重ねながら、対象学生へのきめ細かい説明と支援の向上に努めている。

図表Ⅲ-23 融合学域公式海外派遣プログラム一覧

プログラムコード	部局	担当教員	プログラム名	JASSO奨学金	機関名	国名	募集人数	実施時期（期間）
融01	融合学域	藤生 慎 森崎 裕磨	Sustainable Regional Planning programme in タイ	なし	AIT (Asian Institute of Technology)	タイ	5名	①2024.9.1~9.13 ②2024.9.15~9.29 (2週間)
融02	融合学域	藤生 慎 森崎 裕磨	Sustainable disaster reduction programme in 東ティモール	なし	東ティモール国立大学	東ティモール	5名	①2024.8.27~9.5 ②2024.9.14~9.27 (2週間)
融03	融合学域	丸谷 耕太 川澄 厚志 ダガン さがの	世界展開力地域開発計画プログラム in パンファロー	有	ニューヨーク州立大学 (SUNY) パンファロー校	アメリカ	約10名	2024.08.19~2024.08.30 (2週間)
融04	融合学域	尾島 恭子 中山 晶一朗	Mission possible or impossible programme in ニュージーランド	有	ワイカト大学	ニュージーランド	5名程度	2024.08.26~2024.09.27 (5週間)
融05	融合学域	ダガン さがの 藤生 慎	インテンシブEAPプログラム in ニュージーランド	有	Lincoln University	ニュージーランド	5名程度	2024.08.26~2024.9.27 (5週間)
融06	融合学域	秋田 純一	深センでの短期留学総合プログラム	有	南方科学技術大学・iMakerBase, Heroad Investment, Classroom	中国	6名程度	2024.8.19~2024.9.20 (5週間・8/18出発を予定)
融07	融合学域	金間 大介 ダガン さがの	プロフェッショナルインターンシッププログラム in ニュージーランド	有	New Zealand Internships (NZI)	ニュージーランド	人数制限なし (ただしスクリーニング及び面接に合格した学生のみ参加可能。JASSO支援は5名)	2024.8.19~2024.10.11 (8週間)
融08	融合学域	松島 大輔	ベトナムリスタートアップ入門プログラム	有	BWG (Brain Works Group)	ベトナム	10名程度	夏季休業期間 (5週間)
融09	融合学域	松島 大輔	リスタートアッププログラム	有	TNI, CMU, IIT, IIITDM, PMI, 複合大学	インド, ASEAN	20名程度	夏季休業~春季休業 (7か月程度)
融10	融合学域	ダガン さがの 河内 幾帆 大友 信秀	Independent Internship programmes in オーストラリア・ニュージーランド	有	Intern NZ Intern OZ	オーストラリア ニュージーランド	人数制限なし (ただしスクリーニング及び面接に合格した学生のみ参加可能。JASSO支援は2名)	2024.8.26~2024.10.4 (6週間)
融11	融合学域	西脇 ゆり 松本 拓史	スタディーツアープログラム in オーストラリア	有	Wollongong University	オーストラリア	10名程度	2024.8.19~2024.8.30 (2週間)
融12	融合学域	高沼 理恵 河内 幾帆	ASPIRE Intensive on Campus programme	有	ブリティッシュコロンビア大学	カナダ	5名程度	2024.9.2~2024.9.21 (3週間)
融13	融合学域	南保 英孝 佐藤 真二	サムライカレービギナーズ体験プログラム	有	スパイスアップアカデミア株式会社	タイ	5名程度	2024.08.12~2024.08.23 (2週間)
融14	融合学域	有賀 三夏	ボストン チルドレンズ・ミュージアム研修プログラム	有	チルドレンズミュージアム	アメリカ	5名程度	2024.8.19~2024.8.30 予定 (2週間)
融15	融合学域	尾島 恭子 中山 晶一朗	ジェネラルイングリッシュプログラム in ニュージーランド	なし	ワイカト大学	ニュージーランド	5名程度	2025.03.17~2025.03.28 (2週間)

6. 融合学域における学生を中心とした各種活動

その他、融合学域における学生を中心とした各種活動の一部を紹介する。

① 融合学域先導学類と協力参加企業との産学共創の成果発表と提言を、金沢の街なかの会場で開催した。

イベント概要：

日時：令和7年1月31日（金）14:45~18:00

イベントプログラム：

第1部 融合学域先導学類と産学共創によるインターンシップ(2×2 インターンシップ)の説明

第2部 『産学融合による日本再興型海外展開』をテーマとした2×2 インターンシップ令和6年度成果発表

第3部 能登復興支援シン産業化プロジェクトの発表と提言

② 融合研究域融合科学系の松島大輔教授が主宰する金沢大学産学融合研究会の活動

令和7年2月18日（火）能登復興への支援活動と石川県の魅力を発信するため、タイ王国のバンコクで開催された「天皇誕生日祝賀レセプション」に参加し、学生が企画と運営を

通じ実践的なマーケティング学修の機会を得た。



図表Ⅲ-24 ゼミ活動を通じた能登復興への取組と石川県の魅力を世界に発信

IV. 先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) に関する 取組実績

1. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）のカリキュラム概要

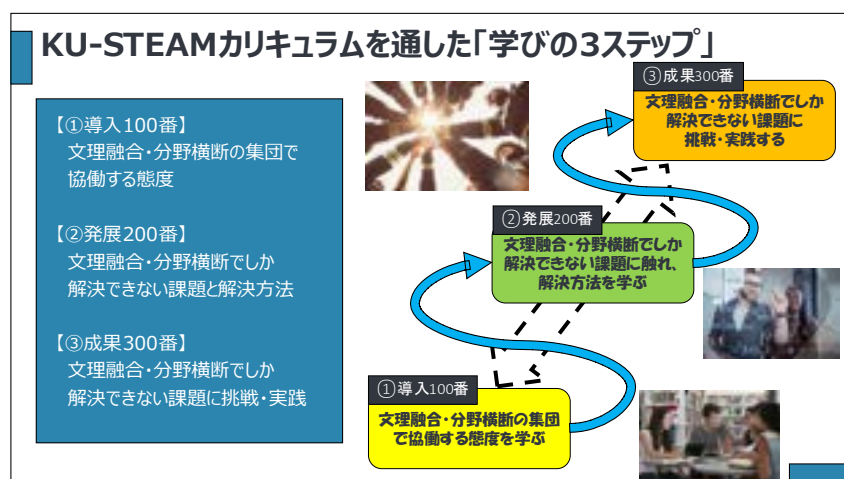
先導 STEAM 人材育成プログラム（通称、KU-STEAM）は、全学域学生対象の文理融合プログラムである。自身の専門分野に軸足を置きながら、積極的に他分野の知見を深め、異分野・異文化協働を実践することによって、未来課題の解決に挑戦する、先導 STEAM 人材の育成を目的としている。令和 3 年度において、当初の計画を前倒しして一部の授業科目の開講を始め、令和 4 年度には当初予定していた授業開発作業が完了し、令和 5 年度には開発した授業科目の受け入れ規模の拡充を図った。さらに、令和 6 年度には共通教育科目 GS 科目 6 群や学域 GS 科目を効果的に活用した新カリキュラムの運用を開始し、令和 7 年度の自走化に向けて進めている。

学域学生を対象とした「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）」の教育課程では、図表Ⅳ-1 のとおり、受講生が KU-STEAM の 5 つの力（Five Competencies）を確実に修得できるよう、「100 番：導入」「200 番：発展」「300 番：成果」というナンバリングシステムによる階層的カリキュラムを構成している。



図表Ⅳ-1 「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）」カリキュラム概要

当該教育課程では、図Ⅳ-2 のとおり、KU-STEAM カリキュラムを通した「学びの 3 ステップ」をコンセプトに、100 番：導入科目では多様な分野と学年の学生と一緒に「文理融合・分野横断の集団で協働する態度を学ぶ」、200 番：発展科目では企業・自治体等と協働しながら「文理融合・分野横断でしか解決できない課題に触れ、解決方法を学ぶ」、300 番：成果科目では実践インターンシップ等により「文理融合・分野横断でしか解決できない課題に挑戦・実践する」を通して、実社会に適応できる能力を培い、自らの学びをカタチにする構成となっている。



図表Ⅳ-2 KU-STEAM カリキュラムを通した「学びの3ステップ」概念図

具体的な授業科目としては、STEAM 教育の基礎となる思考法やプロジェクトマネジメントを学ぶ導入科目、ビッグデータ処理能力、多様性社会で活躍する人間力、科学技術への理解力をそれぞれ修得するデータ、ヒューマン、科学技術の3つのリテラシー科目群と、社会での挑戦・実践力を鍛える協働実践科目が用意されている。データリテラシー科目群は受講者全員が履修し、理工学域・医薬保健学域の理系学生はヒューマンリテラシーを中心に、人間社会学域の文系学生は科学技術リテラシーを中心にクロスして履修することで自身の専門分野以外のリテラシーも修得する。オンデマンド教材による学修環境を整備することで所属学類の履修への影響を最小限に抑え、主分野の学修時間を十分確保する。また、本事業専任のアカデミック・アドバイザーの支援を得て、学生自らの学びをオーダーメイドできる教育課程となっている。

先導 STEAM 人材育成プログラムの教育課程の特徴を要約すると以下の3点にまとめられる。

(1) 卒業要件内での科目履修に重点を置いたカリキュラム・マネジメント

受講者の効率的・効果的な学修への配慮、持続可能なカリキュラム設計。

共通教育（教養教育）・専門教育を通した STEAM 教育の一貫性を重視したカリキュラム設計。

(2) 文理融合・分野横断の多様な授業コンテンツをオーダーメイド型で学べる学修環境

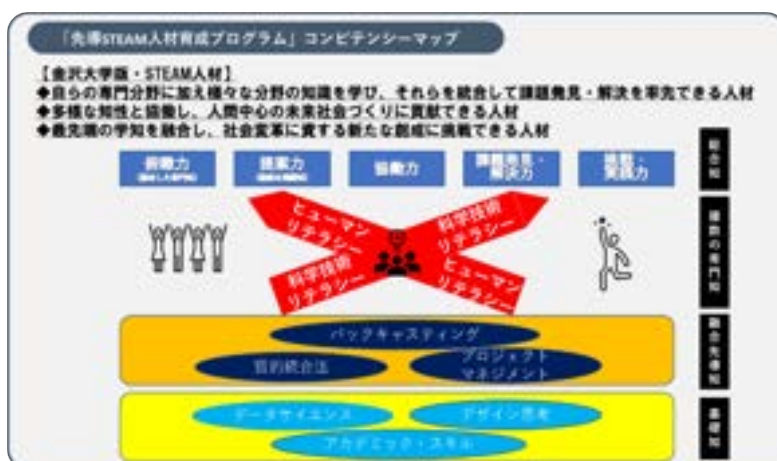
融合学域の授業コンテンツ、既存の副専攻制度を活かした多様な分野にわたる授業コンテンツを対面・デジタル・ハイブリッド型などで学べる講義を用意し、学生自らの分野・レベルに応じ、オーダーメイド型で学べる学修環境。

(3) 学びの3ステップによる質保証

当該プログラムにおける100番（導入）・200番（発展）・300番（成果）の各階層においてアセスメント科目（背骨科目）を設定し、当該科目の中でプログラム・ルーブリックによる学修成果アセスメントを行う「学びの3ステップ」を通して、学生自らが学び、育むことができる自律性を醸成。

2. 先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の学修目標

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) では、金沢大学版・STEAM 人材として掲げた 3 つの人材像「自らの専門分野に加え様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先できる人材」「多様な知性と協働し、人間中心の未来社会づくりに貢献できる人材」「最先端の学知を融合し、社会変革に資する新たな創成に挑戦できる人材」を念頭に置きながら、図表IV-3のようなコンピテンシーマップを作成した。その上で、同プログラムで修得すべき「5つの力 (Five Competencies)」として「俯瞰力 (融合した専門知)」「提案力 (鋭敏な飛躍知)」「協働力」「課題発見・解決力」「挑戦・実践力」を定めた。



図表IV-3 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」コンピテンシーマップ

「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」の受講者の学修到達度を測定していくことが大事であり、プログラム・ルーブリック (図表 IV - 4) を作成し、100 番・200 番・300 番の各段階におけるアセスメント科目受講時に、自己評価を行いながら、「5つの力」の達成度や成長実感を把握・可視化することとしている。また、大学側にとっては、プログラム・ルーブリックを通した学修成果の可視化は、当該プログラムの質保証の点検材料としても活用している。

図表IV-4 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」ルーブリック

先導STEAM人材育成プログラムで修得すべき「5つの力 (Five Competencies)」に基づく、プログラム・ルーブリック					
育成する力	指標	レベル1 基礎的な知識	レベル2 応用知識	レベル3 高度な知識	レベル4 専門的な知識
俯瞰力 【融合した専門知】	異なる領域・領域にわたる専門知識の統合・融合、異なる知識を統合して、新たな知識を創造できる能力	各専門領域の基礎知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の応用知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の高度知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の専門知識を把握し、相互に関連性を見出す能力
提案力 【鋭敏な飛躍知】	新しい課題・課題の発見・解決、既存の課題・課題の解決、新たな課題・課題の発見・解決	既存の課題・課題の発見・解決、既存の課題・課題の解決	既存の課題・課題の発見・解決、既存の課題・課題の解決	既存の課題・課題の発見・解決、既存の課題・課題の解決	既存の課題・課題の発見・解決、既存の課題・課題の解決
協働力	異なる領域・領域にわたる専門知識の統合・融合、異なる知識を統合して、新たな知識を創造できる能力	各専門領域の基礎知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の応用知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の高度知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の専門知識を把握し、相互に関連性を見出す能力
課題発見・解決力	異なる領域・領域にわたる専門知識の統合・融合、異なる知識を統合して、新たな知識を創造できる能力	各専門領域の基礎知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の応用知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の高度知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の専門知識を把握し、相互に関連性を見出す能力
挑戦・実践力	異なる領域・領域にわたる専門知識の統合・融合、異なる知識を統合して、新たな知識を創造できる能力	各専門領域の基礎知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の応用知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の高度知識を把握し、相互に関連性を見出す能力	各専門領域の専門知識を把握し、相互に関連性を見出す能力

3. 「融合先導知概論」「融合先導知実践演習」の取組

先導 STEAM 人材育成プログラムでは、新たに「共通教育科目 GS 科目」「学域 GS 科目」を効果的に盛り込み、梃子とすることで、「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」のカリキュラム構成を分かりやすいものとした。

プログラム導入科目（100 番科目）に当たる「融合先導知概論」では、共通教育科目 GS 科目 6 群や地域概論を位置づけ、発展科目（200 番科目）では「融合先導知実践演習（ちょこっとマイプロジェクト）」「融合先導知実践演習 B（アイデアキャンプ）」「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」、成果科目（300 番科目）に当たる「実践インターンシップ」の授業開発を行い、その受講実績等を踏まえながら、定員やクラス数を増やして開講した。先導 STEAM 人材育成プログラムのうち、教学マネジメントセンターにおいて開発・運営するコア科目の実施状況は以下のとおりである。

図表Ⅳ-5 令和 6 年度「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」コア科目の開講状況

授業科目名	開講時期	クラス 定員	受講者数
【導入科目:100 番】			
デザイン思考入門	Q1	60 名	60 名
デザイン思考入門	Q1	60 名	60 名
デザイン思考入門	Q2	60 名	60 名
デザイン思考入門	Q2	60 名	60 名
デザイン思考入門	Q3	60 名	60 名
デザイン思考入門	Q4	60 名	60 名
デザイン思考入門	Q4	60 名	60 名
【発展科目：200 番】			
融合先導知実践演習 A(ちょこっとマイプロジェクト)	Q2	44 名	44 名
融合先導知実践演習 A(ちょこっとマイプロジェクト)	Q4	48 名	48 名
融合先導知実践演習 B(アイデアキャンプ)	Q3	20 名	19 名
融合先導知実践演習 C(総合マネジメントゲーム)	Q3	36 名	29 名
【成果科目：300 番】			
実践インターンシップ	Q2	19 名	17 名
実践インターンシップ	Q4	22 名	20 名

3.1 【導入科目：100 番】「デザイン思考入門」

プログラム導入科目（融合先導知概論）の一環で、「デザイン思考入門」（Q1～Q4）を開講し、4 学域から 420 名の受講者が履修した。

この授業では、近年、イノベーションを生み出すアプローチとして、デザイン思考が注目されている。デザイン思考とは、いわゆる意匠としての「デザイン」とは別のもので、ユーザーや顧客の視点を起点に、課題解決案の創出と検証を繰り返し、価値あるソリューションを探索的に見いだす思考法である。本授業では、デザイン思考のプロセスを、講義だけでな

くワークショップ形式による実践を通して、問題解決や価値創造の手法の基本を身につけることを目標としている。

3.2 【導入科目：200 番】「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」

共通教育・自由履修科目「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」（Q2 と Q4・集中講義）を開講し、4 学域の 1 年次から 4 年次まで、92 名の受講者が履修した。

この授業では、文理融合や分野融合による学びの価値を実感することを目的に、学域・学類、学年を越えた学生同士の相互理解や相互交流を通じた学習共同体（ラーニング・コミュニティ）の形成を目標とする。さらに、学生自らが「学びの主体者」であることを認識することを強化しながら、自分自身でテーマを発見し、自らの力でアクション（「ちょこっとマイプロジェクト（ちょこプロ）」）を実施することを目指し、これらの学習活動を通して、「融合先導知」に必要とされる融合した専門知と鋭敏な飛躍知を修得することの意義や価値を理解し、実践できることを目標としている。

まず、事前オリエンテーションを開催し、教学マネジメントセンターの林透教授が、授業の概要や評価等に関する説明を行った。次に、Q2 では令和 6 年 6 月 22 日（土）・23 日（日）

（Q4 では令和 6 年 12 月 21 日（土）・22 日（日））に对面で、同センターの山下貴弘特任助教が KU-STEAM 学生スタッフらをピア・サポーターに加え、自己理解を深め、自らチャレンジしたい実践型のプロジェクトについて計画を考え、受講者同士でフィードバックを行う、ワークショップ形式で行った。最終日となる Q2 では令和 6 年 7 月 27 日（土）（Q4 では令和 7 年 1 月 25 日（土））には、前回の授業から約 1 ヶ月の期間で実際に地域や他者を巻き込んで実践したプロジェクトの振り返り、ネクストアクションを考え共有するワークショップを、対面とオンラインのハイブリッド型で行った。

この授業の学修目標として、(1) 分野の異なる学生と協働し、新しいアイデアを提案することができる。(2) 自己理解を深めながら、挑戦力や実践力を発揮することができる。

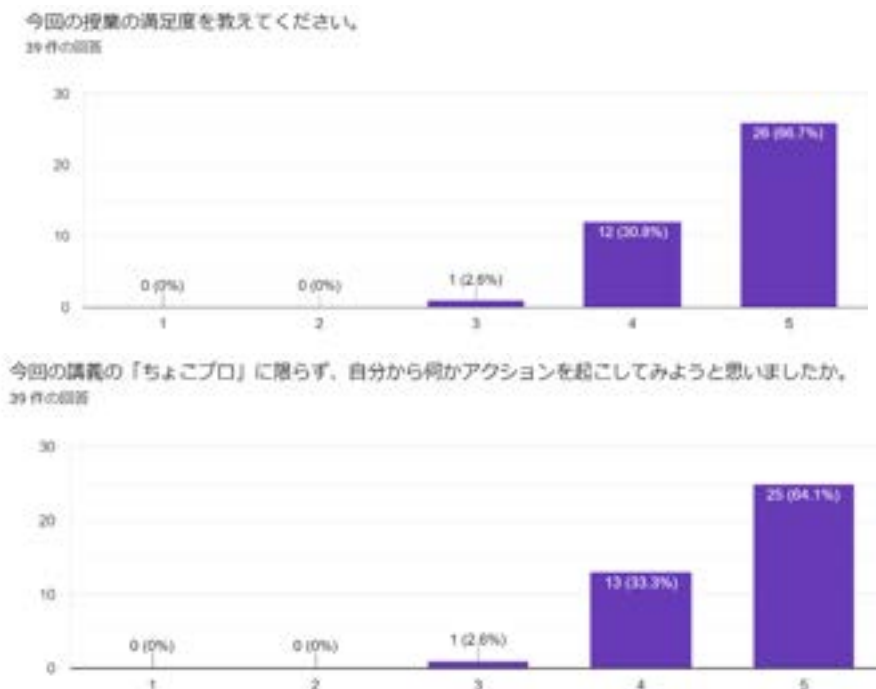
(3) 実践したプロジェクトの結果を評価し、振り返りながら、次なるアクションに繋げることができる。ということを掲げた。

受講者からは、「自分が挑戦しないようなことに挑戦でき、他学域・学類の多くの人と関わることができた」「自分が踏み出せなかった一步を踏み出せた」「自分が苦手意識を持っていた、グループ活動がメインの授業内容だったが、グループの学生がとても話しやすく、意見を出しやすい雰囲気の中で楽しく有意義な話し合いができた」「これほどディスカッションや対話が豊富な授業を履修したのが初めてで、とても刺激的で充実感を感じた。自分が成長できたように感じる」「自分の挑戦したいことを計画して、それを探究できるのが楽しかった」との声が寄せられた。



図表IV-6 「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」の講義の様子

参加者アンケート（Q2 履修学生）（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））



図表IV-7 履修者アンケート結果

3.3 【発展科目：200番】「融合先導知実践演習 B（アイデアキャンプ）」

GS 発展系科目（専門教育科目）「融合先導知実践演習 B（アイデアキャンプ）」（Q3・集中講義）を開講し、3 学域の 1 年次から 4 年次まで、19 名の受講者が履修し、企業・自治体等、運営スタッフ含め約 30 名が参加した。

この授業では、学域・学類、学年を越えた学生が、社会人さらに企業・自治体等の方とともに、リアルな課題に対して、解決策を検討する方法を体験的に学びながら、融合した専門知と鋭敏な飛躍知を備えた「融合先導知」の意義や価値を理解することを目指としている。

まず、事前オリエンテーションを開催し、教学マネジメントセンターの山下特任助教が、授業の概要や評価等に関する説明を行った。次に、令和 6 年 10 月 19 日（土）に対面で、課題解決法習得のグループワークを行った。授業アドバイザーとして長崎県立大学 経営学部 講師の前田 瞬 講師を招き、EBM（Evidence-Based Practice）や経営に関する観点からアイデア出しについて、ご指導いただいた。続いて、令和 6 年 10 月 20 日（日）と令和 6 年 11 月 9 日（土）は、主に教学マネジメントセンターの林 透 教授と山下貴弘 特任助教による進行で、実際に企業・自治体等の方から現状や課題に関する発表をもとに、その解決法について企業・自治体等の方と一緒に考え、提案するグループワークを行った。

出展団体と検討した課題は以下のとおり。

- (1) 加賀建設株式会社（石川県金沢市）「企業経営×「まちづくり」を考える。地域活性化事業における収益化をめざすにはどのようなアクションを起こす？」
- (2) 加賀建設株式会社（石川県金沢市）「年代・性別を問わず社内コミュニケーションを促進するためにはどのようなアクションがあるか？」

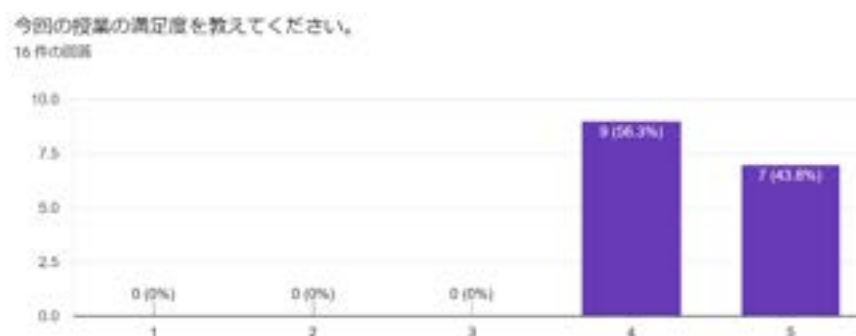
参加した企業から、「様々な学生が初めて交流しながら課題解決プログラムを行う場に参加して、企業側としても普段聞くことのできない率直な意見を聞くことができた」「学生のプレゼンテーション内容が論理的に組み上げられ、聞きやすかった。相手が納得するように数値的根拠を提示するなど準備をして臨んでいると感じた。課題解決方法としては自己目線に近いものが多かったため、相手や対象の目線に立った意見を出し合うことができればより良い課題解決方法を提案できたと思う」といった好評が寄せられた。

なお、本講義に参画いただいた加賀建設株式会社とは、令和6年前期に開催した「ガクセイ社会科見学」の実施を経て、正課科目でも協働を実施していることから、ステークホルダーとの発展的な関係構築が実現しているといえる。



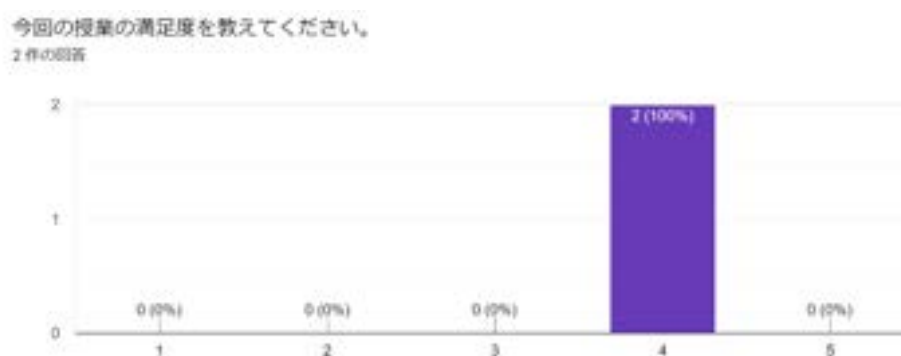
図表IV-8 「融合先導知実践演習 B (アイデアキャンプ)」の講義の様子

参加者アンケート（学生）（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））



図表IV-9 履修者アンケート結果

参加者アンケート（参加団体）（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））



図表IV-10 参加団体アンケート結果

3.4 【発展科目：200 番】「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」

GS 発展系科目（専門教育科目）「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」（Q3・集中講義）を開講し、3 学域の 1 年次から 4 年次まで、29 名の受講者が履修した。

この授業では、学域・学類、学年を越えた学生同士が、メーカーのマネジメントを体感することにより、実際の厳しいビジネスの環境や各活動の意義や機能を理解できる総合演習を通して、3 つのリテラシー（データリテラシー、ヒューマンリテラシー、科学技術リテラシー）を融合した専門知と鋭敏な飛躍知を備えた「融合先導知」に統合することを目標としている。

まず、事前オリエンテーションを開催し、教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教が、授業の概要や評価等に関する説明を行った。次に、令和 6 年 12 月 3 日（火）と令和 6 年 12 月 4 日（水）に對面で、京セラ株式会社から 3 名のファシリテーターを招聘し、ワークの理解、経営方針・戦略立案ミーティング（作戦会議）、製品企画ミーティング及びプロモーション・ミーティングを行い、2 日目は製品制作・プロモーション制作とワークの振り返り等を行った。

受講者からは、「商品開発だけではなく、マーケティングや PR も学ぶことができ有意義だった」「今まで挑戦したことがないくらい熱中して、商品を考えるという経験ができ、企画立案する力を身につけることができた」「京セラ株式会社に興味があったため、同社の事業を詳しく知る貴重な機会となった」といった感想が寄せられた。

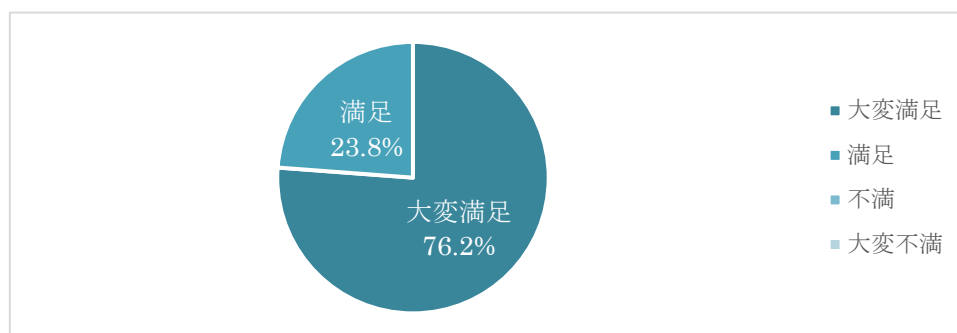


図表 IV-11 「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」の講義の様子

参加者アンケート（学生）

（ワーク）セラブルについては、いかがでしたか？

21 件の回答



図表 IV-12 履修者アンケート結果

3.5 【成果科目：300 番】「実践インターンシップ」

GS 発展系科目（専門教育科目）「実践インターンシップ」（Q2 と Q4・集中講義）を開講し、3 学域の 1 年次から 3 年次まで、37 名の受講者が履修した。

この授業では、文理融合・分野横断の学びを通して修得した知識やスキルを社会共創の場で実際に行動・挑戦してみることで、課題解決能力の実践知を育むことを目的として、社会のリアルな課題に対して、課題発見・解決を実践するプログラムである。分野の異なる学生だけではなく、企業や自治体など、異なる年代や立場の方々と協働し、成果を出すことを目指している。

プログラムは、1) 事前研修、2) 実践学習、3) 振り返りの 3 つで構成し、実践学習では、企業・自治体等の方に受け入れていただき、実際のフィールドで課題の解決法について企業・自治体等の方と一緒に課題の解決策を考え、実際に行動する。

実践インターンシップの受け入れ先・テーマは以下のとおりである。

- (1) 実践インターンシップ（地域演劇参画プロジェクト 金沢大学×大杉ミュージカルシアター（OMT））
 - ・テーマ：地域演劇参画プロジェクト金沢大学×大杉ミュージカルシアター（OMT）
 - ・活動内容：創立 30 周年を迎えた「大杉ミュージカルシアター（OMT）」と協働し、活動拠点である大杉中町劇場を舞台に、地域演劇の意義や価値を学びながら、学生自らシナリオ作成や演技を体験します。
 - ・募集人数：6 名
- (2) 実践インターンシップ（ものづくり企業の認知度アップの方法を考えて実践してみよう）
 - ・テーマ：ものづくり企業の認知度アップの方法を考えて実践してみよう！
 - ・活動内容：ものづくり企業のつまらなさそうなイメージを打破！TSK を知っていただくため、オープンファクトリーの企画やポスター作成、SNS 記事の作成など、新しいアイデアで認知度を高める企画を考えましょう。
 - ・募集人数：9 名
- (3) 実践インターンシップ（外国人観光客がもっと楽しめるようなコンテンツを一緒に考えよう）
 - ・テーマ：外国人観光客がもっと楽しめるようなコンテンツを一緒に考えよう
 - ・活動内容：伝統産業で様々なことにチャレンジしている「箔一」現在、多くの外国人が訪れる「ひがし茶屋街」の店舗で、より外国人観光客が楽しめるアイデアや現場の課題解決を一緒に考えてみましょう。
 - ・募集人数：4 名
- (4) 実践インターンシップ（デジタル×子供の居場所プロジェクト（ミミミラボ））
 - ・テーマ：デジタル×居場所をすべての子どもたちに届けたい
 - ・活動内容：子どもたちが、自分の「やりたいこと」を探し「好き」を追求できる創造的な居場所をさらに充実させ、子どもたちに安心して利用できる「みんなのミミミラボ」なるアイデアを提案してください。
 - ・募集人数：6 名

- (5) 実践インターンシップ（企業の魅力発信プロジェクト（TSK 株式会社））
 - ・テーマ：学生目線で、とっともすてきな会社 TSK の魅力を伝える方法を考えよう
 - ・活動内容：ものづくり企業のつまらなさそうなイメージを打破！TSK を知っていただくため、オープンファクトリーの企画やポスター作成，SNS 記事の作成など，新しいアイデアで認知度を高める企画を考えましょう
 - ・募集人数：9 名
- (6) 実践インターンシップ（アップサイクルアートで企業 PR プロジェクト（大同工業株式会社））
 - ・テーマ：『アップサイクルアート』で企業 PR を考えよう
 - ・活動内容：日々の生産で発生する，廃材などを企業 PR のアイコンとして蘇らせましょう。制作過程を含め，Instagram で発信も担当してもらいます。
 - ・募集人数：7 名

3.6 ガクセイ社会科見学（バスツアー）

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の一環として，ガクセイ社会科見学（バスツアー）を本年度 2 回開催し，様々な学域と学年の学生ら計 26 名が参加した。本企画は，地域社会を活かした体験や人との交流をとおして，多面的見方が促され，新しい解決策やイノベーションを生み出す一歩となることを目指している。

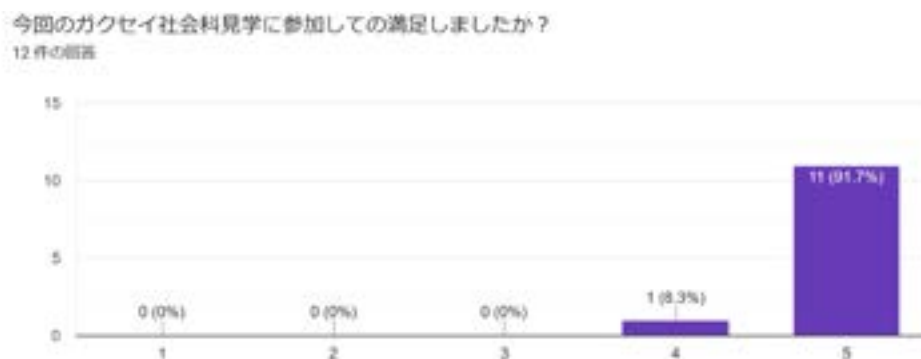
令和 6 年 7 月 2 日（火）は加賀建設株式会社，令和 6 年 11 月 12 日（火）に株式会社ハチバンを訪問し，普段は立ち入れない場所や働いている方々（経営者や大学 OB・OG など）から直接，企業や地域の魅力・課題に関する講話や質疑応答を行った。

参加者によると，「授業では知ることのできない企業に関する知識や実際にやっていることについて知ることができて貴重な経験ができた」「地域創生について今まで関心がなかったが，将来を考える選択肢の一つになった」「工場見学が小学生以来であり，純粋にワクワクした。また，初対面の人と交流できる貴重な機会となった」「社員の方々が和やかな雰囲気，こういった環境で働けたら理想的だと感じた」といった声が寄せられ，盛会のうちに会を終えた。



図表IV-13 第1回・第2回ガクセイ社会科見学の様子

参加者アンケート（第1回）（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））



図表IV-14 参加者による満足度

4. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の修了状況

4.1 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）アワード取得及び修了状況

先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）では、プログラムが定める一定の単位修得状況に応じて、ブロンズ・シルバー・ゴールド・プラチナの各アワードを付与しており、プラチナに到達した者（20 単位修得）が、KU-STEAM 修了者となる。

修了者は令和 7 年 1 月時点で 402 名に達し、学域による差異はあるものの、すべての学域で KU-STEAM 修了者が見られた。なお、融合学域は他学域と異なる取得要件で運用している。

図表IV-15 アワード取得及び修了状況

学域	学年	ブロンズランク	ゴールドランク	プラチナランク
人間社会学域	1年次	83	2	0
	2年次	329	257	21
	3年次	176	365	115
	4年次	82	423	159
	小計	670	1,047	295
理工学域	1年次	51	1	0
	2年次	157	318	7
	3年次	52	504	17
	4年次	7	547	17
	小計	267	1,370	41
医薬保健学域	1年次	147	0	0
	2年次	336	64	4
	3年次	167	201	0
	4年次	15	210	3
	小計	665	475	7
融合学域	4年次			59
	小計			59
総計		1,602	2,892	402

4.2 先導 STETAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) 修了者との懇談会

本学の教育の質の保証と向上に向けた取組みとして、学生が自ら学び自ら育む学修環境の構築は重要であり、本学における KU-DP の学びの価値を認識する機会として、令和 6 年 7 月 30 日（火）に KU-STEAM 修了者を招いた懇談会を開催した。

懇談会には、融合・人間社会・理工の各学域から 4 名の修了者が参加し、森本理事（総括・大学改革・教育・情報担当）・副学長、尾島副学長／教学マネジメントセンター長及び KU-STEAM の開発を担当する教学マネジメントセンター教員に、本プログラムを通して得た学びや気づきを発表し、今後の学修や卒業後の進路への生かし方やプログラム改善などについて意見交換を行った。

KU-STEAM 修了者から、KU-STEAM の受講を通じて、「学域・学類を越えた、価値観やバックグラウンドの異なる学生との交流」「地域に根差した企業で実践する面白さ」「失敗から得る気づきと挑戦・実践力」「自分の知らないことや苦手なことにも挑戦してみること」で得る興味や関心などの学びを得たとの意見があり、本プログラムでの学びの価値を改めて認識する機会となった。



図表IV-16 KU-STEAM 修了者との懇談会の様子

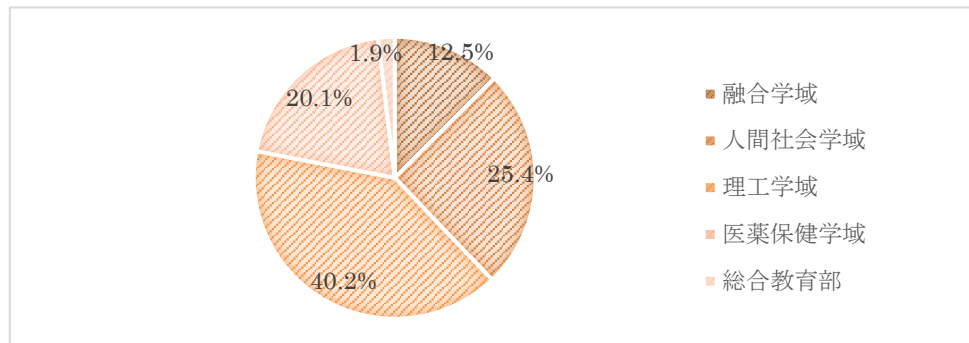
5. 「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」令和 6 年度追跡調査結果

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の一環で、「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」を、令和 3 年度後期からこれまで計 7 回開講した。

本講義は、KU-STEAM におけるプログラム導入科目で、受講者が協働する学域・学類、学年を超えた学生同士が集まり、身の回りの課題や関心をもとにした小さなアクション「ちょこっとマイプロジェクト（通称、ちょこプロ）」を通して「やってみたいこと」を実現する集中講義で、各回定員の 2 倍以上の履修登録があり、4 学域の各学類、1 年から 4 年生まで幅広く受講者がおり、口コミによって受講者が広がっていることが特徴といえる。

本講義の令和 3 年度 Q4 から令和 6 年度 Q2 までの受講者の所属学域の割合は、文系・理系に限らず、融合学域や医薬保健学域を含む 4 学域から幅広く受講していることが見て取れる。

(N=198)



図表IV-17 全受講者の所属学域の割合

授業ごとにルーブリック評価や満足度調査を行っており、高い評価は得られているものの、プログラム導入科目が年次進行とともにどのような効果があるのか、調査を行った。

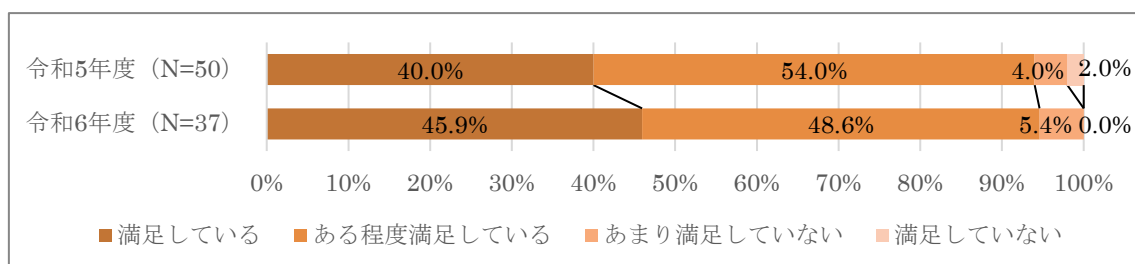
【調査実施概要】

- ・対象者：令和3年度 Q4 から令和6年度 Q2 までの受講者のうち卒業生を除く 198 名
- ・回答者数：37 件（回答率 18.6%）
- ・調査期間：令和6年1月9日（木）～2月6日（木）
- ・調査方法：学務情報システムを通じたウェブアンケート

【令和6年度「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」の追跡調査結果】

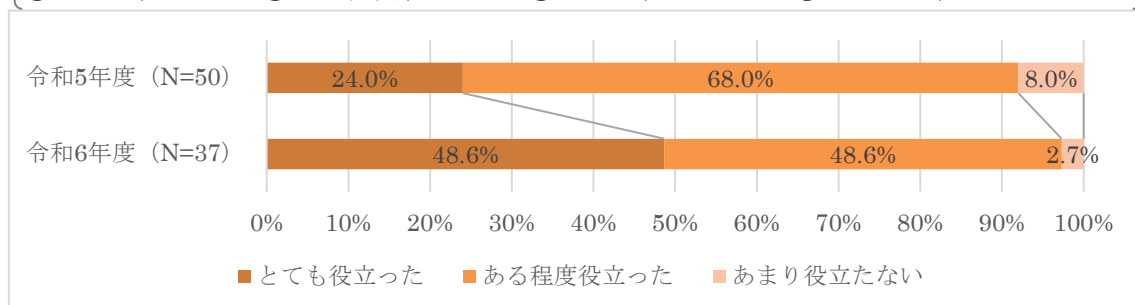
（1）学生生活の満足度

〔①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④満足していない〕



（2）ちょこプロの経験が、学生生活に役立ったか

〔①とても役立った ②ある程度役立った ③あまり役立たない ④まったく役立たない〕



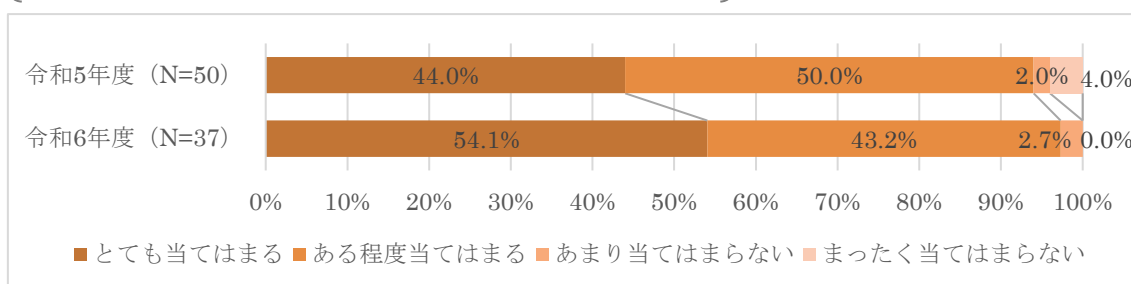
(3) ちょこプロの経験が、実際どこで、どのように役立ったか（自由記述）

⇒28 件の回答。主な回答内容は以下のとおり（原文ママ）。

- ちょこプロでアプリ開発を行って、継続開発をしてコンテストに参加した。自分が今まで関わったことがなかったプログラミングや技術開発を行う同世代の人たちに出会ったり、その人たちが集まる場所に行ったりすることによって、新しい世界を知ることができた。また、アプリ開発のデザインやプレゼンをメインで担当していて、効果的なプレゼンを考える力が向上し、大学のプレゼンなどに役立っているように感じる。デザインにも興味が出て、ウェブデザインやカラーパレットの勉強をするようになった。
- ちょこプロに参加した動機として、自分が文系科目に興味があるのか理系科目に興味があるのかをはっきりさせたいと考えていたことがある。ちょこプロで理系的な経験をしてみて、興味はあるけれども専攻したいほどではないという気持ちに気づき、2年次に人間社会学域の学問系を副専攻することを考えている。
- ちょこプロ経由で出会った人と話したことで自分の価値観が少し変化した。具体的には、職業選択について凝り固まっていた考えがなくなり、自分の中の選択肢が一気に広がった。その影響で、転学類を決心することにもつながったし、現在の事業活動にもつながっている。
- 社会問題などの専門教育においても、日々の生活においても、ひとつの視点に囚われることなく、文理融合的な視点を持つことができるようになった
- ちょこプロの学びの振り返りで「人を巻き込むのが苦手」なことに気づいて、「人に巻き込まれに行く」ことを目標にして、実際その後1、2年の間は人に巻き込まれに行きました。そうしているうちに巻き込んでくれた人たちに影響を受け、自分から人を巻き込んでやってみたいことを見つけて、人を巻き込み始めました。

(4) さまざまな人と交流したり、いろいろな経験をしたりするか

- ①とても当てはまる ②ある程度当てはまる
③あまり当てはまらない ④まったく当てはまらない



(5) プログラムに参加して自分のどのようなところに自信が持てるようになったか（自由記述）

⇒22 件の回答。主な回答内容は以下のとおり（原文ママ）。

- さまざまな人の力を借りて、自分が思い描いたものやことを現実にする力。
- 自分のプレゼンテーション力は向上したと思っています。元々、人前で話すときは内容

をすべてメモしないと緊張で話せなくなることが多かったですが、この授業以降は自分の考えを積極的に述べられるようになりました。また、フィードバックをもらう恐怖心も減りました。

- 自分の未来に対して、選択肢がたくさんあること。
- 最後まで熱意をもってやりとげられること。
- やってみたいことに素直に一步踏み出すことができる自分。

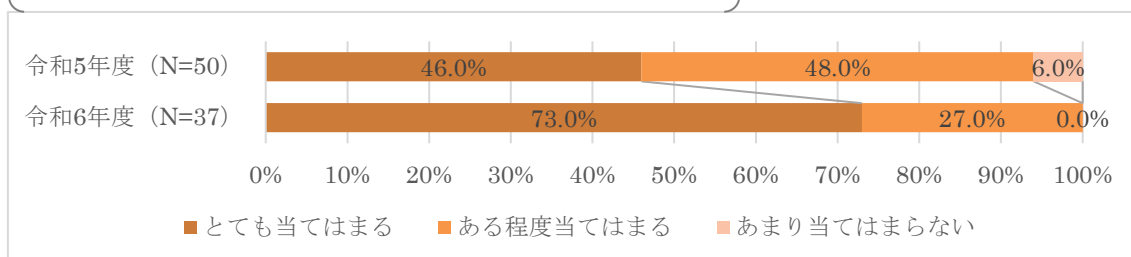
(6) プログラムに参加してこれから伸ばしたいと感じたことは何か (自由記述)

→20 件の回答。主な回答内容は以下のとおり (原文ママ)。

- 自分の好きなこと、やりたいことを見つける機会を日常の中で見つける努力はしようと思つた。
- 人の先頭に立った際の行動の仕方。
- フィードバックを元に自分の考えをブラッシュアップする力。
- ディスカッションで肯定するだけでなく、アイデアをもっと出せるように発表のポイントと課題を整理する力。
- 専門分野以外の人とのコミュニケーション。

(7) ちょこプロの履修をほかの人に勧めたいと思うか

- ①とても当てはまる ②ある程度当てはまる
③あまり当てはまらない ④まったく当てはまらない



図表IV-18 「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」
令和6年度追跡調査結果 (令和5年度調査との比較)

(8) ちょこプロを受講して感じたこと、要望など (自由記述)

→12 件の回答。主な回答内容は以下のとおり (原文ママ)。

- 使うペンの色がグループ内で皆バラバラであったり、学年バラバラのグループで本名ではなく「呼ばれたい名前」を設定できたり、A4 用紙に自由に書ける、といった点が、一人一人の個性を潰さないよう配慮されているのかなと感じました。また、ポスターで一人一人展示したりそこにフィードバックを送ったり、交流と個々のプログラムの尊重が積極的に生まれる空間を作ってもらえていると感じ、快い気持ちで参加出来ました。私自身自信を持って発言しやすく、大変ありがたかったです。
- 新しい人に沢山出会い、刺激を貰える時間で、それが授業外でも続いていることに感謝しています。
- 自分の興味に向き合う良い経験になりました。自分のちょこプロを具体的に進めてい

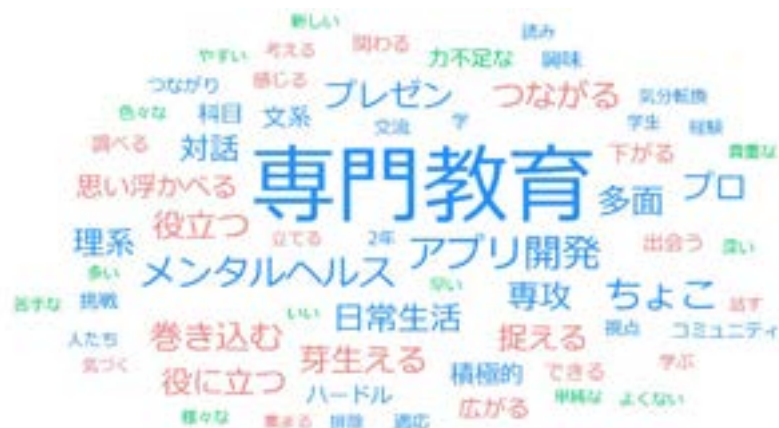
る時間はもちろん、それ以外の活動も興味深いものばかりで本当に参加して良かったです！ありがとうございました。

- 1 番大きかったのが自分にとっては出会いで、ちょこプロを通して知り合えた方々が、今でもイベントに呼んでくださったりお話ししてくださったりするおかげで、時々挑戦したい自分を取り戻すことができます。自分の成長より、周りにいろいろな人がいることを知って、自分も頑張りたいと思えるきっかけになったことが、参加して 1 番よかったことです。
- 小さなチャレンジをする機会をいただけて、非常に意義のある授業だと思います！

【結果考察】

令和 6 年度「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」の追跡調査結果について、2 年連続で実施した調査結果を比較した。ちょこっとマイプロジェクトの経験が役立ったという項目で「とても役立った」「ある程度役立った」で 97.2%の回答を得ており、令和 5 年度の調査結果と比較しても高い結果となった。

「プログラムに参加して自分のどのようなところに自信が持てるようになったか」という自由記述の項目をテキストマイニングで分析した結果、「専門教育、アプリ開発、メンタルヘルス、プレゼン」という言葉が複数あげられ、とくに「専門教育」というワードが示すように、1・2 年次に受講した経験が専門教育への影響が表れ始めていることが明らかとなった。以下に「ちょこプロの経験が、実際どこで、どのように役立ったか」を分析した図表を掲載する。



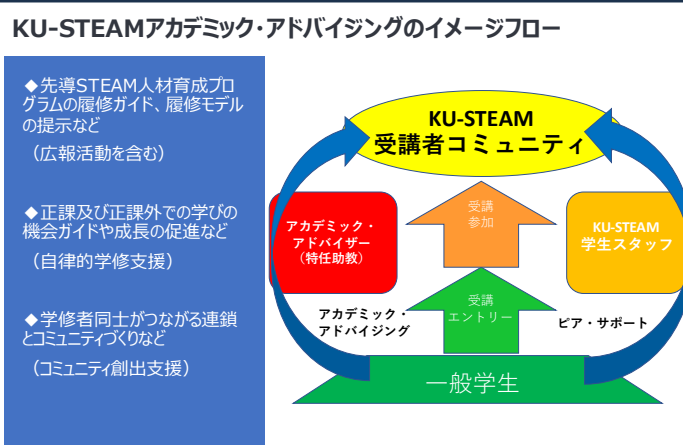
図表IV-19 「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」自由記述分析

6. アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援の取組

先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）では、アカデミック・アドバイザーの役割が極めて重要である。文理融合教育、異分野協働により、多様な知を得て「融合した専門知」を涵養することがプログラムの目的ではあるが、何より自身の専門教育がおろそかになってはいけない。ポートフォリオ機能の改修により、教員、アドバイザー、学生が、履修状況やプログラムの進捗度を一目で把握し、3 者で共有する体制を構築した。

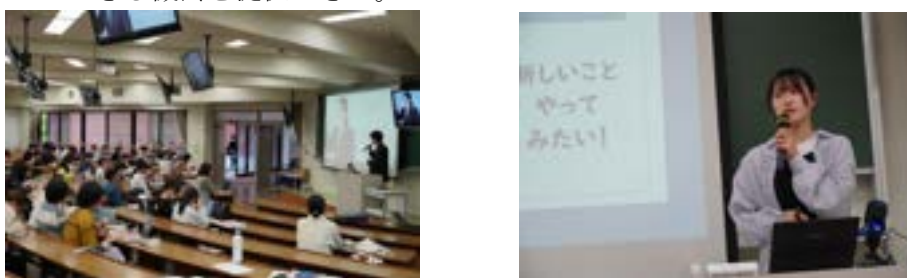
先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) では、アカデミック・アドバイザー (特任助教) による履修・指導アドバイジングによるオーダーメイド型の履修指導を主題とし、学生と教員の密な対話が大きなウェイトを占めており、本学としても重要なものとして認識している。また、プログラム受講者と KU-STEAM 学生スタッフとの対話の機会を積極的に設けながら、教員・学生が共に学びつつ事業を進めている。令和 5 年度には、「アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援に関するガイドライン」を新たに策定・公表した。

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) におけるアカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援の枠組は、「①先導 STEAM 人材育成プログラムの履修ガイド、履修モデルの提示など (広報活動を含む)」「②正課及び正課外での学びの機会ガイドや成長の促進など (自律的学修支援)」「③学修者同士がつながる連鎖とコミュニティづくりなど (コミュニティ創出支援)」であり、その概要図は図表IV-18 のとおりである。



図表IV-20 アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援の概要

まず、プログラムの履修ガイド、履修モデルの提示 (広報活動を含む) では、4 学域 20 学類、約 1,800 名の新入生を対象に「オリエンテーション等」において、KU-STEAM のパンフレットの先輩履修者の声をもとにプログラムの説明を行った。また、融合・人間社会・理工・医薬保健の 4 学域の学生が実際に体験談を語り、教員から授業内容や履修方法等について説明を行う「ランチョンセミナー」を合計 8 回開催し、累計 10 名のゲストを招き、325 名 (学生 279 名、教職員 46 名) の参加があった。これによって、気軽に先輩履修者の体験談を聞くことができる機会を提供できた。



図表IV-21 「ランチョンセミナー」の様子

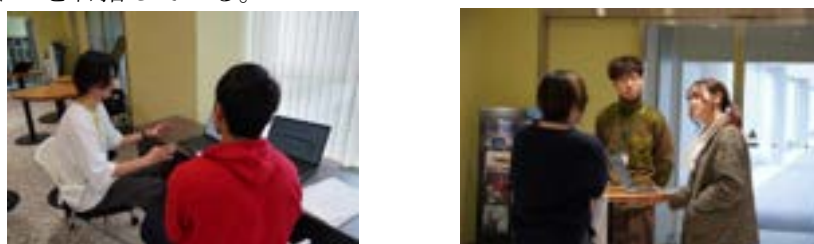
次に、正課及び正課外での学びの機会ガイドや成長の促進（自律的学修支援）では、学生との面談を行い、学生スタッフの活動拠点として、教学マネジメントセンター内に「STEAM ラボ」を設置した。「STEAM ラボ」でのアカデミック・アドバイジングの件数も着実に増えており、これまでの支援内容としては、授業関連(質的分析、授業課題)、課外活動(イベント、チラシ制作)、デザイン・映像編集、キャリア相談等があげられる。また、「STEAM ラボ」では、学生スタッフ同士の意見交換や各種作業を行うスペースを設けており、撮影機材、動画編集作業用の高性能 PC、動画・イラスト編集ソフトのほか、学習用の図書等を用意している。さらに、令和 5 年度には 3D プリンターやレーザーカッターを新たに導入し、試作品の製作など、学生の希望に応じて新しいことに挑戦する、またはスキルアップできる機会を提供している。



図表IV-22 KU-STEAM 学生スタッフが作成した学内広報用チラシや動画（一部）

学修者同士がつながる連鎖とコミュニティづくり（コミュニティ創出支援）では、KU-STEAM プログラムの関連科目を履修した学生がサポーターとして活動に「ピア・サポーター」として参画している。ピア・サポート、ファシリテーションの事前研修を行い、アイスブレイクの実施やグループワークの伴走支援として成果をあげている。課外活動では、高校生対象のイベント（探究・STEAM フェスタ）での対話スキルを発揮し、探究心を引き出す試みに広がっている。コミュニティ化の一環として、KU-STEAM 学生スタッフは後述するが、教員によるアカデミック・アドバイジング(AA)とともに、学生同士が支え合い、学び合うピア・サポートのコンセプトを融合させながら、教職学協働によるラーニング・コミュニティを創設することが重要である。

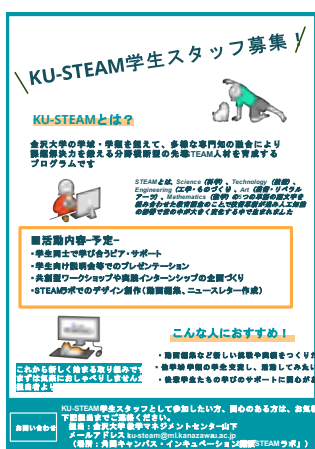
本事業では、アカデミック・アドバイザーを務める教員を中心に、KU-STEAM 学生スタッフが連携する形で、ランチョンセミナーや STEAM ラボの場づくりを通して、新しい学修支援スタイルを目指している。



図表IV-23 学生同士の「ピア・サポート」の様子

7. KU-STEAM 学生スタッフの取組

学域・学類を越えて、多様な専門知の融合により課題解決力を鍛える文理融合・分野横断型の先導 STEAM 人材を育成するプログラムでは、担当教員によるアカデミック・アドバイジングに加えて、学びの主体者として、学生同士で学び合うピア・サポート、学生向けの説明会等でのプレゼンテーション、共創型ワークショップや実践インターンシップの企画づくり、STEAM ラボでのデザイン創作（動画編集、チラシやニュースレター作成）など、学生同士の学び合いを大切にし、ピア・サポート体制の整備を進めている。このような活動に関わる KU-STEAM 学生スタッフを令和 3 年度に創設して以来、各学域の 1 年生から大学院学生まで、64 名が登録している。教職員の研修以外にも、学生スタッフが自主的に自らの得意を持ち寄って学びあう自主勉強会などが誕生している。



図表IV-24 学生スタッフ募集チラシ

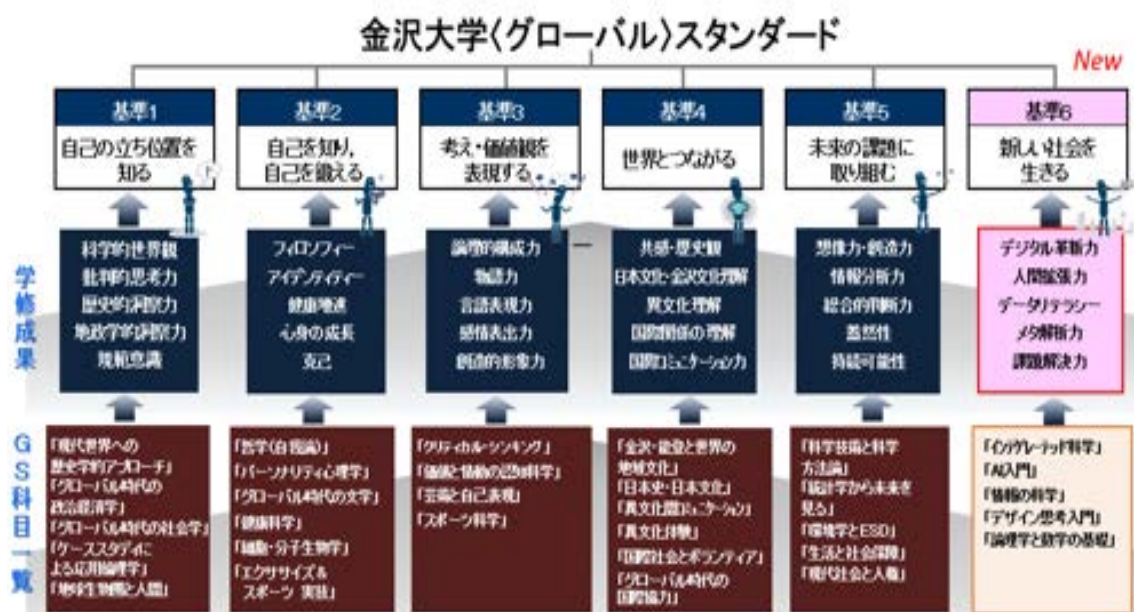


図表IV-25 学生スタッフ紹介ボード

V. 新しいリベラルアーツ教育・
STEAM 教育に関する取組実績

1. 共通教育科目 GS 科目 6 群の取組

学士課程のリベラルアーツ科目である共通教育科目 GS 科目と学域 GS 専門科目は、世界で活躍する「金沢大学ブランド」人材育成のために設けられた本学独自の人材育成方針である「金沢大学〈グローバル〉スタンダード（KUGS）」に基づき開設した授業科目であり、次の5項目（5群）：1.自己の立ち位置を知る、2.自己を知り、自己を鍛える、3.考え・価値観を表現する、4.世界とつながる、5.未来の課題に取り組む、により構成していた。本事業の下、令和3年4月に新たに STEAM 教育を取り入れた**第6のスタンダード「新しい社会を生きる」**（Society 5.0において、幅広い分野や考え方を俯瞰して異分野をつなげる力と新たな物事にチャレンジするマインドを備え、多様な他者との協働により未来の社会的課題を解決に導くための能力）に基づく5科目を開設し、既存のスタンダードと同列に学修目標を設定した。



図表 V-1 金沢大学（グローバル）スタンダード概要

共通教育科目 GS 科目に「新しい社会を生きる」と題した6群を新設し、**STEAM 教育の各領域に対応した図表 V-2 に示した5科目を令和3年度から開講し、令和6年度には、延べ7,165名程度の学生が履修した。**デザイン思考入門, AI 入門等の担当教員の体制も整い、シラバス及び教材作成のための担当教員間の FD 活動を積極的に行い、授業内容の充実を図っている。教学マネジメントセンターでは、共通教育科目 GS 科目1群から6群について、学生授業評価アンケート共通設問「①授業内容の適切性」「②担当教員の説明の仕方」「③授業外学修時間」「④授業理解度」「⑤学修目標達成度」「⑥授業満足度」の6項目における比較分析を定期的に行い、FD 委員会を通して全学にフィードバックしている。令和5年度学生授業評価アンケート結果（図表 V-3）では、「①授業内容の適切性」「②担当教員の説明の仕方」「⑤学修目標達成度」「⑥授業満足度」について、2群の科目が他群に比べ、平均スコアが高い。また、「③授業外学修時間」「④授業理解度」について、5群の科目が他群に比べ、平均スコアが高い。

図表 V-2 共通教育科目 GS 科目 6 群の概要

STEAM 領域	授業科目	学修成果				
		デジタル革新力	人間拡張力	データリテラシー	メタ解析力	課題解決力
S cience	インテグレート科学	○	◎	—	—	
T echnology & E ngineering	AI 入門	◎	—	○	○	○
	情報の科学	○	—	◎	○	—
A rts	デザイン思考入門	—	○	—	○	◎
M athematics	論理学と数学の基礎	—	○	○	◎	○

図表 V-3 学生授業評価アンケート結果を通した共通教育科目 GS 科目の各群比較

		回答数	回答率	①授業内容の適切性 (-50~50の101段階 のスコア平均)	②担当教員の説明の仕方 (-50~50の101段階 のスコア平均)	③授業外学修時間 (授業1回あたりの 時間数平均)	④授業理解度 (-50~50の101段階 のスコア平均)	⑤学修目標達成度 (-50~50の101段階 のスコア平均)	⑥授業満足度 (-50~50の101段階 のスコア平均)
共通教育 GS科目	1群	4,575	98.2%	30.1	26.3	3.4	24.3	24.7	25.5
	2群	6,657	97.9%	33.3	31.1	3.4	29.2	28.7	30.9
	3群	4,545	98.6%	31.7	30.3	2.8	28.4	27.7	29.7
	4群	5,053	97.8%	30.1	28.2	3.6	26.7	26.1	27.1
	5群	5,296	98.3%	32.9	31.0	3.7	29.4	28.4	29.5
	6群	6,220	98.6%	30.0	26.0	3.0	24.5	24.8	25.7

2. 学域 GS 科目の取組

同じく令和 3 年度から、学域内の分野横断型専門科目として学域ごとに定める「学域 GS 科目」の内容を刷新した上で、前年度までの 2 単位から 8 単位（一部 6 単位）の選択必修とし、質・量ともに拡充した。従前の学域を俯瞰する科目群の履修に加え、新たに、大学で学ぶ上で欠かすことのできない主体的・自主的学習への動機づけやそれぞれの専門分野の

社会的な役割を学ぶ「アカデミックスキル」(1 単位)と高校及び教養教育の学びからの橋渡しと少人数ゼミナール形式で学ぶ「プレゼン・ディベート論」(1 単位)の 2 科目を必修, 加えて「データサイエンス応用系科目群」から 2 単位以上を選択必修とし, 各専門分野におけるデータサイエンスの利活用を学ぶ。

令和 5 年度授業評価アンケート結果を用いて, 各学域における専門教育科目全体と学域 GS 科目群との比較分析を行ったところ, 前年度同様, いずれの学域においても学域 GS 科目の授業評価アンケート結果のスコアが高いことが明らかとなった。学域 GS 科目の教育成果及び学修成果について継続的に把握・分析を続ける。

図表 V-4 令和 5 年度学域 GS 科目群に関する授業評価アンケート結果分析

学域名	区分	回答数	①授業内容の適切性 (-50~50の101段階 のスコア平均)	②担当教員の説明の仕方 (-50~50の101段階 のスコア平均)	③授業理解度 (-50~50の101段階 のスコア平均)	④学修目標達成度 (-50~50の101段階 のスコア平均)	⑤授業満足度 (-50~50の101段階 のスコア平均)
融合学域	学域GS科目群	494	30.3 ↑	26.0 ↑	24.2 ↑	24.2 ↑	24.7 ↑
	専門教育科目全体	4,705	24.0	22.2	21.5	21.4	21.1
人間社会学域	学域GS科目群	4,580	28.5 ↑	26.3 ↑	24.8 ↑	24.7 ↑	26.0 ↑
	専門教育科目全体	30,602	26.7	24.8	23.6	23.3	24.4
理工学域	学域GS科目群	4,691	26.5 ↑	23.9 ↑	23.6 ↑	23.7 ↑	23.5 ↑
	専門教育科目全体	34,528	25.0	22.2	20.8	20.9	21.4
医薬保健学域	学域GS科目群	1,900	34.1 ↑	31.9 ↑	30.6 ↑	30.9 ↑	31.4 ↑
	専門教育科目全体	19,028	30.5	28.3	27.1	26.8	28.0

3. デザイン思考テストの実施

KU-DP 事業で取り組む文理融合・分野横断教育 (STEAM 教育) では, 知識集約型社会 (Society 5.0 社会) が目指す人間中心の暮らしや経済を実現するために資する人材育成を目指している。具体的には, 「デザイン思考」や「アントレプレナーシップ」を身に付けながら新しい価値を創造するイノベーション人材の育成である。

新たな価値創造の分野が「モノ」から「コト」にシフトしてきている中で, 「コト」のデザインを行うことができる資質・能力が分野を問わず大事になってきている。

このような観点から, 「デザイン思考力」を測定するアセスメントテストを試行導入し, KU-DP 事業で展開する文理融合・分野横断教育 (STEAM 教育) の教育成果及び学修成果の把握と検証に役立てることとする。

「デザイン思考力」を測定する動きは, 香川大学において独自開発による導入が検討されているが, 本学では, 就活生を主な対象として 20 万人規模の受検実績を有する VISITS Technologies 株式会社が開発する「デザイン思考テスト」について令和 4 年度の試行導入

を得て、令和 5 年度以降、共通教育科目 GS 科目 6 群「デザイン思考入門」受講者を対象に実施及び分析を続けてきた。

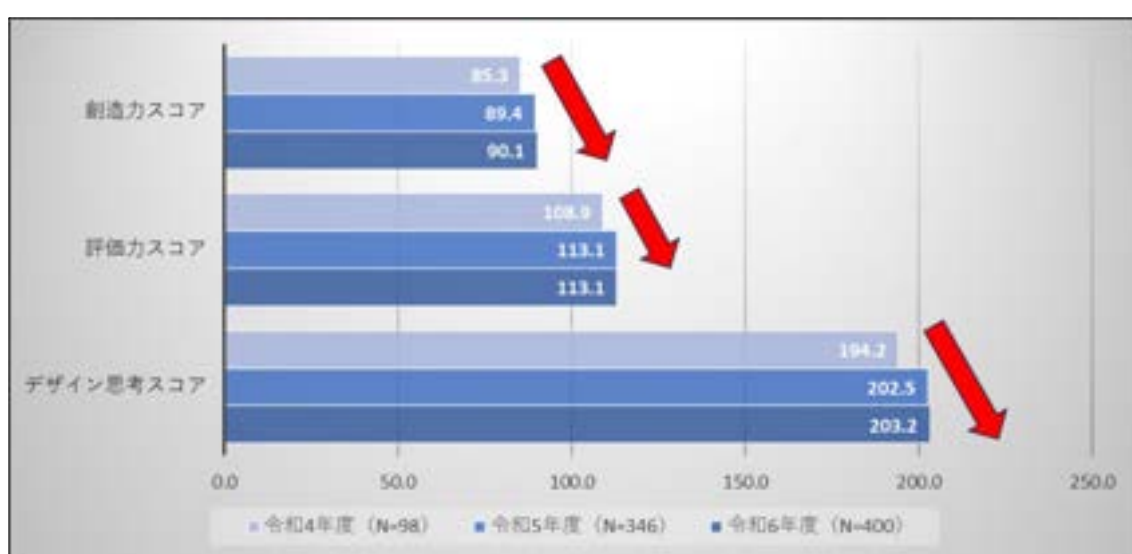
【受検状況】

実施時期：令和 6 年度 Q1～Q4

受検対象：「デザイン思考テスト」Q1・2 クラス，Q2・2 クラス，Q3・1 クラス，Q4・2 クラス（各クラス 60 名） 計 420 名

受検方法：授業時間内での受検実施

回答者数：創造セッション及び評価セッションをすべて完了した者は、400 名（回答率 95.2%）



図表 V-5 令和 4～6 年度「デザイン思考テスト」結果推移概要

4. 大学院 GS 科目の拡充

令和 4 年度から、リベラルアーツ教育拡充を一つの軸として共通教育科目 GS 科目、学域 GS 科目の拡充に続き、大学院課程にその成果を波及させ、大学院 GS 科目を拡充した。全研究科を横断して共通開講する大学院 GS 基盤科目（修士・博士前期課程）、大学院 GS 発展科目（博士・博士後期課程）を開設し、各 4 単位の修得を全ての大学院学生に課している。

特に、大学院 GS 基盤科目の一つである「知識集約型社会とデータサイエンス」では、文理融合教育や STEAM 教育の意義や価値を学びながら、総合知の創出に貢献する学修機会を全研究科の学生に提供している。

なお、教学マネジメントセンターでは、大学院課程における大学院 GS 科目の学修目標を体系化しつつ、カリキュラム上の位置付けを明確化するため、令和 6 年度において、大学院課程＜グローバル＞スタンダードの見直しとともに、新しく策定された同スタンダードと大学院 GS 科目の関係性を可視化するカリキュラム・マップを整備した。

図表 V-6 博士前期課程・修士課程における大学院 GS 基盤科目一覧

科目名称	単位	充足要件	担当	開設クラス	開講Q	曜日時限
異分野研究探査 I Laboratory Rotation I	0.5	必修	各研究科	—	Q1~Q2	集中
異分野研究探査 II Laboratory Rotation II	0.5	必修				
研究者倫理 Research Ethics	1	必修	垣内康孝 黒川英徳 GRUENE BERG.P 各研究科	9	Q1	水5 金1 金3 金4 火4 水6 水2 月5/月6 木1
知識集約型社会とデータサイエンス Data Science in Society 5.0	1	選択必修 1単位	林透 南保英孝	3	Q3 Q3 Q4	水5 火4 集中
次世代の先端科学技術 Advanced Science and Technology in the Next Generation	1		米田隆 各研究所 各センター	1	Q1	木6
スマート創成科学 Smart Science and Technology for Innovation	1		西山宣昭 藤生 慎 大野浩之 森 祥寛	3	Q3 Q4 Q3	火2 金2 金2
イノベーション方法論 Innovation Methodology	1		秋田純一 浅川直紀 他	2	Q1 Q2	月6 月6
数理・データサイエンス・AI基盤 Mathematical, Data Science, and AI Basic	1		各研究科	—	Q1~Q2/ Q3~Q4	集中
人間と社会の課題 Human and social challenges	1		小林宏明 他	2	Q2 Q4	水5 集中
ビジネス・技術マネジメント戦略論 Strategy for Business and Technology Management	1	選択必修 1単位	木綿隆弘 他	8	Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1	集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中
ヘルスケア・イノベーション Innovation in Healthcare	1				Q2	木6
破壊的イノベーションに向けた技術経営論 MOT as for Disruptive Innovation	1				Q3	水3

図表 V-7 博士後期課程・博士課程における大学院 GS 発展科目一覧

大学院GS発展科目名	単位	充足要件	担当教員	開設クラス	開講期	曜日時限
次世代研究者倫理 Research Ethics for Ph.D. Researchers	1	必修	各指導教員等	—	Q1	集中
次世代エッセンス実践 Transferable Skills for Ph.D. Researchers	1	必修	プログラム履修学生の指導教員	—	各研究科で設定	集中
次世代イノベーション開拓 Unleashing the Potential of Innovation for Future	1	選択必修 1単位	融合研究域 松島大輔	1	Q2	集中
数理・データサイエンス・AI発展 Mathematical, Data Science, and AI Advanced	1	選択必修 1単位	各指導教員等	—	Q1~Q2/ Q3~Q4	集中
国際研究実践 International Collaborative Research for Innovation	1	必修	各研究科教員	—	各研究科で設定	集中
ジョブ型研究インターンシップ Cooperative Education through Research Internships	2	選択	各指導教員等	—	各研究科で設定	集中

VI. 教学マネジメントセンターに関する取組実績

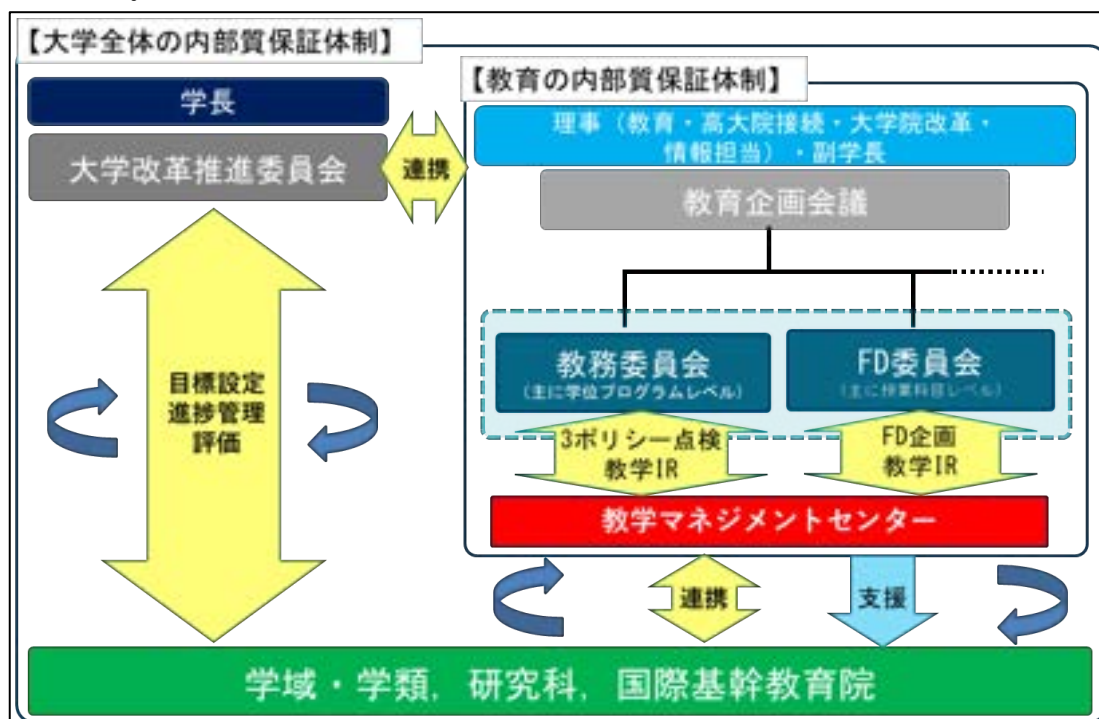
1. 教学マネジメントセンターの業務概要

学長のリーダーシップの下、本学の FD 支援、教学マネジメントを担ってきた国際基幹教育学院高等教育開発・支援系及び ICT 教育支援を担ってきた総合メディア基盤センターを発展的に解消し、新たに令和 3 年 4 月に教学マネジメントセンター及び学術メディア創成センターを設置し、両センター連携により FD、教学 IR、教育 DX を一体として推進する体制を構築した。

学内のマネジメント体制強化のため、教育担当理事の下に置く組織として位置付け、学内の連絡・調整を円滑にするため、全学の教務委員長・FD 委員長を務める学長補佐をセンター長に据え、センターの業務を掌理する体制とした。教学マネジメントセンター設置以降、教育の内部質保証体制の明確化の観点から、各種検討や学内調整を重ねつつ、現在は、図表 IV-1 に示す組織体制において、日々の活動を行っている。

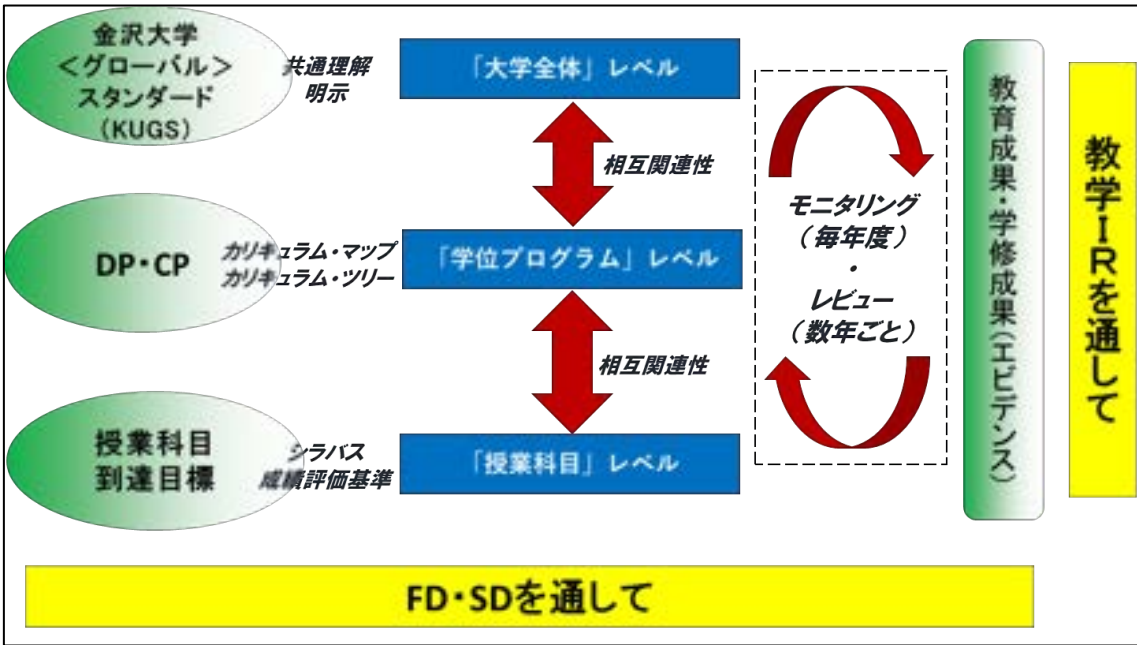
教学マネジメントセンターの具体的な所掌業務は、以下のとおりである。

- ① 全学の教学マネジメントの確立、学位プログラム等における教育の質保証及び質向上に関すること。
- ② 教育方法、教育システム及び教育支援等に関する研究開発並びに教育に係る質保証システムの研究開発に関すること。
- ③ 全学的に取り組む教育事業及び分野横断的学位プログラムの企画立案、運営及び評価に関すること。
- ④ 教育スキルの向上に資する支援に関すること。
- ⑤ 全学の FD・SD の企画・実施及び学域・研究科等の FD・SD 活動の支援に関すること。



図表 VI-1 教学マネジメントセンターの設置及び関係組織との連携体制

教学マネジメントセンターの諸活動を始めるにあたり、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会 2020）に示された「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに応じた教学マネジメントの枠組を図表VI - 2、VI - 3 のとおり体系づけながら、各レベルに応じた FD・SD、教学 IR の環境整備と具体的取組を進めている。



図表VI-2 教学マネジメントセンターが支援する教学マネジメントの枠組の概要図

項 目 レベル	教育・学修目標	改善充実のための機会 (FD・SD)	アセスメントツール (教学IR)
大学全体レベル (マクロ)	金沢大学 <グローバル>スタンダード (KUGS)	全学FD 新任教員説明会	学生生活実態調査 卒業・修了後アンケート
学位プログラムレベル (ミドル)	(各学類、専攻で定めた) ディプロマ・ポリシー (DP)	全学FD 学域・学類、研究科FD	卒業・修了者アンケート DP達成度自己評価
授業科目レベル (ミクロ)	(シラバスに明記された) 学修目標	全学FD 学域・学類、研究科FD 新任教員説明会 CLA研修	授業評価アンケート 成績評価分布

図表VI-3 アセスメントプランの枠組の概要図

2. FD・SD 活動の枠組と実績

令和 3 年度の教学マネジメントセンター設置以降、教育担当理事及び学長補佐（教育改革・学修支援担当）の指示のもと、全学的視点に立った FD・SD 活動を行いながら、部局 FD との協働・連携・支援を行っていく必要があるため、「全学 FD・SD」と「部局 FD」の関係性について事項整理しながら、「全学 FD・SD」で担うべきこと、「部局 FD」で担うべきことを明確化している。

【「全学 FD・SD」の役割と基本メニュー】

①「全学 FD・SD」の役割

- ◆大学の理念や基本方針の理解と共有
- ◆教職員として知っておくべき事項、遵守すべき事項の理解と共有
- ◆各年度における教学関連の全学的課題の理解と共有
- ◆教職協働，教職学協働のための場づくり

②「全学 FD・SD」の年間メニュー（基本セット）

図表VI-4 全学 FD・SD の年間メニュー（基本セット）

時期	内容
4月	新任教員説明会
4月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）研修会、高度TA研修会
9月	全学FD研修会
10月	FD活動報告書成果発表会
12月	教学マネジメントセミナー（全学FD・SD）
2月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）実施報告会
2月または3月	教員向け英語研修会
3月	全学FD研修会（当該年度成果報告会）

【「部局 FD」の役割と基本メニュー】

①「部局 FD」の役割

- ◆各部局における主要事項の理解と共有
- ◆各部局における各年度での諸課題の理解と共有
- ◆各部局における授業・カリキュラム，学修状況・成果の把握・検証
- ◆各部局における全学的課題の理解と共有

②「部局 FD」の基本メニュー

各部局に応じた組織単位での実施を尊重しつつ、部局主催での FD 活動について、以下の二つの区分に整理した。

ア) 個別テーマ型 FD・・・部局における主要事項の理解と共有，部局における各年度での諸課題の理解と共有を目的として，当該部局が独自のテーマ設定により実施する FD

イ) 統一テーマ型 FD・・・全学的課題の理解と共有などを目的とし，教学マネジメント

センター等が連携・支援しながら実施する FD

(授業評価アンケートや卒業・修了者アンケート等の結果報告、
機関別認証評価で求められる学位プログラム単位の DP・CP、
カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーに関する点検・
見直しなど)

令和 6 年度全体の FD・SD 実績は下表のとおりである。FD 委員会及び教学マネジメントセンターが企画実施する定例的な全学 FD 研修会に加え、先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の周知を主な目的とした、教職学協働型の KU-STEAM ランチョンセミナーを昨年度に続き企画実施した。また、高大接続コア・センターと共同主催した「探究・STEAM フェスタ」についても昨年度に続き企画実施し、高校生・高校教員と大学生・大学院学生・大学教員が集う対話の場づくりを設けることができた。

また、教学マネジメントセンターでは、時機に応じたテーマを話題に、短い時間で気軽に参加・意見交換できることをコンセプトとした新たな FD・SD イベントとして、「FD・SD ラウンジ」を 2 回企画開催し、いずれも好評であった。この新企画は、近年、高等教育を取り巻く環境の変化は目まぐるしく、高等教育機関としてカバーしなければならないテーマや領域が多様化し広がっていることから、新しく対応すべきテーマを中心に、最新の情報や今後の方向性を情報収集・意見交換することを狙いとしたものである。

本学では、各種セミナー・シンポジウム等を「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画として学外に広く公開するとともに、録画データ及び配布資料を学内ポータルサイトに公開・配信している。

図表 VI-5 令和 6 年度 FD・SD 実績の概要

内 容	開催月日	参加者数
新任教員説明会	4月4日 (火) 午前の部 4月4日 (火) 午後の部	64名 101名
KU-STEAMランチョンセミナー	4月下旬～11月上旬 計8回開催	325名
全学FD研修会 「文理融合・STEAM教育に関連した授業設計とは ～教養教育、専門教育など多様な観点から考える～」	7月4日 (木)	101名 (学外公開)
知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP) 採択校9大学合同企画 「未来志向型ワークショップ2024 (アイデアソン) ～『知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)』が創造する大学教育の未来～」	8月28日 (水)	85名
第1回FD・SDラウンジ 「国立大学における探究型入試の今後の方向性」	9月9日 (月)	21名
全学FD研修会及びKU-DPアドバイザーボード 「イシューベースラーニングのすすめ ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」	9月27日 (金)	56名 (学外公開)
全学FD研修会 FD活動報告書成果発表会	11月1日 (金)	43名
第2回FD・SDラウンジ 「DX・IRに関する取組紹介と今後の可能性 ～身近なソフトウェア活用からMicrosoft365や生成AIの活用事例まで～」	11月29日 (金)	51名 (学外公開)
知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP) 共通テーマ3参加校合同主催 教学マネジメントセミナー2024 「分野横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える ～文理融合・STEAM教育の時代における新しい学修支援～」	12月9日 (月)	170名 (学外公開)
高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAMフェスタ2024 ～高校生の探究心に火を灯す～」	12月15日 (日)	104名 (学外公開)
知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP) 採択校9大学合同主催 総括シンポジウム 「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ ～DP事業が目指し、創り上げてきた成果～」	3月6日 (木)	192名 (学外公開)

3. 学士課程・大学院課程の質保証に関連する環境整備

教学マネジメントセンターでは、令和3年度の創設以降、令和4年度に3つのポリシーの一貫性のある見直し、令和5年度にカリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備を行いつつ、授業評価アンケート等の学修成果把握のための教学IR環境の整備を進め、その総決算として、「教育の内部質保証に関する指針」を令和5年度末に策定するまでに至った。

令和5年度までに、学位プログラムレベル、授業科目レベルを中心とした教学マネジメントに関する基本的な環境整備が完了したため、令和6年度においては、大学院教育の質保証にも着目し、従来から継続検討していた大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂、各研究科の専攻長ヒアリングの実施を行った。令和7年度以降は、学士課程・大学院課程に関する一連の教育改革に寄与できるような組織基盤を整えた。

3.1 大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂

未来創成教育環 GS 教育企画部「学士・大学院一貫教養教育ワーキング・グループ」における教学マネジメントセンターからの「大学院課程<グローバル>スタンダード」改訂提案を踏まえながら協議を重ね、令和6年7月の教育研究評議会において承認された。

基本的には、現行の内容を踏襲しつつ、一部の内容変更を行いながら、「1. グローバルマインドと明確な倫理的思考」「2. 交渉力・統率力・実践力」の2項目に加え、下記の中教審大学分科会審議まとめ内容などを参考にして、新たに「3. 多様な「知」を融合し、新たな価値を創出する総合知」「4. トランスファラブルスキル」を加えることとした。具体的な改訂内容は以下のとおりである。

図表VI-6 大学院課程<グローバル>スタンダード改正前・改正後

(改正前)

1. 強固なグローバルマインドと明確な倫理的思考	2. 創造性・交渉力・統率力・実践力
今後、人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力	解決困難な課題にも、革新的なアイデアと粘り強い交渉力を発揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を開拓する能力

(改正後)

1. グローバルマインドと明確な倫理的思考	2. 交渉力・統率力・実践力	3. 多様な「知」を融合し、新たな価値を創出する総合知	4. トランスファラブルスキル
人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力	解決困難な課題に粘り強い交渉力を発揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を開拓する能力	高度な専門性をもって多様な分野を統合し社会を先導できる能力	生涯を通じて、高度な社会課題に関する問題発見・問題解決の場面に適用できるトランスファラブルな能力
《キーワード》 グローバル 文化・歴史理解 アイデンティティ ELSI (倫理的・法的・社会的課題)	《キーワード》 エンゲージメント リーダーシップ マネジメント レジリエンス	《キーワード》 高度な専門性 未知知 創造性 アントレプレナーシップ	《キーワード》 トランスファラブル データサイエンス DXリテラシー AIリテラシー

「大学院課程＜グローバル＞スタンダード」の改訂に伴い、令和 4 年度から開講している大学院 GS 基盤科目及び大学院 GS 発展科目との関係性を明確化したカリキュラム・マップを以下のとおり整えた。

図表VI-7 大学院 GS 基盤科目及び大学院 GS 発展科目カリキュラム・マップ

博士・博士前期課程/大学院GS基盤科目に関するカリキュラム・マップ

授業科目名	単位	必修・選択の別	本学開設科目：グローバルスタンダードに資する学習成果			
			1. グローバルマインドと国際化理解の促進（国際化に関するグローバルな視野・理解の醸成）	2. 言語力・読解力・発信力・異文化理解と協働の能力（国際化に関する能力）	3. 多文化「知」を創出し、新たな価値を創出する能力（国際化に関する能力）	4. トランスファラブルスキル（生涯を通じて、異文化の理解に資する問題発見・問題解決の能力に資するトランスファラブルスキル）
最先端研究演習Ⅰ Laboratory Rotation Ⅰ	0.5	必修			○	○
最先端研究演習Ⅱ Laboratory Rotation Ⅱ	0.5	必修			○	○
研究基礎 Research Ethics	1	必修	○			
国際協力の国際化とデータサイエンス Data Science for Society Ⅲ	1	選択必修 1単位			○	○
未来時代の先端科学技術 Advanced Science and Technology for the Next Generation	1		○	○	○	
スマート創造科学 Smart Science and Technology for Innovation	1				○	○
イノベーション基盤 Innovation Methodology	1			○	○	
数理・データサイエンス・AI基礎 Mathematical, Data Science, and AI Basic	1				○	○
人間と社会の課題 Human and Social Challenges	1	選択必修 1単位	○	○		○
ビジネス（経営）マネジメント戦略 Strategy for Business and Technology Management	1		○	○	○	○
ヘルスケア・イノベーション Innovation in Healthcare	1			○	○	○
協働的イノベーションと社会イノベーション CoT as for Collaborative Innovation	1		○	○	○	○

博士・博士後期課程/大学院GS発展科目に関するカリキュラム・マップ

授業科目名	単位	必修・選択の別	本学開設科目：グローバルスタンダードに資する学習成果			
			1. グローバルマインドと国際化理解の促進（国際化に関するグローバルな視野・理解の醸成）	2. 言語力・読解力・発信力・異文化理解と協働の能力（国際化に関する能力）	3. 多文化「知」を創出し、新たな価値を創出する能力（国際化に関する能力）	4. トランスファラブルスキル（生涯を通じて、異文化の理解に資する問題発見・問題解決の能力に資するトランスファラブルスキル）
国際研究開発倫理 Research Ethics for Ph.D. Researchers	1	必修	○			
国際化コミュニケーション基礎 Transferable Skills for Ph.D. Researchers	1	必修		○		○
未来型イノベーション開拓 Unlocking the Potential of Innovation for Future	1	選択必修 1単位	○		○	
数理・データサイエンス・AI発展 Mathematical, Data Science, and AI Advanced	1				○	○
国際研究開発 International Collaborative Research for Innovation	1	必修	○	○	○	○
ジョイント研究インターンシップ Cooperative Education through Research Internships	2	選択	○	○	○	○

さらに、当該スタンダードに関する学修成果の可視化について、大学院学生版学生生活実態調査、トランスファラブルスキル・トレーニング参加者へのアンケート調査などの方法で今後対応していく予定である。

3.2 (研究科) 専攻長ヒアリング(対話型 FD)の実施

令和5年度において、学類長を対象としたヒアリング(対話型 FD)を行うことを通して、各学類における教学マネジメントの実態や文理融合・分野横断に関連した教育活動の工夫等に関する多くの知見を得ることができた。

令和6年度においては、各研究科・専攻における教学マネジメントの実態を把握することを目的とした専攻長ヒアリング(対話型 FD)を企画することとした。本学において重視している大学院教育の質保証のため、近年、導入した QE (Qualifying Exam) 制度、大学院 GS 基盤科目・大学院 GS 発展科目、ラボ・ローテーション制度を含め、コースワークや研究室教育を通じたカリキュラム・マネジメントや学修成果の把握の観点から、ヒアリング調査を実施した。

【調査対象・実施時期】

調査対象：全研究科(修士課程、博士前期課程・博士後期課程、博士課程、専門職学位課程)の23学類

対応者：専攻長及び教務担当教員

実施時期：令和6年5月27日(月)～7月12日(金)各1時間半程度

【ヒアリング項目】

以下の項目を事前に送付し、半構造化インタビュー形式で行った。なお、以下の項目以外に、「研究科・専攻における教学関係会議」「全学委員会から依頼事項に対する研究科・専攻内での作業系統」「アドバイザー教員、指導教員等を通じた学生支援」のほか、「授業評価アンケート結果、卒業・修了者アンケート結果の活用度合」を聴取した。

- ①(研究科)専攻における DP・CP の認知度、大学院学生への説明機会について
- ②(研究科)専攻におけるカリキュラム点検、シラバス点検について
- ③(研究科)専攻における専門教育の特徴、強み、課題について
- ④(研究科)専攻における研究室教育について
- ⑤大学院学生の学修行動、学修成果(専門性と汎用性)の把握について
- ⑥修士研究・博士研究の審査基準、審査体制について
- ⑦QE 制度等を含めた学士課程と修士課程・博士前期課程の接続、修士課程・博士前期課程と博士課程・博士後期課程の接続について
- ⑧ラボ・ローテーションの運営について
- ⑨大学院学生に対する学生支援、キャリア支援について
- ⑩(研究科)専攻における FD 活動について

【ヒアリング調査結果概要】

<教学マネジメント関係>

- ①(研究科)専攻における DP・CP の認知度、大学院学生への説明機会について
- ②(研究科)専攻におけるカリキュラム点検、シラバス点検について

大半の研究科では、履修案内(学生の手引き)において、ディプロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)を掲載している。なお、自然科学研究科のみ、QRコードでの掲載に留まっている。形式的ではあるが、大学院課程における DP・CP の浸透度合いは

高まっている。大半の研究科において、修士課程・博士前期課程を中心に、入学時のオリエンテーションにおいて、DP・CPに関連した説明を行っている。

また、カリキュラム点検、シラバス点検についても日常的に行われているが、卒業・修了者アンケート結果の共有について、昨年度の学類長ヒアリングと同様に、不十分な専攻が一部見られた。

＜大学院専門教育の特徴、強み、課題＞

③（研究科）専攻における専門教育の特徴、強み、課題について

④（研究科）専攻における研究室教育について

人間社会環境研究科、法学研究科、教職実践研究科においては、専攻としての専門教育の特徴や強みが明確化しており、かつ、履修案内等で履修モデルを明示するなど、きめ細かい配慮がなされている。

自然科学研究科については、企業就職の前提として博士前期課程に進学する学生が多く、博士後期課程進学者の確保に苦慮しているケースが見られるが、機械科学を始め、専門分野として博士人材の不足・必要性を訴えるケースが見られた。

医学・薬学・保健学の各専攻においては、非医学系の学生を受け入れる専攻が存在するなど、多様な学生を受け入れるための専門教育プログラムの魅力発信や広報戦略を着実に進めている印象を受けた。専攻としての専門教育の特徴や強みに関する言語化も非常にスムーズであった。なお、薬学専攻における博士課程入学者増の傾向が見られる一方、創薬科学専攻における医薬科学類との接続を通じた進学者のあり方に課題が感じられた。

新学術創成研究科については、異分野融合や最先端のナノ研究分野など、工夫を凝らしたカリキュラム構成や研究指導体制が組まれているが、博士前期課程入学者や博士後期課程進学者の確保に課題を残している。入学者を学内リソースに依存することなく、異分野融合等の魅力発信を通して、学外からの入学者獲得戦略が期待される。

＜大学院専門教育における学修成果の把握＞

⑤大学院学生の学修行動、学修成果（専門性と汎用性）の把握について

⑥修士研究・博士研究の審査基準、審査体制について

人間社会環境研究科が積極的に取り組む「研究カンファレンス」を中心に、修士研究や博士研究の進捗や学修成果を把握する機会設定がなされている。

自然科学研究科フロンティア工学専攻では、当該専攻の分野横断の特徴を活かして、研究室やコースの垣根を越えた形での大学院生発表会が行われている。

新学術創成研究融合科学共同専攻では、金沢大学・北陸先端科学技術大学院大学の教員が複数指導体制に参画し、幅の広い指導を受けることができる環境となっている。

先進予防医学共同研究科においても、金沢大学・千葉大学・長崎大学の教員が主指導・副指導教員に参画する体制を構築している。

修士研究・博士研究における審査基準、審査体制、さらには、学位審査に至るスケジュールについては、大半の研究科において履修案内またはホームページ等で明示されている。前回の機関別認証評価での指摘に伴う対応は適切に行われていることを確認した。

＜近年の大学院教育改革に伴う対応の現状＞

⑦QE 制度等を含めた学士課程と修士課程・博士前期課程の接続，修士課程・博士前期課程と博士課程・博士後期課程の接続について

⑧ラボ・ローテーションの運営について

QE 制度については，博士前期課程においては，原則として QE で修了することとしているが，修士論文をまとめあげることの重要性を訴える専攻が多く見られた。

ラボ・ローテーションについては，大学院 GS 基盤科目「異分野研究探査Ⅰ・Ⅱ」そのものの趣旨目的の共通理解の徹底や教員の負担感の解消が課題であると感じられた。例えば，全学の研究科を越えた研究交流会のような会にしてはどうかという提案（＝教員の負担を減らし，学生の研究時間の確保しつつ異分野との交流の機会を確保する）があった。

＜大学院における学生支援や FD＞

⑨大学院学生に対する学生支援，キャリア支援について

⑩（研究科）専攻における FD 活動について

学生支援については，どの研究科においても研究連携協力教員制度が浸透している。

キャリア支援については，主に，自然科学研究科博士前期課程の学生向けに，専攻単位で企業説明会等を行うケースが一部見られる。

FD 活動については，学類と合同で行うケースが多く，大学院教育に特化して実施している事例は，法学研究科法務専攻，教職実践研究科といった専門職学位課程である。この 2 部局については，専門分野別認証評価等の外部評価が厳格であり，授業評価アンケートの分析，各種 FD 研修会が相当の頻度で実施されている。

＜その他＞

★大学院教育におけるオンライン授業やオンデマンド教材の有効活用

先進予防医学共同研究科では，コロナ禍を通して，多くの授業を VOD（オンデマンド）化と双方向オンラインで行っているが，オンデマンド率が高いため，最新の研究内容をいかに盛り込むかを議論している。その一方で，社会人大学院生が多い保健学専攻などでは，夜間や臨床業務が増えると両立が難しいという声が多い。また，遠方の学生にはなるべく双方向性のオンラインで対応しているほか，ラボ・ローテーションや大学院 GS 科目でも対面の科目が多く，社会人大学院生を受け入れる対応を検討する必要がある。医科学専攻・医学専攻は合同のオンライン説明会を行ったところ，例年を大きく上回り，海外からの参加も見られた（＝社会人大学院生の受け入れに向けた広報と制度設計）。

★ 博士進学増の課題

本学の大学院教育のボリュームゾーンは自然科学研究科（や新学術創成研究科）であるが，企業就職目的に博士前期課程に進学してくる学生が大半を占めている。学類の 2・3 年次に博士進学を動機づける機会設定が必要である。例えば，薬学類では，1 年次における博士進学者による講話に留まらず，2・3 年次におけるキャリア形成科目を学士課程教育のカリキュラムに組み込んでいる。このような事例を参照すべきである。

3.3 各学域・研究科における教学マネジメント・FD 活動の連携支援

令和 5 年度の学類長ヒアリング及び令和 6 年度の専攻長ヒアリングを通して、各部局における教学マネジメントの実態を把握することができたことに伴い、教学マネジメントセンター側からの連携支援を行いやすい環境を整えることができた。このような環境整備の下、教学マネジメントセンターが中心となって企画実施している全学 FD 研修会について、令和 6 年度までは、知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）に関連したテーマで企画実施するケースが多かった。令和 6 年度で同事業が終了することから、令和 7 年度以降の全学 FD・SD 企画等の事項整理を行った。

【具体的な方向性】

- センター運営経費を財源として、全学 FD・SD 企画等を行うことを基本とするが、各学域主催の FD 研修会等との連携を強化していくこととする。既に、各学域・学類等と連携した FD 研修会等の実績があり、これらの実績を基礎に各学域・学類等での FD 活動を支えることに軸足を置いた取組を進める。

（これまでの各部局との関係性・実績）

融合学域では、教学マネジメントセンター教員が講師となった FD 研修会、ベネッセ i キャリア職員が講師となった FD 研修会の実施実績があり、同様の連携を継続する。

人間社会学域では、本年 12 月開催の学域主催 FD 研修会にて、教学マネジメントセンター教員が講師を務めたことを契機に、同学域・学類とのチャンネルを強化する。

理工学域では、令和 4 年度より、理工・自然研 FD シンポジウムの企画に教学マネジメントセンターが携わり、令和 5 年度より、本センターが共催して実施している。令和 6 年度も同様に実施予定で連絡調整中であり、今後も同様の関係性を維持する。

医薬保健学域では、令和 5 年度より、医学教育研究センターとの連携を図りカリキュラム委員会に参画するほか、令和 6 年度より、医学類フォーカスグループインタビュー支援などに取り組み、医学教育の質保証の関わりを強めており、今後も、医学類を中心に、同学域・学類との連携を維持する。

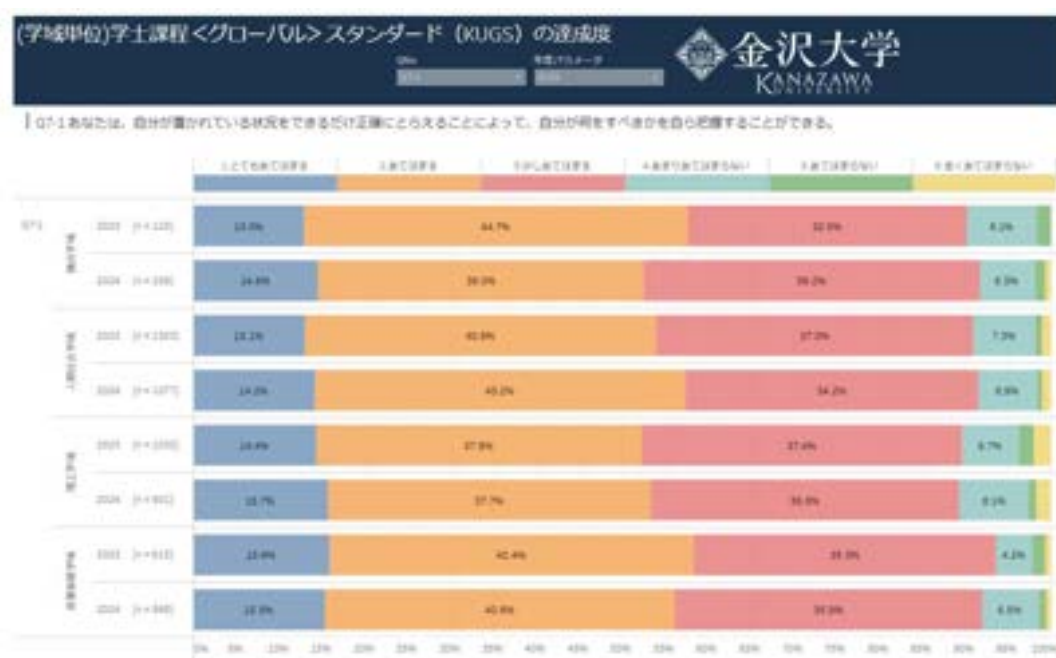
- 全学 FD・SD 企画等において、時機に応じた設定テーマに沿って、各学域・学類に 出向き、20～30 分程度のコンパクトな話題提供や意見交換を行う FD 機会の確保に努める。
- 現在、委嘱しているセンターアドバイザーについては、センターにおける FD・SD 企画等において必要な人材であり、来年度以降も継続委嘱することとし、本学の全学 FD・SD 企画等における支援を受ける体制を維持する。
- 数年に 1 回の頻度で、学類長や専攻長を対象としたヒアリングを行い、学位プログラムレベルの教学マネジメントに関するレビューすることで、教育の内部質保証に役立てる。
- 大学コンソーシアム石川教職員研修専門部会に提案する本学主催の FD・SD 企画について、大学コンソーシアム石川加盟機関にとって効果的なテーマを提供できるように努める。

4. 教学 IR 環境整備

令和 3 年度に、教学マネジメントセンターが中心となり、授業評価アンケートにおける共通設問化、卒業・修了者アンケートにおける学生生活満足度の設問の統一化を行うとともに、当該結果の集計を教学マネジメントセンターで行う環境を整備した。

令和 4 年度から令和 5 年度にかけて、FD 委員会を通して、当該集計結果を各部局にフィードバックする環境を整えるとともに、FD 活動報告書における当該集計結果概要を掲載、さらには、教学マネジメント FACTBOOK の刊行にまで至った。

BI ツールの Tableau を活用し、授業評価アンケート及び卒業・修了者アンケート集計結果のダッシュボードを整備し、教学マネジメントセンター「教学 IR ダッシュボード」と称して、学内外に公表している。令和 6 年度には、新たに、学士課程<グローバル>スタンダード達成度の可視化を追加整備した。以上により、授業科目・学位プログラム・大学全体レベルに関する代表的な学修成果指標のダッシュボード化を完了することができた。



図表VI-8 学士課程<グローバル>スタンダード達成度可視化ダッシュボード（一部）

5. 全学教育・国際共修機構の創設

全学の教育改革・教学マネジメントの確立を実現し、その中心軸を「学修者本位の教育」へと転換させるべく、令和4年4月に学長の下に「未来創成教育環（以下「教育環」という。）」を設置した。教育環は、本学教育改革の抜本的飛躍を担う組織として、未来創成を牽引する金沢大学ブランド人材の育成・輩出に向けた取組を推進している。

さらに令和7年度には、新たな全学横断型の教育組織として「全学教育・国際共修機構」を設置予定であり、教学マネジメントセンターは同機構の中に位置付けられることになる。同機構は、教育環が掲げる「自ら学び、自ら育む」教育環境の構築を継承し、グローバルイノベーションキャンパスの実現に向け、学士課程から大学院課程に至る一貫したリベラルアーツ教育を充実させるとともに、本学の更なる国際化を見据えた国際共修を強化・推進していく。

教学マネジメントセンターについては、新しい組織体制の下、引き続き、学士課程・大学院課程に関する一連の教育改革を支え、FD・SD活動、教学関係に関する学生調査の実施・分析、3つのポリシーに基づく教育の内部質保証の充実、認証評価対応に取り組む。

VII. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業
(KU-DP) イベント報告

1. 令和 6 年度第 1 回採択校連絡会

日 時：令和 6 年 5 月 22 日（水）10：00～10：55

場 所：Zoom によるオンライン開催

対 象：各採択校の事業実務担当者（教員・職員各 1～2 名程度）

参 加 者：44 名

概 要：

- (1) 開会挨拶
- (2) DP 事業最終年度における成果発信イベント企画
- (3) 令和 5 年度第 2 回採択校連絡会報告
- (4) DP 事業共通テーマチーム活動実績
- (5) 金沢大学令和 6 年度第 2 回全学 FD 研修会（幹事校企画）
- (6) 連絡事項等

内 容：

令和 6 年 5 月 22 日（水）、令和 6 年度第 1 回「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」採択校連絡会をオンライン開催し、メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲ採択校 9 大学の教職員ら 44 名が参加した。採択校連絡会は、採択校 9 大学が本事業に関する意見交換を行う場として年に数回開催しているものである。

冒頭、金沢大学の尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長が開会挨拶を行った。

金沢大学教学マネジメントセンター副センター長の林透教授進行のもと、はじめに本事業最終年度における成果発信イベント企画案について説明があり、原案のとおり企画を進めることを承認した。次に、令和 5 年度第 2 回採択校連絡会及び本事業共通テーマチーム活動実績について報告を行った。続いて、7 月 4 日開催予定の金沢大学令和 6 年度第 2 回全学 FD 研修会（本事業幹事校企画）を案内し、各採択校からの参加を呼び掛けた。

最後に、金沢大学の尾島副学長が閉会挨拶を行い、本事業最終年度におけるイベント企画を採択校同士で協力し、進めることを確認した。



図表Ⅶ-1 本学会場の様子

2. 令和6年度第2回全学FD研修会「文理融合・STEAM教育に関連した授業設計とは～教養教育，専門教育など多様な観点から考える～」【「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」幹事校企画】

日 時：令和6年7月4日（木）14：00～16：00

場 所：Zoomによるオンライン開催

参 加 者：101名

主 催：金沢大学「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会

共 催：金沢大学FD委員会・教務委員会，公益社団法人 大学コンソーシアム石川

概 要：

14：00～14：10 オープニング

14：10～14：50 基調講演

「大学教育分野における文理融合・STEAM教育の可能性 ～高次STEAMと新たな社会課題～」

北陸先端科学技術大学院大学 理事（研究振興，社会連携担当）・副学長 永井 由佳里 氏

14：50～15：35 事例紹介（話題提供）

(1)「理数系分野における文理融合・STEAM教育の授業実践」

金沢大学 融合研究域 融合科学系 教授 南保 英孝

(2)「“泉鏡花×金沢アート”をコンセプトとしたSTEAM教育の授業実践」

金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長・教授 林 透

(3)「キャリアデザインを活かした文理融合・STEAM教育の授業実践」

金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教 山下 貴弘

15：30～15：55 質疑応答・意見交換

15：55～16：00 クロージング

内 容：

令和6年7月4日（木），令和6年度第2回全学FD研修会「文理融合・STEAM教育に関連した授業設計とは～教養教育，専門教育など多様な観点から考える～」をオンライン開催し，学内外の教職員・学生101名が参加した。

本研修会は，文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」幹事校企画の一環として開催するとともに，FD委員会，教務委員会及び公益社団法人大学コンソーシアム石川の共催で実施した。

近年，学校教育だけでなく，大学教育において，文系・理系を越えた知識理解や姿勢・態度の修得の必要性から，文理融合・STEAM教育に関する話題が増えてきた。この動向は，「高等学校における教科横断型教育の動きが大学教育の変容を迫っている点」「イノベーションを創出できる『総合知』を備えた人材の育成を求めている点」の二つの教育政策に起因している。このような教育政策を促進するため，文部科学省「知識集約型社会を支える人材

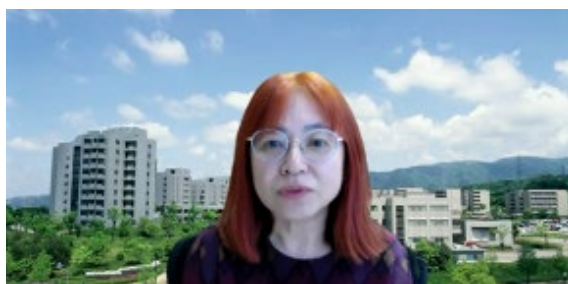
育成事業（DP）」「地域活性化人材育成事業（SPARC）」のほか、私立大学等改革総合支援事業でも文理融合・STEAM 教育に関する取組が指標化されている。一方、大学教育関係者の間では、文理融合・STEAM 教育に関する具体的な授業設計において試行錯誤するケースが散見される。本研修会では、文理融合・STEAM 教育に関連した授業実践事例を紹介し、大学教育分野における文理融合・STEAM 教育の在り方について、「文理融合・STEAM 教育に関連した授業設計とは ～教養教育，専門教育など多様な観点から考える～」をテーマに、基調講演や事例紹介を通して参加者とともに考える機会とした。

はじめに、森本章治理事（総括・大学改革・教育・情報担当）／副学長より開会挨拶があった。その後、北陸先端科学技術大学院大学の永井由佳里理事（研究振興，社会連携担当）・副学長が「大学教育分野における文理融合・STEAM 教育の可能性 ～高次 STEAM と新たな社会課題～」と題し、STEAM 教育の背景や定義，社会や産業へどのようにつなげていくのか，という観点から基調講演を行った。特に、「人間性と野性」として、デザイン（探索的思考）が大切であると力説された。

続いて、本学の文理融合・STEAM 教育の話題提供として、融合研究域融合科学系の南保英孝教授が「理数系分野における文理融合・STEAM 教育の授業実践」，教学マネジメントセンター副センター長の林透教授が「“泉鏡花×金沢アート”をコンセプトとした STEAM 教育の授業実践」，同センターの山下貴弘特任助教が「キャリアデザインを活かした文理融合・STEAM 教育の授業実践」と題した事例紹介を行った。

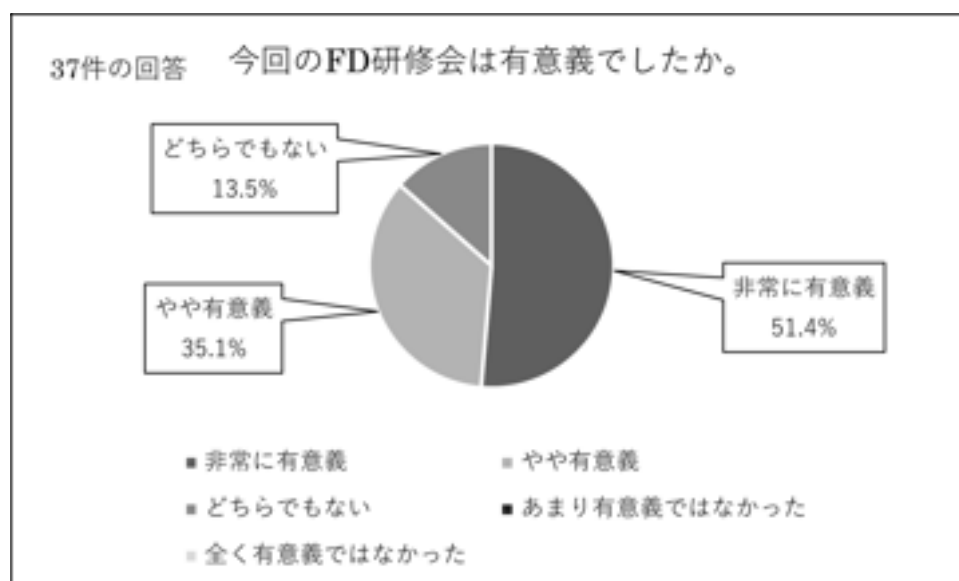
後半の意見交換では、林教授によるファシリテートのもと、フロアとの質疑応答を通して、創造性に関する学生の質の変化，リフレクションの方法，学生の気づきを促す工夫や専門知や異分野を意識させる工夫，複数の分野の組み合わせ方など，多くの質問が寄せられた。

2 時間という短い時間だったが、本学をはじめとする大学関係者にとどまらず，企業等からの参加を含め，100 名以上の参加申込みをいただき，大学における文理融合・STEAM 教育の在り方への関心の高さを感じることができた，大変有意義な機会となった。



図表Ⅶ-2 基調講演を行う永井由佳里理事・副学長

参加者アンケート：



図表Ⅶ-3 令和6年度第2回全学FD研修会参加者アンケート集計結果

3. 知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）採択校合同企画「未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン） ～『知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）』が創造する大学教育の未来～」

日 時：令和 6 年 8 月 28 日（水）13：00～17：15

場 所：東京都市大学 世田谷キャンパス 7 号館 1 階 TCU ホール

※対面，Zoom によるハイブリッド開催

参 加 者：85 名

主 催：金沢大学（幹事校），東京都市大学，新潟大学，信州大学，大正大学，
麻布大学，千葉大学，早稲田大学，名古屋商科大学

概 要：

13：00～13：10 オープニング・開会挨拶

東京都市大学 副学長（教育担当） 田口 亮 氏

13：10～13：20 趣旨説明

金沢大学 教学マネジメントセンター副センター長・教授 林 透

13：20～15：40 未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン）

[ファシリテーター]

・東京都市大学 教育開発機構 教授 杉浦 正吾 氏

・金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教 山下 貴弘

15：40～17：10 グループ発表・全体共有

17：10～17：15 クロージング

内 容：

令和 6 年 8 月 28 日（水），東京都市大学 世田谷キャンパス 7 号館 1 階 TCU ホールで，知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）採択校 9 大学による合同企画「未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン） ～『知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）』が創造する大学教育の未来～」をハイブリッド形式で開催した。本学が DP 事業の幹事校として企画し，全採択校が協働したもので，各採択校の取組に関わる教職員・学生，企業・自治体等の関係者，学校教育関係者ら 85 名が参加した。

今年度は DP 事業の最終年度である中，本イベントは，成果発信シリーズの第一弾として各採択校から参加者が集い，DP 事業の最終到達点や事業終了後の新しい大学教育の未来イメージを共に描くことを目的とした。

DP 事業では，メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲに採択された 9 つの大学が，それぞれ個性ある取組を展開し，新しい大学教育のモデルを提示・波及する使命を担っている。そこで，本ワークショップでは，DP 事業の目的である「社会変化に柔軟に対応できる幅広い教養と深い専門性を兼ね備えた人財を育成」する上で親和性の高い手法である探究型学習の基本的手法であ

る「PBL (Project/Problem Based Learning)」に着目し、「実施したくなる PBL プログラムの素」を少人数グループでディスカッションし、アイデアを練り上げた。

冒頭、東京都市大学の田口亮副学長（教育担当）から開会挨拶があった。その後、金沢大学教学マネジメントセンター副センター長の林透教授から本企画に関する趣旨説明として、本ワークショップは事業最終年度の成果発信第一弾として『知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）』が創造する大学教育の未来について、各採択校が育んできた大学教育の未来の「種」を持ち寄り、みんなで話し合い、提案することを目的に、大学が中心となってステークホルダーの枠を越えてつながる意義について説明を行った。

続いて、各採択校の事例紹介を行った後、東京都市大学の杉浦正吾教授と金沢大学教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教によるファシリテートのもと、「未来思考型ワークショップ（アイデアソン）」と題して、採択校の枠を越えた教職員・学生・企業・自治体等の関係者、学校教育関係者らをシャッフルしたグループで検討を行った。

後半のまとめ・プレゼンテーション共有では、各グループの代表者がそれぞれのグループで考案した PBL の企画について発表をした。たとえば、「学びのショッピングモール化」、「アバターを用いたプログラム」、「学生の創る PBL」や「他大学や企業を巻き込んだ卒業研究」など、多様なアイデアが提案された。

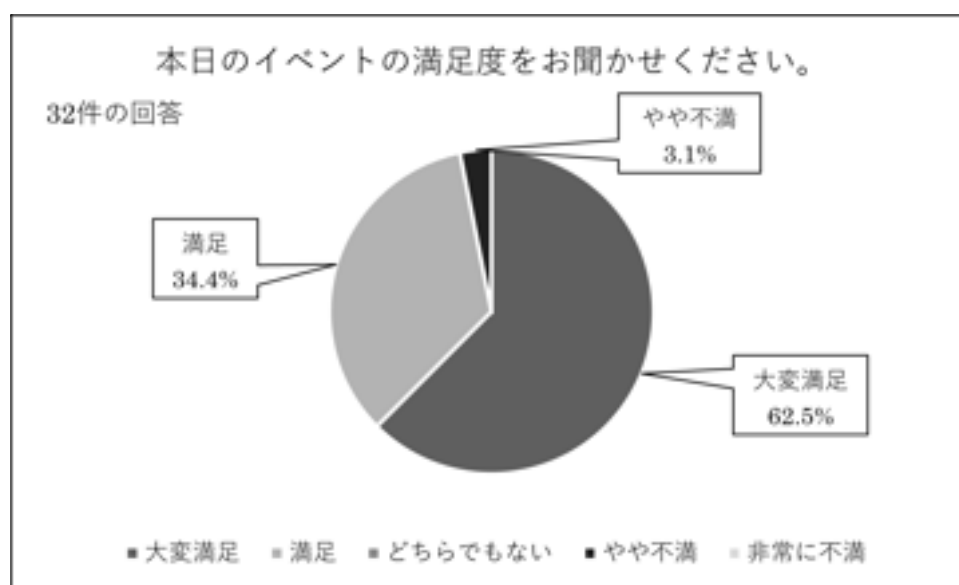
最後に、東京都市大学 DP 事業のプログラムオフィサー（PO）である慶應義塾大学大学院の井上雅裕特任教授から、DP 事業における取組の発展に向けて弾みとなるコメントをいただいた。

採択校の大学関係者や学生に加え、企業・自治体・学校等といった、多様なステークホルダーの参加者が一堂に介し、社会全体で本事業の価値を捉えなおすことができた、大変有意義な機会となった。本ワークショップでの意見を今年度に引き続き予定されている最終成果発信に向けて活かしたい。





図表VII-4 イベントの様子



図表VII-5 未来思考型ワークショップ 2024 参加者アンケート集計結果

4. 令和6年度第1回FD・SDラウンジ「国立大学における探究型入試の今後の方向性」

日 時：令和6年9月9日（月）14：00～15：00

場 所：Zoomによるオンライン開催

対 象：本学教職員・学生

参 加 者：26名

主 催：金沢大学 教学マネジメントセンター

内 容：

令和6年9月9日（月）、令和6年度第1回FD・SDラウンジをオンライン開催し、学内の教職員・学生26名が参加した。

近年、高等教育を取り巻く環境の変化は目まぐるしく、高等教育機関としてカバーしなければならないテーマや領域が多様化し広がっていることから、新しく対応すべきテーマを中心に、最新の情報や今後の方向性を情報収集・意見交換する必要性が増している。教学マネジメントセンターでは、時機に応じたテーマを話題に、短い時間で気軽に参加・意見交換できることをコンセプトとした新たなFD・SDイベントとして、「FD・SDラウンジ」を開催した。

はじめに、尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長が開会挨拶を行った。その後、同センター副センター長の林透教授による本会の趣旨説明があった。

続いて、九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門（教育学部）の木村拓也教授から「国立大学における探究型入試の今後の方向性」と題し、日本の大学入試の概観、近年の総合選抜型入試に対する各大学の取組、探究型入試の今後の方向性について基調講演があった。

後半の質疑応答・意見交換では、林教授によるファシリテートのもと、入試改革や大学入学後の授業改革の重要性、総合的な探究の学習が高校に導入されたことによる影響、他大学の入試制度などについて、フロアとの質疑応答を通して意見を交わし、参加者とともに探究型学習の在り方を考える機会となった。



図表Ⅶ-6 基調講演の様子

5. 令和6年度第3回全学FD研修会・KU・DPアドバイザーボード「イシューベースラーニングのすすめ ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」

日 時：令和6年9月27日（金）14：00～16：00

場 所：金沢大学バイオマス・グリーンイノベーションセンター（BGIC）

1階ステップホール ※対面，Zoomによるハイブリッド開催

参 加 者：56名

主 催：金沢大学「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会

共 催：金沢大学FD委員会・教務委員会，公益社団法人大学コンソーシアム石川

概 要：

14：00～14：15 オープニング・趣旨説明

14：15～14：45 話題提供①（文理横断・分離融合を通じた課題設定）

「融合学域先導学類におけるプロジェクト演習」

・金沢大学 副学長（教育改革・企画評価担当）／

教学マネジメントセンター長 尾島 恭子

・金沢大学 融合学域先導学類所属学生

14：45～15：35 話題提供②（企業等との協働実践による課題設定）

「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) における課題解決学習」

受入れ先企業等（1）大同工業株式会社

・大同工業株式会社 人事部人事課 坂下 直樹 氏

・KU-STEAM 実践インターンシップ受講生

受入れ先企業等（2）ミミミラボ

・ミミミラボコーディネーター 吉川 英祐 氏

・KU-STEAM実践インターンシップ受講生

15：35～15：55 意見交換

15：55～16：00 クロージング

内 容：

令和6年9月27日（金），令和6年度第3回全学FD研修会・KU・DPアドバイザーボード「イシューベースラーニングのすすめ ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」金沢大学バイオマス・グリーンイノベーションセンター（BGIC）1階ステップホールにて，ハイブリット（対面及びオンライン）開催し，学内外から56名が参加した。

文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」では，分野を超えた専門知の組合せが必要とされる時代における，従来の学部・研究科等の組織の枠を超えた幅広い分野からなる文理横断的なカリキュラムを構成し，高度な専門知識を持ちつつ普遍的な見方のできる能力を備えた人材育成を目指している。特に，令和4年度からは，DP事業採択校9

機関による共通テーマを4つ設定し、そのうち、共通テーマ2として、「文理融合教育における課題テーマやイシュー設定のあり方を情報交換・検討【Setup】」を行っている。

学習者の課題解決力や実践力を鍛えるためには、授業設計における課題テーマやイシューの設定が非常に大事になってくる。本研修会では、金沢大学で取り組む融合学域や先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の実践事例を紹介しながら、イシューベースの学習の意義や価値について、本学の全学 FD 研修会に位置付け、教務委員会及び FD 委員会、大学コンソーシアム石川の共催で、参加者とともに考えることを目的に開催することとした。

冒頭、尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長より開会挨拶の後、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授より本研修会の趣旨説明があった。前半の話題提供①（文理横断・文理融合を通した課題設定）では、最初に尾島副学長より「融合学域先導学類におけるプロジェクト演習」と題し、基調講演があり、続けて融合学域先導学類4年次の風間祐亮さんから、プロジェクト演習の実践報告があった。

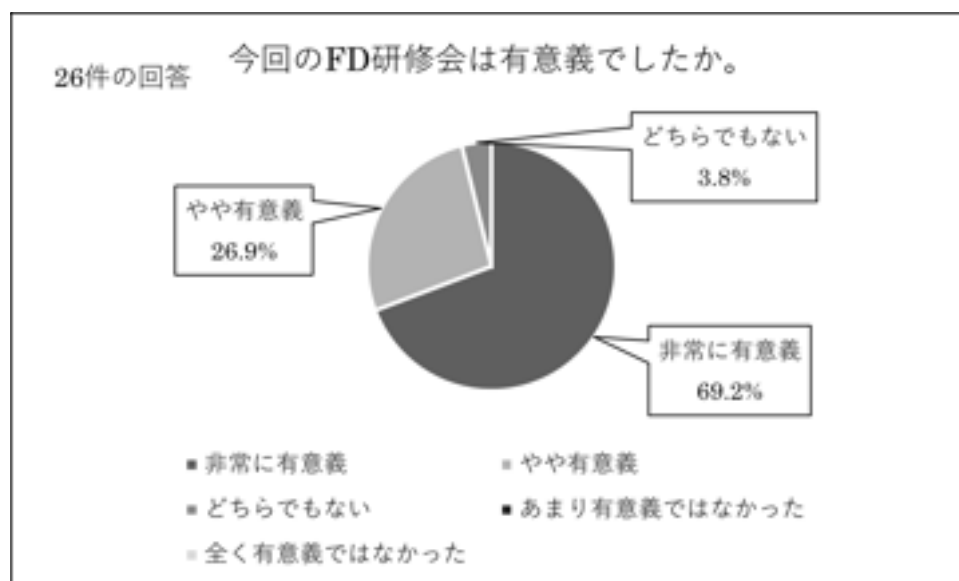
その後、話題提供②（企業等との協働実践による課題設定）では、実践インターンシップの受入企業等から、大同工業株式会社の坂下直樹氏とミミミラボコーディネーターの吉川永祐氏をお招きし「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）における課題解決学習」と題して、実践インターンシップの課題テーマやイシュー設定の背景やプログラムの構成について、報告があった。さらに各プロジェクトに参加した受講学生の中から、人間社会学域人文学類2年次の岩谷茉莉さん、融合学域先導学類3年次の鱸居美穂子さんが、学生の視点による実践インターンシップの実践報告と学びの振り返りの発表をした。

後半の意見交換では、参加者との質疑応答を通して、課題に向き合う学生自身の主体性の大切さや、大学と企業等が連携して課題解決学習の機会を提供できるエコシステムの構築の重要性などについて意見が交わされ、盛会のうちに会を終えた。



図表Ⅶ-7 話題提供の様子

参加者アンケート：



図表Ⅶ-8 令和6年度第3回全学FD研修会参加者アンケート集計結果

6. 令和6年度第2回採択校連絡会

日 時：令和6年11月7日（木）10：00～10：55

場 所：Zoom によるオンライン開催

対 象：各採択校の事業実務担当者（教員・職員各1～2名程度）

参 加 者：39名

概 要：

- (1) 開会挨拶・説明
- (2) 未来思考型ワークショップ2024（アイデアソン）実施報告
- (3) 共通テーマ3参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024 企画報告
- (4) 令和6年度 DP 事業成果発信イベント第三弾企画（案）
- (5) 連絡事項等

内 容：

令和6年11月7日（木）、令和6年度第2回「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」採択校連絡会をオンライン開催し、メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲ採択校9大学の教職員ら39名が参加した。採択校連絡会は、採択校9大学が本事業に関する意見交換を行う場として年に数回開催しているものである。

冒頭、金沢大学の尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長が開会挨拶を行った。

金沢大学教学マネジメントセンター副センター長の林透教授進行のもと、はじめに、DP事業成果発信イベント第一弾として開催した「未来思考型ワークショップ2024（アイデアソン）」の実施報告を行った。次に、共通テーマ3参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024について企画報告を行った。続いて、令和6年度 DP 事業成果発信イベント第三弾企画について提案があり、協議の結果、企画を進めることとした。

最後に、金沢大学の尾島副学長が閉会挨拶を行い、本事業最終年度におけるイベント企画を採択校同士で協力し、進めることを確認した。



図表Ⅶ-9 本学会場の様子

7. 令和6年度第2回FD・SDラウンジ「DXやIRに関する取組紹介と今後の可能性 ～身近なソフトウェア活用からMicrosoft365や生成AIの活用事例まで～」

日 時：令和6年11月29日（金）13：30～15：00

場 所：Zoomによるオンライン開催

対 象：本学及び大学コンソーシアム石川加盟機関の教職員，学生

参 加 者：51名

主 催：金沢大学 教学マネジメントセンター

内 容：

令和6年11月29日（金），令和6年度第2回FD・SDラウンジをオンライン開催し，学内の教職員・学生ら51名が参加した。第2回となる今回はDX（デジタル・トランスフォーメーション）・IR（インスティテューショナル・リサーチ）をテーマに宮崎大学IRセンターの大関智史専任講師（本学教学マネジメントセンターアドバイザー）を講師に招き，開催した。

はじめに，尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長が開会挨拶を行った。その後，同センター副センター長の林透教授による本会の趣旨説明があった。

続いて，大関氏が「DX・IRに関する取組紹介と今後の可能性 ～身近なソフトウェア活用からMicrosoft365や生成AIの活用事例まで～」と題し，身近な日常業務におけるDXやIRに関する知恵や工夫について講演を行った。講演の中では，ダミーデータを用いて実践用デモも行われた。

後半の質疑応答・意見交換では，林教授によるファシリテートのもと，生成AIの活用や実際の宮崎大学の事例として紹介された仕事をする上で感じる「もやもや」を業務改善につなげる「もやもやプロジェクト」，部署を横断したデータ整理などについて，フロアとの質疑応答を通して意見を交わし，参加者とともにDX・IRに関する取組紹介と今後の可能性を考える機会となった。



図表VII-10 基調講演の様子

8. 「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」共通テーマ 3 参加校合同主催・学
マネジメントセミナー2024「文理横断の学びを支援する組織・方法・担い手について
考える ～文理融合・STEAM 教育の時代における新しい学修支援～」

日 時：令和 6 年 12 月 9 日（月）13：30～17：00

場 所：大正大学 巣鴨キャンパス 1 号館 2 階 大会議室

※対面，Zoom によるハイブリッド開催

参 加 者：166 名

主 催：金沢大学，大正大学，新潟大学，早稲田大学

概 要：

13：30～13：40 開会挨拶

大正大学 学長 神達 知純

13：40～13：50 文部科学省来賓ご挨拶

13：50～14：20 基調講演①

「分野横断の学びを豊かにするアカデミック・アドバイジングとは」

日本アカデミック・アドバイジング協会 会長

愛媛大学 教育・学生支援機構 准教授 清水 栄子 氏

14：20～14：50 基調講演②

「文理融合・STEAM 教育におけるピア・サポートの効果と可能性」

日本ピア・サポート学会 理事

上越教育大学 大学院学校教育研究科 教授 松下 健 氏

14：50～15：30 採択校からの成果報告

金沢大学 学修マネジメントセンター副センター長・教授 林 透

大正大学 学修支援センター 専任講師 長谷川 隼人

新潟大学 教育基盤機構 学修マネジメント部門 准教授 上畠 洋佑

早稲田大学 社会科学部 教授 早田 宰

15：30～15：50 [休憩] 採択校によるポスターセッション

15：50～16：55 パネルディスカッション

文理融合・STEAM 教育の時代における新しい学修支援

[パネラー]

金沢大学 人間社会学域国際学類 3 年次 長野 重音

大正大学 文学部人文学科 3 年次 富岡 沙和

新潟大学 経済科学部 4 年次 佐々木 真理也

早稲田大学 社会科学部 4 年次 柳原 百花

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授 清水 栄子 氏

上越教育大学 大学院学校教育研究科 教授 松下 健 氏

[ファシリテーター]

金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教 山下 貴弘

16:55~17:00 閉会挨拶

金沢大学 副学長（教育改革・企画評価担当）／

教学マネジメントセンター長 尾島 恭子

内 容：

令和6年12月9日（月）、「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」共通テーマ3 参加校（金沢大学・大正大学・新潟大学・早稲田大学）合同主催・教学マネジメントセミナー2024「分野横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える ～文理融合・STEAM教育の時代における新しい学修支援～」を、会場の大正大学 巣鴨キャンパス1号館2階 大会議室とオンラインのハイブリッドで開催し、学内外の教職員・学生170名が参加した。

DP事業では、令和4年度から、当該メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲを横断した共通テーマを4つ設定し、採択校9大学が各メニューを越えて相互連携することにより、汎用性ある成果を蓄積・発信することを目指している。このうち、共通テーマ3は「多様な学びを支援する方法及びシステムのあり方を情報交換・検討」をテーマに掲げている。

本セミナーでは、冒頭、大正大学の神達知純学長が開会挨拶をした後、文部科学省高等教育局大学教育・入試課の山田研市課長補佐から来賓挨拶があった。

その後、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の清水栄子准教授（日本アカデミック・アドバイジング協会会長）が「分野横断の学びを豊かにするアカデミック・アドバイジングとは」と題し、また、上越教育大学大学院学校教育研究科の松下健教授（日本ピア・サポート学会理事）が「文理融合・STEAM教育におけるピア・サポートの効果と可能性」と題し、基調講演を行った。

「採択校からの成果報告」では、金沢大学教学マネジメントセンター副センター長の林透教授、大正大学学修支援センターの長谷川隼人専任講師、新潟大学教育基盤機構教学マネジメント部門の上畠洋佑准教授、早稲田大学社会科学部の早田宰教授が、各大学における取組内容や成果を発信した。

また、休憩時間には、採択校9大学によるポスターセッションを行い、参加者同士で活発な意見交換が行われた。

後半のパネルディスカッションでは、「文理融合・STEAM教育の時代における新しい学修支援」をテーマに、金沢大学教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教によるファシリテートのもと、2名の基調講演者に加えて金沢大学人間社会学域国際学類3年次の長野重音さん、大正大学文学部人文学科3年次の富岡沙和さん、新潟大学経済科学部4年次の佐々木真理也さん、早稲田大学社会科学部4年次の柳原百花さんの4名の学生を交えて、「文理融合・STEAM教育の時代における新しい学修支援」をテーマに、基調講演や採択校からの成果報告に関して寄せられた質問に沿って、「学修支援における成果」「アカデミック・アド

バイジングを実現するための全学的な支援体制」「ピア・サポートを継続していくための課題」「学生支援の Tips」などについて意見交換がなされた。分野横断の学びを支援する「組織」「方法」「担い手」について、アカデミック・アドバイジングとピア・サポートの知見に加えて、学生の実体験に基づいた新しい学修支援の在り方について考える貴重な機会になった。

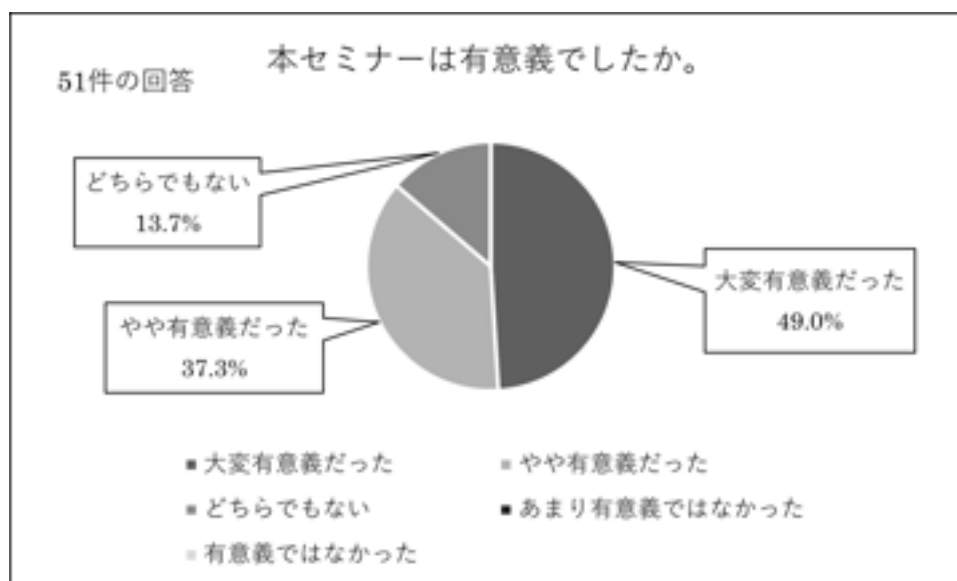
最後に、金沢大学の尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長より閉会挨拶があった。

参加者のアンケート結果からは、「分野横断の学びを行うアカデミック・アドバイジングはアドバイザーのみの尽力ではなく、全学的なサポートが必要なことがわかった」「ピア・サポートという立場でも、携わった学生たちを成長させていくことができる可能性がわかった」「他大学学生の取組状況がよく分かった。サポート学生の研修の内容など参考になった」「各大学の学生の発表内容や質疑の受け答えが素晴らしく、とても良かった」という声が寄せられ、盛況のうちに会を終えた。



図表VII-11 セミナーの様子

参加者アンケート：



図表VII-12 教学マネジメントセミナー2024 参加者アンケート集計結果

9. 高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2024 ～高校生の探究心に火を灯す～」

日 時：令和 6 年 12 月 15 日（日）13：00～16：00

場 所：金沢大学 ナノ生命科学研究棟 4 階メインカンファレンスルーム

対 象：高校 1 年生

参 加 者：104 名（本学の大学生・大学院学生を含む）

主 催：金沢大学 教学マネジメントセンター

共 催：金沢大学 高大接続コア・センター

概 要：

13：00～13：10 開会挨拶・趣旨説明

13：10～13：30 アイスブレイキング（グラドルール説明を含む）

13：30～15：30 高校生の探究心に火を灯すラウンドテーブル

・大学生・大学院学生による司会進行

・高校生と大学生・大学院学生によるナナメの対話

・大学生・大学院学生によるリアル探究トーク

・明日に向けた誓い・宣言

15：30～15：40 KUGS 特別入試制度の紹介

15：40～16：00 クロージング・閉会挨拶

内 容：

令和 6 年 12 月 15 日（日）、教学マネジメントセンターでは、文理融合・分野横断の STEAM 教育推進の一環として、探究学習や STEAM 教育をキーワードに、高校生と大学生・大学院学生が相互に学び合う場づくりとして、高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2024 ～高校生の探究心に火を灯す～」を開催した。石川県・富山県・福井県の高校 20 校から定員を大きく上回る 56 名の高校生のほか、引率者の高校教員や父母等、本学の大学生・大学院学生を含む計 104 名が参加した。

教学マネジメントセンターでは、高等学校教育において必修化されている「総合的な探究の時間」をはじめとする教科横断型の探究学習を通じた高大接続・高大連携に着目し、高大接続コア・センターと連携した取組を進めている。「探究・STEAM フェスタ」は、探究学習に取り組んでいる高校 1 年生を対象に、大学生・大学院学生との対話を通して、自らの探究心を高めるとともに、新たな学びや将来に向けたキッカケづくりを目指して令和 4 年度から開催しており、今回が 3 度目となった。

森本章治理事（総括・大学改革・教育・情報担当）／副学長による開会挨拶からはじまり、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授による趣旨説明を行った後、高大接続コア・センターの荻谷千尋特任助教と田中千晶特任助教、KU-STEAM 学生スタッフによる

アイスブレイキングを実施した。

次いで、社会人ファシリテーターである一般社団法人 motibase 代表理事の和泉宏氏と KU-STEAM 学生スタッフによる司会進行、及び株式会社 mumm 代表／マイプロジェクト 福井県事務局の村上純一郎氏らのサポートのもと、大学生・大学院学生によるリアル探究トークや、探究等をテーマとした高校生との対話を行った。

探究をテーマにブース発表を行った学生とテーマは次のとおりである。

- (1) 辰島 穂花さん 理工学域理工 3 学類一括 1 年次『『工学×医療』の道』
- (2) 広富 愛奈さん 総合教育部文系 1 年次「佐治漆研究とわたし」
- (3) 櫻井 七海さん 理工学域物質化学類 3 年次「部活から始まる探究活動」
- (4) 大八木 和輝さん 融合学域先導学類 4 年次「アート&デザインの領域における探究」

そして、高校生がワークシートに基づき明日に向けた誓い・宣言を行い、当日の学びを振り返るとともに、今後に向けた探究テーマのキーワードの発表や全体共有を行った。

さらに、高大接続コア・センターの中野正俊特任助教が、KUGS 特別入試制度（※1）や金沢大学 STELLA プログラム（※2）などの案内を行った。

最後に、尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長から閉会挨拶があり、今後の探究・STEAM 教育に対する期待のメッセージを送った。

参加した高校生からは、「今までよく分からず行っていた探究学習について、やっと自分が知りたいと思える探究課題に出会え、探究の考え方を学ぶことができた」「様々な学校の生徒と話して物事の見方が変わり、また大学生の方々と交流することによって自分が探究したいことが明確になった」「探究活動を行う上で『データが集まらない』『対策が既存のものしか思いつかない』ことに困っていたが、実際に探究活動をしている大学生のみなさんから話を聞くことで、解決策のヒントとなる新しい学びを得ることができて有意義な時間となった」といった感想があった。また、アンケート結果でも、探究心が「とても高まった」という回答がもっとも多く、引率者の高校教員や父母等からも今後の継続開催を期待する声が寄せられた。

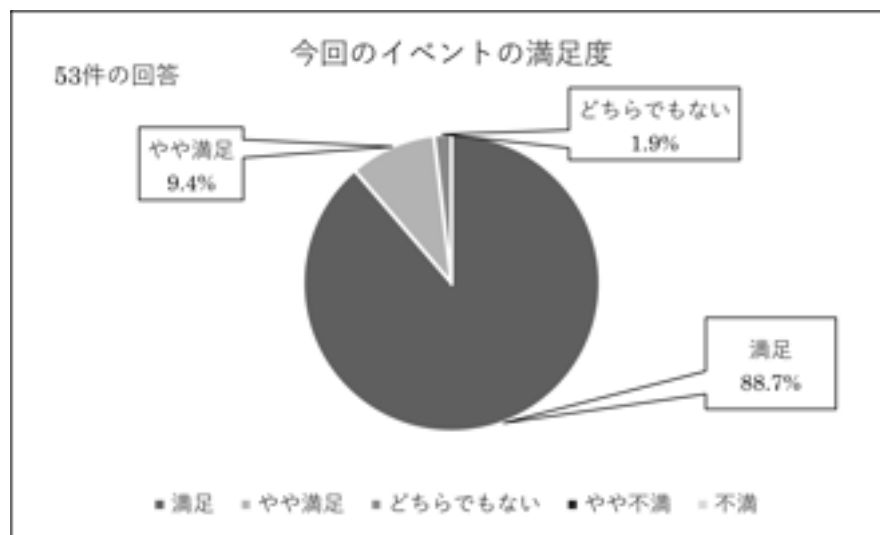
（※1）KUGS 特別入試制度：<https://www.kanazawa-u.ac.jp/admission/bachelor/kugs>

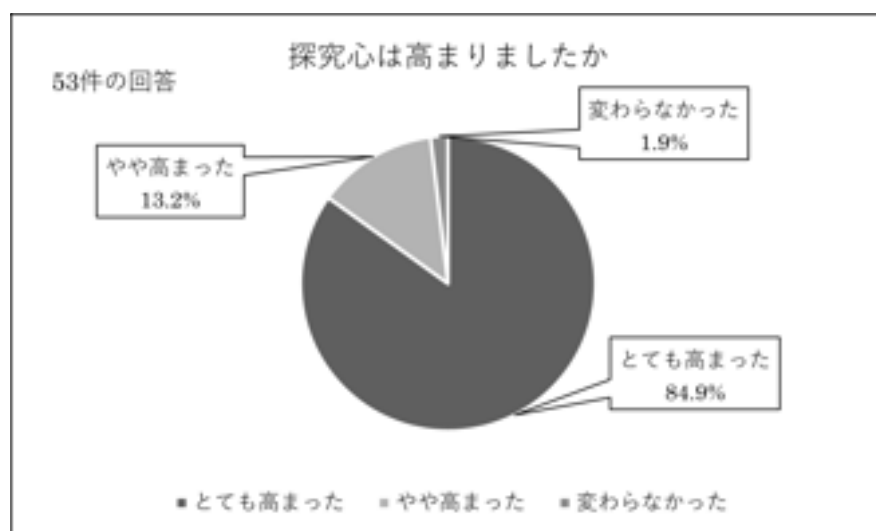
（※2）金沢大学 STELLA プログラム：<https://kustella.w3.kanazawa-u.ac.jp/>



図表Ⅶ-13 イベントの様子

参加者アンケート：





図表Ⅶ-14 探究・STEAM フェスタ 2024 参加者アンケート結果

10. 令和6年度第3回採択校連絡会

日 時：令和7年1月23日（木）15：00～15：50

場 所：Zoom によるオンライン開催

対 象：各採択校の事業実務担当者（教員・職員各1～2名程度）

参 加 者：42名

概 要：

- (1) 開会挨拶・説明
- (2) 共通テーマ3参加校合同主催「教学マネジメントセミナー2024」実施報告
- (3) 3月6日（木）「総括シンポジウム」全体構成及び分科会企画

内 容：

令和7年1月23日（木）、令和6年度第3回「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」採択校連絡会をオンライン開催し、メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲ採択校9大学の教職員ら42名が参加しました。採択校連絡会は、採択校9大学が本事業に関する意見交換を行う場として年に数回開催しているものである。

はじめに、金沢大学の尾島恭子副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長が開会挨拶をした。

次に、金沢大学教学マネジメントセンター副センター長の林透教授の進行のもと、「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」成果発信イベント第二弾として令和6年12月9日に開催した、共通テーマ3参加校合同主催「教学マネジメントセミナー2024」の実施報告を行った。続けて、林教授が、本事業成果発信イベント第三弾として、令和7年3月6日開催予定の文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）「総括シンポジウム」全体構成及び分科会企画について説明があり、幹事校からの依頼事項を確認の上、企画を進めることとした。

最後に、尾島副学長が閉会挨拶を行い、本事業最終年度におけるイベント企画を採択校9校が協働して進めていくことについて協力依頼があった。



図表Ⅶ-15 本学会場の様子

11. 文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）総括シンポジウム「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ ～DP 事業が目指し、創り上げてきた成果～」

日 時：令和 7 年 3 月 6 日（火）10：00～17：20

場 所：早稲田大学 早稲田キャンパス 14 号館

※対面，Zoom によるハイブリッド開催

参 加 者：192名

主 催：金沢大学（幹事校），早稲田大学，新潟大学，信州大学，大正大学，
東京都市大学，麻布大学，千葉大学，名古屋商科大学

概 要：

10：00～10：10 開会挨拶

早稲田大学副学長（教学統括（プロボスト／教務・研究推進・産学連携），
人事総括） 須賀 晃一

10：10～10：20 文部科学省来賓ご挨拶

10：20～11：00 基調講演

「知識集約型社会を支える人材育成が目指すもの」
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 監事／
芝浦工業大学 前学長 村上 雅人 氏

11：00～11：15 休憩

11：15～12：25 分科会セッション A

- ・分科会 1 早稲田大学
プログラム参加者の実体験から問うインテンシブ教育の意義
—境界を越えた学びの深化—
- ・分科会 2 東京都市大学
イノベーション未来を切り拓く：
次世代リーダー育成「東京都市大学ひらめき PG」の挑戦
- ・分科会 3 千葉大学
イシューを発見し，解決をめざすメリハリのあるターム運営
—千葉大学の取り組み—

12：25～13：10 休憩

13：10～14：20 分科会セッション B

- ・分科会 4 金沢大学
数字で振り返り展望する！
金沢大学融合学域・先導 STEAM 人材育成プログラムの成果
- ・分科会 5 新潟大学
知識集約型社会における新潟大学の挑戦：

- メジャー・マイナー制の戦略的全学展開
- ・分科会 6 大正大学
学生はいかにキャリアをデザインしたか
—学びの統合から未来を展望する—
- 14：20～14：30 休憩
- 14：30～15：40 分科会セッション C
- ・分科会 7 麻布大学
高校-大学-大学院を「好きを力に」でつなぐ自律的修学支援体制
—麻布大学出る杭—
 - ・分科会 8 信州大学
ライフクリエイター養成コース：
学際協働力と社会実装力を兼ね備えた AI 人材育成
 - ・分科会 9 名古屋商科大学
「ケースメソッド」と「フィールドメソッド」を組み合わせた
インテンシブ教育の軌跡
- 15：40～15：55 休憩
- 15：55～17：10 総括パネルディスカッション
[パネラー]
- 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 監事／
芝浦工業大学 前学長 村上 雅人 氏
京セラ株式会社 東京事業所長
兼 産学連携推進部責任者 大西 実 氏
金沢大学 副学長（教育改革・企画評価担当）／
教学マネジメントセンター長 尾島 恭子
麻布大学 大学教育推進機構教学 IR センター長／教授 菊水 健史
早稲田大学 社会科学部 教授 早田 宰
新潟大学 法学部 3 年次 青柳 匠馬
東京都市大学 理工学部 4 年次 加藤 凜香
[ファシリテーター]
- 一般社団法人 Q ラボ 代表理事／上智大学特任教授 松本 美奈 氏
- 17：10～17：20 閉会挨拶
- 金沢大学 理事（総括・大学改革・教育・情報担当）／副学長
森本 章治
（総合司会：金沢大学 教学マネジメントセンター副センター長／教授 林 透）

内 容：

令和 7 年 3 月 6 日（木）、文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）総括シンポジウム「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ ～DP 事業が目指し、創り上げてきた成果～」を、会場の早稲田大学 早稲田キャンパス 14 号館とオンラインのハイブリッドで開催し、学内外の教職員・学生 192 名が参加した。DP は、令和 2 年度・3 年度に公募され、メニューⅠ「文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム」・メニューⅡ「出る杭を引き出す教育プログラム」・メニューⅢ「インテンシブ教育プログラム」をテーマに 9 つの採択校が個性ある取組を推進してきた。

本事業最終年度にあたり、成果発信シリーズとして、8 月には東京都市大学を会場に第一弾「未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン）」を、12 月には大正大学を会場に第二弾「教学マネジメントセミナー2024」を開催してきた。第三弾として、本事業が目指し、創り上げてきた成果を社会に広く紹介し、新しい時代の大学教育につなぐメッセージを届けることを目的に、最後の総括シンポジウムを開催した。

はじめに、早稲田大学の須賀晃一副総長（教学統括（プロボスト／教務・研究推進・産学連携）、人事総括）が開会挨拶を行い、続いて、文部科学省高等教育局大学教育・入試課の石橋晶課長が来賓挨拶を行った。



▲開会挨拶をする須賀晃一副総長



▲文部科学省高等教育局大学教育・入試課の石橋晶課長による来賓挨拶

その後、総合司会で金沢大学教学マネジメントセンター副センター長の林透教授による開催趣旨と講師紹介を経て、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構監事／芝浦工業大学前学長の村上雅人氏が、「知識集約型社会を支える人材育成が目指すもの」と題し、大学教育の現状と課題、そして今後の展望について基調講演を行った。知識集約型社会における大学の役割のほか、教育改革の必要性について述べられ、日本の教育改革は長期的な視点で進めるべきだと強調した。



▲基調講演を行う村上雅人氏

続いて、各採択校の成果発表を行う分科会を行い、各テーマは以下のとおりである。

【分科会 1】早稲田大学

「プログラム参加者の実体験から問うインテンシブ教育の意義—境界を越えた学びの深化—」

【分科会 2】東京都市大学

「イノベーションで未来を切り拓く：次世代リーダー育成『東京都市大学ひらめき PG』の挑戦」

【分科会 3】千葉大学

「イシューを発見し、解決をめざすメリハリのあるターム運営—千葉大学の取り組み—」

【分科会 4】金沢大学

「数字で振り返り展望する！金沢大学融合学域・先導 STEAM 人材育成プログラムの成果」

【分科会 5】新潟大学

「知識集約型社会における新潟大学の挑戦：メジャー・マイナー制の戦略的全学展開」

【分科会 6】大正大学

「学生はいかにキャリアをデザインしたか—学びの統合から未来を展望する—」

【分科会 7】麻布大学

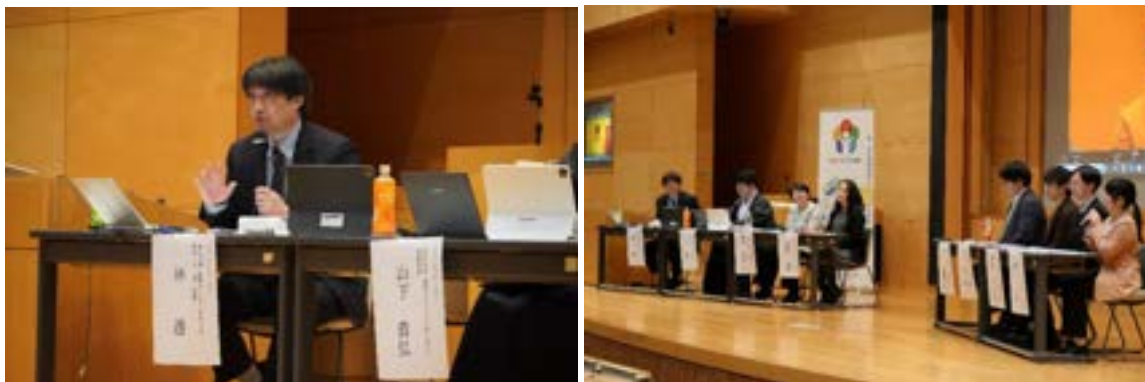
「高校・大学・大学院を『好きを力に』でつなぐ自律的修学支援体制—麻布大学出る杭—」

【分科会 8】信州大学

「ライフクリエイター養成コース：学際協働力と社会実装力を兼ね備えた AI 人材育成」

【分科会 9】名古屋商科大学

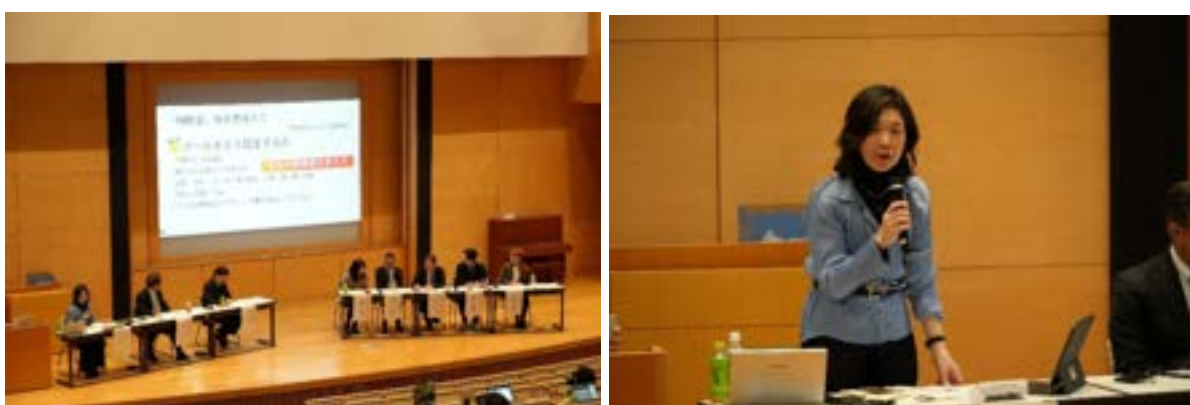
「『ケースメソッド』と『フィールドメソッド』を組み合わせたインテンシブ教育の軌跡」



▲分科会の様子

後半の総括パネルディスカッションでは、東京財団政策研究所研究主幹／教育ジャーナリストの松本美奈氏によるファシリテートのもと、基調講演者の村上氏に加えて、京セラ株式会社東京事業所長／産学連携推進部責任者の大西実氏、金沢大学副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長の尾島恭子教授、麻布大学大学教育推進機構教学IRセンター長の菊水健史教授、早稲田大学社会科学部の早田幸教授、新潟大学法学部3年次の青柳匠馬さん、東京都市大学理工学部4年次の加藤凜香さんの2名の学生を交えて、「社会を支える人材」を問うと題して、現在の教育の課題やDP事業の成果を踏まえ、これからの人材育成の在り方について鋭い問いを投げかけた。「教育が社会の価値観を変える力を持つ」ことを再確認し、今後の高等教育が果たすべき役割について意見を交わしたほか、参加者から寄せられた質問に沿って、「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ」に関する意見交換を行った。

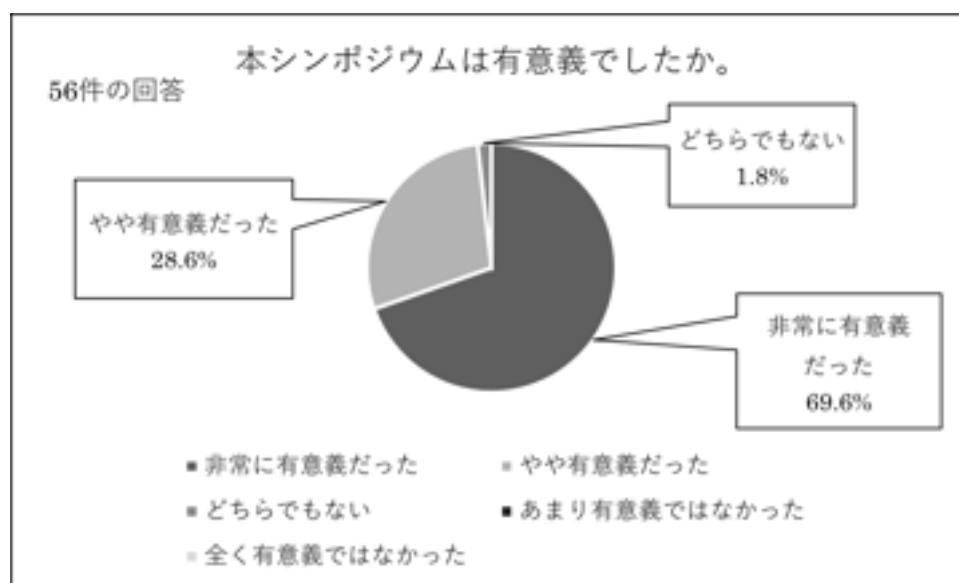
最後に、金沢大学の森本章治理事（総括・大学改革・教育・情報担当）／副学長が閉会挨拶を行った。



▲総括パネルディスカッションの様子

図表VII-16 シンポジウムの様子

参加者アンケート：



図表VII-17 総括シンポジウムアンケート集計結果

VIII. 活動日誌・編集後記

活 動 日 誌

(令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日)

年月日	活動内容
令和 6 年 4 月 22 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー & ガイダンス
令和 6 年 4 月 24 日 ～5 月 31 日	STEAM 教育に関する附属図書館企画展示
令和 6 年 4 月 25 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー & ガイダンス
令和 6 年 5 月 16 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 6 年 5 月 20 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 6 年 5 月 21 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 6 年 5 月 22 日	令和 6 年度第 1 回「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」 採択校連絡会
令和 6 年 6 月 5 日	第 1 回プログラム企画実行委員会
令和 6 年 7 月 2 日	ガクセイ社会科見学 (加賀建設株式会社)
令和 6 年 7 月 4 日	令和 6 年度第 2 回全学 FD 研修会「文理融合・STEAM 教育に関連した 授業設計とは ～教養教育, 専門教育など多様な観点から考える～」 【幹事校企画】
令和 6 年 7 月 24 日	「共通テーマ 3」第 1 回会議
令和 6 年 7 月 30 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) 修了者との懇談会
令和 6 年 8 月 28 日	知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP) 採択校合同企画「未来思考型 ワークショップ 2024 (アイデアソン) ～『知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)』が創造する大学教育の未来～」
令和 6 年 9 月 9 日	令和 6 年度第 1 回 FD・SD ラウンジ「国立大学における探究型入試の 今後の方向性」
令和 6 年 9 月 27 日	令和 6 年度第 3 回全学 FD 研修会・KU-DP アドバイザリーボード 「イシューベースラーニングのすすめ ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」
令和 6 年 9 月 27 日	「共通テーマ 2」第 1 回会議
令和 6 年 10 月 17 日	融合学域先導学類生と学類長との懇談会
令和 6 年 11 月 7 日	令和 6 年度第 2 回「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」 採択校連絡会
令和 6 年 11 月 7 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー

令和 6 年 11 月 8 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 6 年 11 月 12 日	ガクセイ社会科見学 (株式会社ハチバン)
令和 6 年 11 月 13 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 6 年 11 月 28 日	「共通 3 テーマ」第 2 回会議
令和 6 年 11 月 29 日	令和 6 年度第 2 回 FD・SD ラウンジ「DX・IR に関する取組紹介と今後の可能性 ～身近なソフトウェア活用から Microsoft365 や生成 AI の活用事例まで～」
令和 6 年 12 月 5 日	「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」共通テーマ 2 参加校合同主催『文理融合教育における課題設定のあり方』最終報告会
令和 6 年 12 月 9 日	「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」共通テーマ 3 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024「分野横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える ～文理融合・STEAM 教育の時代における新しい学修支援～」
令和 6 年 12 月 15 日	金沢大学 高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAM フェスタ 2024 ～高校生の探究心に火を灯す～」
令和 7 年 1 月 23 日	令和 6 年度第 3 回「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」採択校連絡会
令和 7 年 3 月 6 日	文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP) 総括シンポジウム「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ ～DP 事業が目指し、創り上げてきた成果～」
令和 7 年 3 月 13 日	第 2 回プログラム企画実行委員会
令和 7 年 3 月 14 日	第 1 回プログラム運営委員会
令和 7 年 3 月 28 日	令和 6 年度外部評価委員会

編集後記

令和 6 年度は、文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）（メニュー I：文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム）にとって、補助事業最終年度に当たり、これまでの事業取組の真価が問われました。

融合学域では、先導学類 1 期生 50 名が卒業を迎え、企業就職や大学院進学という新しいステージに向けて羽ばたきます。今後は、これら卒業生の社会での活躍を通して、文理融合教育の意義や価値を検証していく必要があります。

全学域学生対象の「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）」では、共通教育科目 GS 科目 6 群及び学域 GS 科目を有効活用した新カリキュラムを通して、402 名の修了者（令和 7 年 1 月現在）を輩出することができました。それぞれの専門に依拠した学位プログラムに留まらず、KU-STEAM のカリキュラムを受講することで、「学びの幅と深さ」を備えた人材の育成をさらに続けていきます。

文理融合・STEAM 教育による人材育成には、ステークホルダーと協働したエコシステムの構築が必須であり、令和 4 年度以降、エコシステムの“川上”に当たる高大連携を目的とした「探究・STEAM フェスタ」，“川下”に当たる地域や企業等の関係者とのアドバイザーボードの開催を通して、人材育成の協働化と価値共有を推進してきました。このような取組が評価され、令和 7 年 3 月には、一般社団法人学びのイノベーション・プラットフォーム主催の第 1 回「PLIJ STEAM・探究グランプリ」を受賞しました。

カリキュラム開発から始まり、学内外との相互連携や情報発信を積み重ね、その成果がやっと目に見えるようになった年度でした。本事業をキッカケとして育んできた取組を基礎にして、新しい時代の大学教育への架け橋となっていきたいと思います。

引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

金沢大学 教学マネジメントセンター副センター長・教授 林 透

「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP 事業）」の推進に際して、多大なるご支援と協力を賜りました教職員、学生、そして企業・自治体等のステークホルダーの皆様にご心から感謝を申し上げます。みなさまと共に築き上げた、分野横断・文理融合教育の取り組みは、多様な学問領域を横断し、社会との連携を強化することが可能となり、次世代を担う人材の育成における新しい教育モデルを形成することができました。これにより、現在の課題を解決するとともに、本学が目指すビジョン『志』の「未来の課題を探索し克服する知恵「未来知」により社会貢献」の一助になったと考えています。

今後も DP 事業が示す成果を基に、ステークホルダーの皆様とさらなる教育の質の向上を目指して参ります。引き続き、Society 5.0 時代を共に歩んでいくことを心より願っています。

金沢大学 教学マネジメントセンター特任助教 山下 貴弘

金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）アニュアルレポート 2024

発 行 : 金沢大学 教学マネジメントセンター
〒920-1192 石川県金沢市角間町
2025 年 3 月 発行

